

# **溝之口遺跡発掘調査報告書IV・ 美乃利遺跡発掘調査報告書I**

2018

加古川市教育委員会



# **溝之口遺跡発掘調査報告書IV・ 美乃利遺跡発掘調査報告書I**

2018

加古川市教育委員会





写真 1 溝之口遺跡上空から横濱市を望む（北東から）

卷頭図版 2

溝之口遺跡



写真2 溝之口遺跡1区（写真下が西）



写真3 溝之口遺跡4区（写真下が南西）



写真4 溝2（北から）



写真5 溝2 出土遺物



写真6 溝之口遺跡 平成26年度調査区（北から）



写真7 井戸1（北東から）



写真8 美乃利遺跡上空から日岡山を望む（南西から）

卷頭図版 6

美乃利遺跡



写真9 美乃利遺跡2区（写真下が南西）



写真10 積穴建物2～4（南から）



写真 11 積穴建物 4（南西から）



写真 12 積穴建物 4 床面状況（南から）



写真 13  
竪穴建物 4  
炉跡上層  
(北東から)



写真 14  
竪穴建物 4  
炉跡下層  
(北東から)



写真 15  
竪穴建物 4  
炉跡完掘状況  
(北東から)



写真 16 横穴建物 4 出土土器



写真 17 横穴建物 4 出土石器



写真 18 整穴建物 2（西から）



写真 19 整穴建物 2 出土遺物



写真 20  
土坑 1 (南から)



写真 21 土坑 1  
出土遺物



写真 22 土坑 1  
装飾器台



写真23 溝1（中央）・3（右）遺物出土状況（南東から）



写真24 溝1 出土遺物

## 序 文

加古川市は、播磨平野の東部を流れる一級河川加古川の恵みにより、古くから人々が暮らす豊かな地域です。発掘調査を行うと、その確かな痕跡が地中から姿を現します。

このたび完成した本書は、加古川下流域を代表する溝之口遺跡・美乃利遺跡の発掘調査報告書です。

溝之口遺跡は、市内でも有数の大規模集落遺跡として広く知られており、これまでも開発に伴う多くの調査が実施され、加古川下流域における歴史を考える上で様々な情報を提供しています。

美乃利遺跡は、過去の調査事例は少ないものの、今回の調査を経て、溝之口遺跡にも匹敵する貴重な調査成果を得ることができました。

本書の刊行が、市民の方々にとって郷土の歴史・文化を理解する資料として、また文化財保護へのご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、現地での発掘調査実施及び報告書作成にあたり、多大なご協力をいただきました地元住民の方々や関係機関、関係各位に厚くお礼申しあげます。

平成 30 年 3 月

加古川市教育委員会  
教育長 田淵博之



## 例　　言

- ・本書は、兵庫県加古川市加古川町美乃利、大野地内に所在する溝之口遺跡、美乃利遺跡の発掘調査報告書である。
- ・この調査は、加古川市が進める都市計画事業のうち、市道平野神野線改良工事に伴って実施した。上記事業のうち、埋蔵文化財に関する調査は、加古川市教育委員会が主体となって実施した。
- ・発掘調査は3回に分けて実施し、溝之口遺跡は平成26年度事業（平成26（2014）年12月9日から同年12月26日まで）と平成27年度事業（平成27（2015）年8月10日から同年11月24日まで）の2回を行い、美乃利遺跡は平成27年度事業として平成27（2015）年11月25日から翌年3月18日までの期間において実施した。
- ・整理作業及び報告書作成は、平成28（2016）年8月3日に開始し、平成30（2018）年3月31日の報告書刊行をもって終了した。
- ・本調査は、加古川市教育委員会が実施し、安西工業株式会社及び株式会社アコードの協力を得た。また、整理作業から報告書刊行まで、加古川市文化財審議委員 友久伸子氏に多大なるご協力を賜った。
- ・本調査の調査体制は以下のとおりである。

### 加古川市教育委員会

教育長	田淵博之
教育指導部	
部 長	松尾達弥（平成26年度）、日浦明彦（平成27・28年度）、大西隆博（平成29年度）
調整担当部長	井部浩司（平成29年度）
次 長	高田良彦（平成26年度）、谷池正春（平成27・28年度）
文化財調査研究センター	
所 長	鶴谷 茂（平成26・27年度）、梶浦 匠（平成28年度）、沼田好博（平成29年度）
副所長	宮本佳典

### 調査担当

発掘調査担当	平成26年度	埋蔵文化財専門員 永恵陽子
	平成27年度	埋蔵文化財専門員 西森忠幸、学芸員 山中リュウ
整理作業担当	平成28年度	学芸員 山中リュウ、平尾英希
	平成29年度	学芸員 山中リュウ、平尾英希、淺井達也、 埋蔵文化財専門員 西岡巧次
報告書作成担当	平成29年度	学芸員 山中リュウ

### 事務担当

平成26年度	庶務担当係長	由井 章、主査 本川友子
平成27・28年度	庶務担当係長	由井 章、主査 藤原典子
平成29年度	庶務担当係長	安田啓一郎、主査 藤原典子

- ・遺物の水洗は、加古川市臨時職員 平宮可奈子及び安西工業株式会社が実施した。
- ・遺物の注記・接合・復元は、加古川市臨時職員 嶋田美佳、佐藤 薫、平宮、前川博子及び株式会社アコードが実施した。
- ・遺物の実測は、友久、西岡の指導のもと、加古川市臨時職員 園原悠斗（立命館大学大学院）、林弘幸（大手前大学大学院）、吉村慎太郎（立命館大学大学院）及び株式会社アコードが実施した。
- ・遺物の実測図及び遺構図のトレースは、友久、嶋田、佐藤、園原、林、前川、吉村及び株式会社アコードが実施した。
- ・遺物観察表の作成は、弥生土器については友久、土師器・須恵器及び縄文土器については西岡、鉄器については平尾、石器については園原が行った。
- ・遺構写真の整理は、加古川市臨時職員 井上かおりが行った。
- ・本書に掲載の遺構写真是西森、山中が撮影し、遺物写真是平尾、宮本及び株式会社アコードが撮影した。写真 171 に掲載の棒状鉄片（M1）のX線写真是、大手前大学史学研究所から提供を受けた。
- ・本書の執筆は、山中リュウ、友久伸子、西岡巧次、淺井達也、平尾英希、園原悠斗が行い、執筆の分担は目次に記した。編集は友久が補助し、山中が担当した。
- ・本調査において得られた諸資料・出土遺物は、加古川市教育委員会が保管・管理している。
- ・発掘調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々や諸機関からご指導、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

朝井琢也 荒木幸治 荒田敬介 池田征弘 上田健太郎 上田哲也 上峯篤史 大北 浩  
大本朋弥 岡田 功 岡本一士 小川弦太 奥山 貴 垣内拓郎 木内内則 桐井理揮  
國下多美樹 上月昭信 是川 長 佐古雄紀 篠宮 正 清水一文 鈴木貴久美 菅原康夫  
多賀茂治 種定淳介 丹治康明 戸塚洋輔 中溝康則 西村秀子 白谷朋代 萬代和明  
森内秀造 森岡秀人 森下章司 森下大輔 山田清朝 山本三郎 山本 誠 山本祐作  
山本 亮 若林邦彦 渡辺 昇

大手前大学史学研究所 協永電機株式会社 東溝之口町内会 兵庫県教育委員会

## 凡　　例

- ・本文中ならびに挿図中における標高は、東京湾平均海面（T.P）を用いた。また、遺構全体図中の座標値は、世界測地系（第V系）に基づき、作図段階で設定したものである。
- ・上記の座標を基準とし、調査区全域に5m間隔のグリッドを設定した。
- ・本書に掲載の遺構番号は、整理作業時に掲載遺構として抽出したもののみについて、各遺跡内での遺構種別ごとに通し番号を付した（例：溝1、竪穴建物1など）。
- ・本書中の挿図の縮尺は、遺構図は1/40を基本とし、遺物実測図は1/4を基本とした。上記と縮尺が異なる場合は個別に明示した。
- ・遺構図における線種・線号は以下のとおりである。
  - ・調査区（実線・0.4mm）、遺構の上端（実線・0.3mm）、遺構の中端（実線・0.2mm）、  
遺構の下端（実線・0.1mm）、擾乱（実線・0.1mm）、復元線・隠れ線（破線）
- ・本書に掲載の遺物実測図は、遺跡や出土した遺構にかかわらず通し番号を付している。なお、土器類は番号のみとし、石器類は番号の前にS、金属製品はM、装身具はJと表記し、それぞれに通し番号を付した。
- ・遺物実測図中の線種は、外形線・中心線・区画線は実線、ナデによる稜線は破線、ケズリによる稜線は実線で示した。また、須恵器、黒色土器、陶器の断面は黒塗りで表現している。
- ・本文中や遺物観察表における遺物の器種名は、「壺」「甕」などの簡易な表現とし、「○○形土器」という表現は用いていない。
- ・土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所『新版標準土色帖』（2014年版）に準じた。
- ・遺物観察表の計測値で用いている「＊」は復元値、「>」は残存値を表す。
- ・出土遺物のうち、弥生土器の分類や年代観については『弥生土器集成と編年 一播磨編一』大手前大学史学研究所（2007）を、土師器・須恵器の分類や年代観については『古代の土器1 都城の土器集成』古代の土器研究会（1992）等を参照した。
- ・本文中における「弥生土器」「弥生時代」の表記については、弥生時代終末期から古墳時代初頭を含むとされる庄内式併行期の遺構や遺物を含めており、文中では「終末期（庄内期）」という表現で統一している。

## 目 次

卷頭写真

序文

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 はじめに .....	1
第1節 遺跡の位置 .....	(山中リュウ) 1
第2節 調査に至る経緯と経過 .....	(山中) 1
第3節 地理的環境 .....	(山中) 7
第4節 歴史的環境 .....	(山中) 8
第Ⅱ章 溝之口遺跡の調査成果 .....	14
第1節 既往の調査 .....	(淺井達也) 14
第2節 基本層序 .....	(山中) 18
第3節 検出遺構 .....	(山中) 18
第4節 出土遺物 .....	(友久伸子・西岡巧次・山中・園原悠斗) 36
第Ⅲ章 美乃利遺跡の調査成果 .....	63
第1節 既往の調査 .....	(淺井) 63
第2節 基本層序 .....	(山中) 66
第3節 検出遺構 .....	(山中) 66
第4節 出土遺物 .....	(友久・西岡・山中・平尾英希・園原) 94
第Ⅳ章 まとめ .....	123
第1節 土地利用の変遷 .....	(山中) 123
第2節 美乃利遺跡の竪穴建物4について .....	(園原) 133

図版

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置 .....	2	第13図 溝3・8・9 .....	26
第2図 事業範囲と発掘調査範囲 .....	3	第14図 溝4(1) .....	27
第3図 発掘調査時の調査区分 .....	5	第15図 溝4(2) .....	28
第4図 調査地周辺の旧地形 .....	7	第16図 溝5 .....	28
第5図 周辺の道路 .....	10	第17図 溝6 .....	29
第6図 既往の調査地点 .....	15	第18図 溝7 .....	30
第7図 遺構配置図 .....	19・20	第19図 溝10 .....	32
第8図 基本層序 .....	21	第20図 溝12 .....	33
第9図 井戸1 .....	22	第21図 溝13 .....	34
第10図 溝1 .....	23	第22図 溝14 .....	35
第11図 溝2・11 .....	24	第23図 井戸1・溝1-①出土遺物 .....	45
第12図 溝2 遺物出土状況 .....	25	第24図 溝1-②・2-①出土遺物 .....	46

第25回	溝2-②出土遺物・	47	第55回	溝6	89
第26回	溝2-③出土遺物・	48	第56回	井戸1	90
第27回	溝2-④-3-①出土遺物・	49	第57回	土坑6	91
第28回	溝3-②出土遺物・	50	第58回	溝7	92
第29回	溝3-③出土遺物・	51	第59回	溝8	93
第30回	溝3-④-4-5出土遺物・	52	第60回	土坑7	94
第31回	溝6-7-8出土遺物・	53	第61回	豊穴建物1-3出土遺物・	104
第32回	溝9-10-11-①出土遺物・	54	第62回	豊穴建物4-①出土遺物・	105
第33回	溝1-②-12-13-①出土遺物・	55	第63回	豊穴建物4-②出土遺物・	106
第34回	溝13-②出土遺物・	56	第64回	豊穴建物4-③土坑1出土遺物・	107
第35回	溝14-その他出土遺物・	57	第65回	土坑2-3-4出土遺物・	108
第36回	既往の調査地点・	63	第66回	溝1-①出土遺物・	109
第37回	遺構配置図(全体)・	64-65	第67回	溝1-②-2-3出土遺物・	110
第38回	基本断手・	67-68	第68回	溝4-①出土遺物・	111
第39回	遺構配置図(1区)・	69-70	第69回	溝4-②-土坑5出土遺物・	112
第40回	遺構配置図(2-3区)・	71-72	第70回	溝5-6-井戸1出土遺物・	113
第41回	豊穴建物1・	73	第71回	土坑6-溝7-①出土遺物・	114
第42回	豊穴建物2・	75	第72回	溝1-②-8出土遺物・	115
第43回	豊穴建物3・	77	第73回	その他①出土遺物・	116
第44回	豊穴建物4・	79	第74回	その他②出土遺物・	117
第45回	土坑1・	81	第75回	溝2-②-豊穴の時期別遺構変遷(1)・	124
第46回	土坑2・	81	第76回	溝2-③-豊穴の時期別遺構変遷(2)・	125
第47回	土坑3・	82	第77回	方形周溝式豊穴・土坑群・	125
第48回	土坑4・	82	第78回	溝2出土の器鉢土器群・	126
第49回	溝1-3-遺物出土状況・	82	第79回	美乃利道路の時期別遺構変遷(1)・	128
第50回	溝1-3-遺物出土状況・	84	第80回	美乃利道路の時期別遺構変遷(2)・	129
第51回	土坑5・	85	第81回	美乃利道路の時期別遺構変遷(3)・	130
第52回	溝2・	86	第82回	豊穴建物4-遺物出土位置・	134
第53回	溝4・	87	第83回	最治や跡断面の解説・	135
第54回	溝5・	88			

## 表 目 次

表1	周辺の遺跡・	11	表9	石器・玉類・鉄器観察表・	103
表2	既往の調査地点・	16	表10	遺物観察表(1)・	118
表3	石器観察表・	44	表11	遺物観察表(2)・	119
表4	遺物観察表(1)・	58	表12	遺物観察表(3)・	120
表5	遺物観察表(2)・	59	表13	遺物観察表(4)・	121
表6	遺物観察表(3)・	60	表14	遺物観察表(5)・	122
表7	遺物観察表(4)・	61	表15	豊穴建物一覧表・	132
表8	遺物観察表(5)・	62	表16	A 地点検出の豊穴建物一覧表・	132

## 図 版 目 次

写真1	溝之口道路1区・	卷頭版2	写真30	井戸1 土層断面・	園版2
写真3	溝之口道路4区・	卷頭版2	写真31	井戸1 遺物出土状況・	園版2
写真4	溝2・	卷頭版3	写真32	井戸1 出土遺物・	園版2
写真5	溝2-出土遺物・	卷頭版3	写真33	溝1・	園版3
写真6	溝2-道路 平成26年度調査区・	卷頭版4	写真34	土1 土層断面・	園版3
写真7	井戸1・	卷頭版4	写真35	溝1 遺物出土状況・	園版3
写真8	美乃利道路上空から日岡山を望む・	卷頭版5	写真36	井戸1 出土土器・	園版3
写真9	美乃利道路2区・	卷頭版6	写真37	出土遺物・	園版3
写真10	豊穴建物2~4・	卷頭版6	写真38	溝2-11 檻出状況・	園版4
写真11	豊穴建物4-	卷頭版7	写真39	溝2-11 完成状況・	園版4
写真12	豊穴建物4 床面状況・	卷頭版7	写真40	土2 土層断面・	園版4
写真13	豊穴建物4 炉跡上層・	卷頭版8	写真41	溝2 遺物出土状況・	園版4
写真14	豊穴建物4 炉跡下層・	卷頭版8	写真42	出土遺物近景(1)・	園版4
写真15	豊穴建物4 炉跡完掘状況・	卷頭版8	写真43	出土遺物近景(2)・	園版4
写真16	豊穴建物4 出土土器・	卷頭版9	写真44	出土遺物近景(3)・	園版4
写真17	豊穴建物4 出土石器・	卷頭版9	写真45	出土遺物近景(4)・	園版4
写真18	豊穴建物2-4-出土遺物・	卷頭版10	写真46	溝3-8-9 檻出状況・	園版5
写真19	豊穴建物4-出土遺物・	卷頭版10	写真47	溝3-8-9 完成状況・	園版5
写真20	土坑1・	卷頭版11	写真48	土3 土層断面・	園版5
写真21	土坑1 出土遺物・	卷頭版11	写真49	遺物出土状況・	園版5
写真22	土坑1 装飾器台・	卷頭版11	写真50	出土遺物・	園版5
写真23	溝1-3 遺物出土状況・	卷頭版12	写真51	溝4 土層断面・	園版6
写真24	溝1 出土遺物・	卷頭版12	写真52	土層断面・	園版6
写真25	S16の溝状軸・	卷頭版12	写真53	遺物出土状況・	園版6
写真26	微小鉗片・	卷版1	写真54	遺物出土状況・	園版6
写真27	溝之口道路上空から日岡山を望む・	卷版1	写真55	出土遺物・	園版6
写真28	井戸1 檻出状況・	卷版2	写真56	溝1-6 檻出状況・	園版7

写真57	溝 6 土層断面	図版7	写真123	窓穴建物 4	炉跡燃焼部	図版32
写真58	溝 7	図版7	写真124	窓穴建物 4	炉跡燃焼部断面	図版32
写真59	溝 7 土層断面	図版7	写真125	窓穴建物 4	炉跡燃焼部全貌	図版32
写真60	溝 8・9	図版7	写真126	窓穴建物 4	炉跡を囲う土堤断面	図版32
写真61	溝 8・9 土層断面	図版7	写真127	土坑 1	遺物出土状況	図版33
写真62	溝10	図版7	写真128	土坑 1	土層断面	図版33
写真63	溝10 遺物出土状況	図版7	写真129	土坑 2	遺物出土状況	図版33
写真64	溝11 南側	図版8	写真130	土坑 2	土層断面	図版33
写真65	溝11 土層断面	図版8	写真131	土坑 2	出土遺物	図版33
写真66	溝13	図版8	写真132	土坑 3	土層断面	図版34
写真67	溝13 土層断面	図版8	写真133	土坑 4	遺物出土状況	図版34
写真68	溝13 出土遺物	図版8	写真134	溝 1・3	検出状況	図版34
写真69	基本層	図版9	写真135	溝 1・3 遺物出土状況(1)	図版34	
写真70	北側旧自然地盤断面	図版9	写真136	溝 1・3 遺物出土状況(2)	図版34	
写真71	作業風景(1)	図版9	写真137	土層断面	図版34	
写真72	作業風景(2)	図版9	写真138	溝 2	土層断面	図版34
写真73	作業風景(3)	図版9	写真139	溝 2 土層断面	図版34	
写真74	作業風景(4)	図版9	写真140	出土遺物	図版35	
写真75	作業風景(5)	図版9	写真141	溝 4・6 検出状況	図版35	
写真76	作業風景(6)	図版10	写真142	溝 4 土層断面	図版35	
写真77	其湖遺物 1 ~ 5・7~11	図版11	写真143	溝 4 土層断面	図版35	
写真78	其湖遺物 12~18・21~22・24~26・32	図版12	写真144	作業風景	図版35	
写真79	其湖遺物 13~17・31~34	図版12	写真145	出土遺物	図版36	
写真80	其湖遺物 35~37	図版13	写真146	土坑 5	土層断面	図版36
写真81	其湖遺物 44~46~48~50~51	図版14	写真147	土坑 5	土層断面	図版36
写真82	其湖遺物 52~53~59~61~63~64~66~70~71	図版15	写真148	土坑 5	土層断面	図版36
写真83	其湖遺物 72~75~78~81	図版16	写真149	土坑 5 土層断面	図版36	
写真84	其湖遺物 85~87~89~93~96~98	図版17	写真150	井戸 1	井戸開拓出状況	図版37
写真85	其湖遺物 99~101~105~107~110~111~113~114	図版18	写真151	井戸 1 井戸 1	井戸開拓出状況 土層断面(下層)	図版37
写真86	其湖遺物 17~19~126~129~131~133	図版19	写真152	井戸 1	土層断面(下層)	図版37
写真87	其湖遺物 134~135~137~142~145~149~150	図版20	写真154	土坑 6	完掘状況(1)	図版37
写真88	其湖遺物 154~155~157~159, S 5	図版21	写真155	土坑 6	完掘状況(2)	図版37
写真89	其湖遺物 160~164~166~169~170, S 7	図版22	写真156	土坑 6	土層断面	図版37
写真90	其湖遺物 172~175~178~181~184~191~193	図版23	写真157	土坑 6	遺物出土状況	図版37
写真91	其湖遺物 188~194~200~204~206	図版24	写真158	講 7 東側(1)	図版38	
写真92	其湖遺物 207~208~210~211~213~214	図版25	写真159	講 7 西側(1)	図版38	
写真93	美乃利遺跡 上から 1~2 などの台地を望む	図版26	写真160	講 7 東側(2)	図版38	
写真94	美乃利遺跡 1 区	図版27	写真161	講 7 土層断面	図版38	
写真95	美乃利遺跡 2 区	図版27	写真162	出土遺物	図版38	
写真96	窓穴建物 1 植出状況	図版28	写真163	講 8	図版38	
写真97	窓穴建物 1 完掘状況(1)	図版28	写真164	土坑 7	図版39	
写真98	窓穴建物 1 完掘状況(2)	図版28	写真165	土坑 7	遺物出土状況	図版39
写真99	窓穴建物 1 中央土坑	図版28	写真166	作業風景(1)	図版39	
写真100	窓穴建物 1 出土遺物	図版29	写真167	作業風景(2)	図版39	
写真101	窓穴建物 2 植出状況	図版29	写真168	作業風景(3)	図版39	
写真102	窓穴建物 2 完掘状況(1)	図版29	写真169	作業風景(4)	図版39	
写真103	窓穴建物 2 完掘状況(2)	図版29	写真170	作業風景(5)	図版39	
写真104	窓穴建物 2 中央土坑植出状況	図版29	写真171	其湖遺物 15~216~220~223~225~228, J 1, M 1	図版40	
写真105	窓穴建物 2 北東隅炭化物集中部(1)	図版29	写真172	其湖遺物 229~236~237~239~243	図版41	
写真106	窓穴建物 2 北東隅炭化物集中部(2)	図版29	写真173	其湖遺物 244~247~250~252~254~255	図版42	
写真107	窓穴建物 2 西隅壁構造に堆積する炭化層	図版29	写真174	其湖遺物 258~259~261~264~267~270~272~273~275 277~279~280	図版43	
写真108	窓穴建物 2	図版29	写真175	其湖遺物 281~282~284~285, S 10	図版44	
写真109	窓穴建物 3~4 完掘状況	図版30	写真176	其湖遺物 286~290~292	図版45	
写真110	窓穴建物 3 完掘状況(1)	図版30	写真177	其湖遺物 293~296~299~305	図版46	
写真111	窓穴建物 3 完掘状況(2)	図版30	写真178	其湖遺物 306~309~314	図版47	
写真112	窓穴建物 3 炉跡	図版30	写真179	其湖遺物 316~318~320~324~326~330~331~334	図版48	
写真113	窓穴建物 3 出土遺物	図版30	写真180	其湖遺物 335~338~341~343~344~346~348~353	図版49	
写真114	窓穴建物 2~4	図版31	写真181	其湖遺物 354~361~362~363~364~365~366~367~368~369~370~371~372~375~379~381	図版50	
写真116	窓穴建物 4 植出状況	図版31	写真182	其湖遺物 363~369~371~372~375~379~381	図版51	
写真117	窓穴建物 4 完掘状況(1)	図版31	写真183	其湖遺物 382~384~388~391~393~394~396~408, S 17~	図版52	
写真118	窓穴建物 4	図版31	写真184	其湖遺物 409~410~412~415~419~421~423	図版53	
写真119	窓穴建物 4 遺物出土状況(1)	図版32	写真185	其湖遺物 420~422~424~427, S 18~S 19~	図版54	
写真120	窓穴建物 4 出土遺物状況(2)	図版32				
写真121	窓穴建物 4 炉跡上層	図版32				
写真122	窓穴建物 4 炉跡下層	図版32				

## 第1章 はじめに

### 第1節 遺跡の位置

溝之口遺跡及び美乃利遺跡は、加古川市加古川町溝之口、美乃利及び大野地内に所在する弥生時代から中世までの複合遺跡である（第1図）。

両遺跡の所在する加古川町は、一級河川加古川下流域の左岸に位置し、JR加古川駅や商業施設、行政施設などが集中する加古川市の中心市街地である。加古川駅付近は、その利便性から中高層の住宅が多く、国道2号線などの幹線道路が東西に貫いている。一方、日岡山や加古川河川敷など緑豊かな公園があり、鶴林寺、称名寺、日岡神社などの古社寺も多い。

加古川町の溝之口・美乃利地域は、市内有数の住宅地として、都市化する駅前周辺地域と一体的な発展を見せてている。一方で、近郊の田園地域とも接しており、加古川駅周辺の都市化により景観が大きく変化した地域といえる。

### 第2節 調査に至る経緯と経過

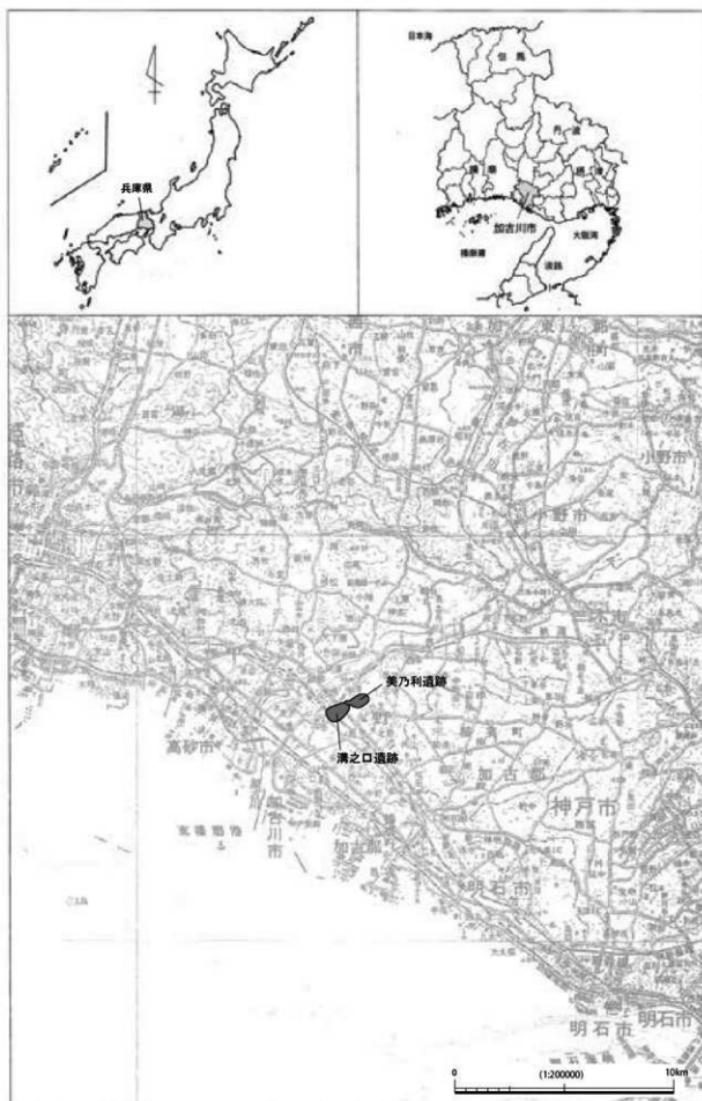
**調査に至る経緯** 加古川市は、都市計画事業に基づき市内の道路改良事業を進めており、平成26（2014）年度の事業として市道平野神野線区間の工事を計画した（第2図）。

工事着手に先立ち、加古川市教育委員会（以下「市教委」という。）は、道路事業の担当課である道路建設課から当該地における埋蔵文化財の存否確認の照会を受けた。市教委は、照会地の一部が文化財保護法（以下「法」という。）第94条第1項の規定に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地「溝之口遺跡」「美乃利遺跡」に該当することを伝え、工事着手前に法に基づく通知が必要である旨の回答を行うとともに、工事による掘削が地中の埋蔵文化財への程度影響を及ぼすかを調べるために、事前の確認調査・試掘調査への協力を依頼した。

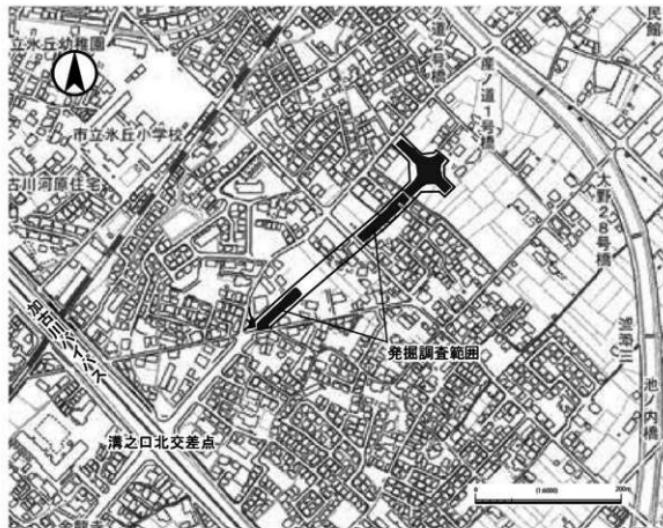
その後、下水道課など関係各課を含めた協議、調整を経て、全体の工事計画に合わせて段階的に確認調査を進めることとし、平成26年7月14日付けで溝之口遺跡・美乃利遺跡の発掘届が市教委へ提出された。

市教委は、平成26年9月8日から11日にかけて、現状における遺跡範囲について確認調査を実施した。合計32m<sup>2</sup>の確認調査を実施した結果、各調査区から弥生時代及び奈良・平安時代を中心とする遺構・遺物を確認した。また、事業計画地のうち包蔵地の範囲外にあたる場所について分布調査を実施したところ、複数の遺物を採集したことから、市教委は包蔵地の範囲について再検討を行い、新たに遺物が発見された部分を美乃利遺跡の一部と判断し、兵庫県教育委員会（以下「県教委」という。）へ包蔵地の範囲変更手続きを行った。

平成26年10月1日付けで、県教委から両遺跡について本発掘調査を実施する必要がある旨の通知があったことから、市教委と道路建設課は協議を重ね、道路予定地内の車道部分について本発掘調査を実施することとした。本発掘調査にあたっては、先行して工事を進める必要のある溝之口遺跡範囲の南西部分約70m<sup>2</sup>について、平成26年度事業として実施し、残りの範囲と美乃利遺跡の範囲については、平成27年度に実施することとした。平成26年度の調査については、平成26年12月9日から



第1図 遺跡の位置(『溝之口遺跡』図版1 兵庫県教育委員会 2006年より作成)



第2図 事業範囲と発掘調査範囲

12月26日まで実施した。

平成27（2015）年度は、遺跡の範囲を変更した美乃利遺跡について、平成27年4月1日付けで発掘届が道路建設課から市教委へ再度提出された。市教委は、前年度に引き続き本発掘調査を実施することを見据え、本発掘調査の対象範囲を絞り込むため、新たに美乃利遺跡として包蔵地認定された範囲を中心に合計46m<sup>2</sup>の確認調査を実施した。この結果を受け、県教委から同年8月17日付けで、前年度に引き続いて美乃利遺跡について本発掘調査が必要である旨の通知があり、市教委は担当各課との本格的な協議に入った。平成27年度は、溝之口遺跡の残り部分800m<sup>2</sup>と、新たに対象となった美乃利遺跡2,820m<sup>2</sup>について本発掘調査を実施した。発掘調査期間は、溝之口遺跡が平成27年8月10日から11月24日まで、美乃利遺跡が同年11月25日から平成28（2016）年3月18日までである。

### 調査の経過

<溝之口遺跡>

#### 平成26年度調査

平成26（2014）年

12月9日：平成26年度調査として70m<sup>2</sup>の発掘調査に着手。表土掘削開始。

12月10日：表土掘削と並行して遺構検出作業開始。遺物包含層中に多くの土器が含まれていることを確認。

12月15日：遺構検出状況の全景写真撮影を実施。遺構精査開始。

12月17日：各遺構の断面図化作業開始。

12月18日：各遺構の平面図化作業開始。隨時記録写真撮影。

12月19日：完掘後の全景写真撮影を実施。継続して平面図化作業。

12月22日：埋戻し作業開始。

12月26日：平成26年度調査終了。片づけ、資材撤収。

### 平成27年度調査

平成27（2015）年

8月10日：平成27年度調査として800m<sup>2</sup>の発掘調査に着手。地元住民との協議により、調査区を4分割して調査を実施することになる（第3図）。1区の舗装面をコンクリートカッターで切断したのち表土掘削を開始。

8月12日：1区と並行して、北東側奥の4区の表土掘削を開始。それぞれ表土掘削の終了した場所から遺構検出作業を開始。平成26年度調査区に近い1区では、遺物包含層から多くの遺物が出土。

8月18日：前日の豪雨のため4区の調査区壁面が崩壊。復旧に専念。

8月21日：前日来からの雨のため、4区の調査区壁面が再度崩壊。安全勾配を広く確保し再復旧。

8月24日：1区の遺構検出終了。検出状況の全景写真撮影を実施。

8月26日：1区の遺構精査開始。

8月27日：1区の各遺構について、図化記録・写真記録を開始。

8月28日：1区で検出した溝から「福器」と墨書きされた須恵器出土（溝13）。

9月4日：1区調査区壁面の断面写真撮影を実施。

9月5日：1区の完掘全景写真を撮影。ラジコンヘリによる空中写真撮影を実施。

9月8日：4区の遺構検出作業終了。全景写真撮影のため清掃作業開始。

9月10日：1区の埋戻し作業開始。4区は雨で調査区が水没したため再度清掃作業を実施。

9月12日：4区の遺構検出状況の全景写真撮影を実施。遺構精査開始。

9月15日：4区の各遺構について、図化記録・写真記録を開始。

9月26日：4区の完掘全景写真を撮影。ラジコンヘリによる空中写真撮影を実施。

9月28日：4区の埋戻し作業開始。

9月29日：4区北側で新たに溝を検出したため追加調査を実施（溝7）。

10月5日：4区北側で旧自然流路と考えられる落込みを確認。埋戻しを中断し、断ち割って断面を記録。

10月13日：3区の調査区を設定し、コンクリートカッターによる切断開始。

10月14日：4区の埋戻し作業終了。3区の表土掘削開始。

10月15日：3区の遺構検出作業開始。

10月16日：3区の遺構検出状況の全景写真撮影を実施。

10月19日：3区の遺構精査開始。随時図化記録・写真記録を実施。

10月21日：3区北側の溝上面から遺物が集中して出土（溝4）。

10月27日：3区の完掘全景写真を撮影。ラジコンヘリによる空中写真撮影を実施。

10月28日：3区の埋戻し作業開始。

10月30日：3区の埋戻し作業終了。

11月4日：2区の表土掘削開始。

11月5日：2区の遺構検出作業開始。

11月6日：2区の遺構検出状況の全景写真撮影を実施。

11月9日：2区の遺構精査開始。随時図化記録・写真記録を実施。

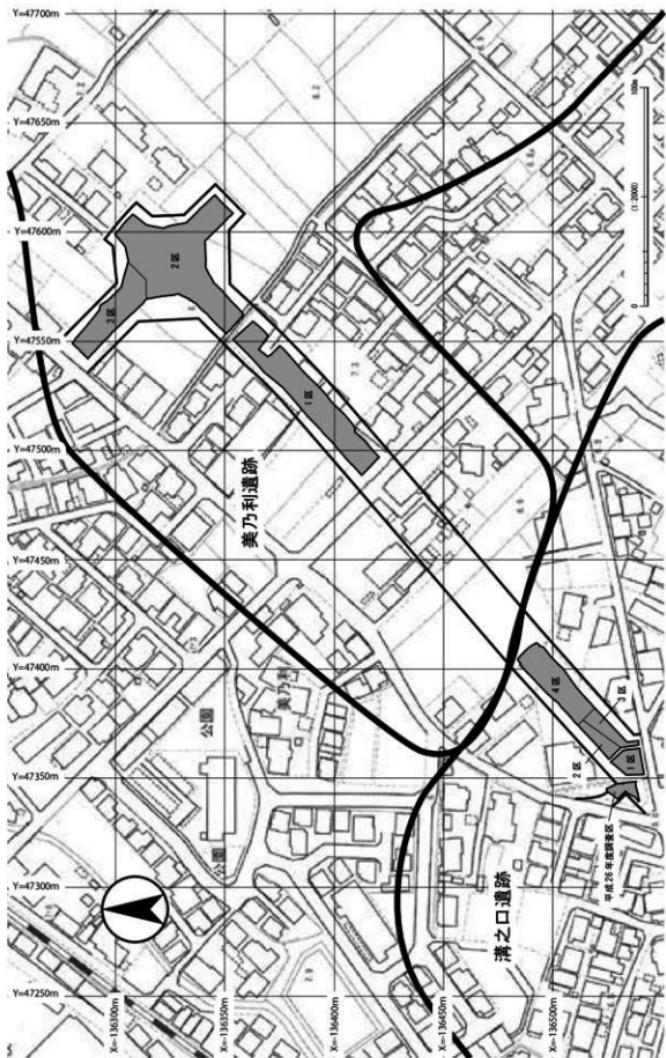
11月11日：2区の中央から北側にかけて溝内から完形の弥生土器が多数出土（溝2）。

11月17日：2区の完掘全景写真を撮影。

11月19日：ラジコンヘリによる2区の空中写真撮影を実施。

11月20日：2区の埋戻し作業開始。

11月24日：2区の埋戻し作業終了。平成27年度調査終了。



第3図 発掘調査時の調査区分

<美乃利遺跡>

**平成 27 年度調査**

平成 27 年

11月 25 日：溝之口遺跡に引き続いて美乃利遺跡範囲 2,820 m<sup>2</sup> の発掘調査に着手。発生土を仮置きするスペースを確保する必要があったため、調査区を 3 分割して調査を実施（第3図）。1 区の表土掘削を開始。

11月 27 日：表土を除去した範囲から遺構検出作業開始。表土中や検出面上からは遺物の出土皆無。

11月 30 日：1 区の遺構検出状況の全景写真撮影を実施。

12月 1 日：1 区の遺構精査開始。南側は遺構埋土中からも遺物の出土皆無。

12月 2 日：1 区の遺構について図化記録・写真記録開始。

12月 4 日：1 区北側の溝から弥生土器が集中して出土（溝 1）。

12月 14 日：週末の雨で 1 区南側壁面が崩壊。

12月 18 日：1 区の完掘全景写真を撮影。ラジコンヘリによる空中写真撮影を実施。

12月 24 日：溝 1 の断ち割り調査、下層確認を開始。

12月 25 日：下層確認と並行して 1 区の埋戻し作業開始。

平成 28（2016）年

1月 6 日：1 区の埋戻し作業終了。

1月 7 日：2 区北側の表土掘削開始。順次遺構検出作業開始。

1月 8 日：2 区北側の遺構検出状況写真を撮影。遺構精査開始。

1月 14 日：2 区東側の遺構検出状況写真を撮影。

1月 19 日：2 区中央部の遺構検出状況写真を撮影。北側の土坑から弥生土器が一括して出土（土坑 1）。

1月 21 日：2 区の表土掘削終了。南側の遺構検出状況写真を撮影。

1月 27 日：2 区北東端から木組井戸を検出（井戸 1）。

1月 28 日：2 区東側で確認された円形遺構が堅穴建物跡であることが判明（堅穴建物 1）。

2月 9 日：2 区南側で確認された隅丸方形や円形の大型遺構が堅穴建物跡であることが判明（堅穴建物 2～4）。

2月 12 日：堅穴建物跡以外の 2 区の完掘全景写真を撮影。ラジコンヘリによる空中写真撮影を実施。

2月 15 日：2 区の堅穴建物跡周辺を残して埋戻し作業を開始。3 区の表土掘削を開始。順次遺構検出作業を開始。

2月 17 日：3 区の遺構検出状況写真を撮影。

2月 18 日：3 区の遺構精査開始。堅穴建物 2 の断ち割り調査開始。

2月 19 日：3 区検出遺構の図化記録・写真記録を開始。

3月 1 日：堅穴建物 4 の中央部から土堤に囲まれた大型の炉跡を検出。

3月 2 日：各堅穴建物跡の完掘写真を撮影。また、3 区について大型の溝状遺構（溝 4）以外の完掘全景写真を撮影。ラジコンヘリによる空中写真撮影を実施。

3月 4 日：溝 4 の完掘写真を撮影。

3月 7 日：3 区の埋戻し作業開始。堅穴建物 4 の断ち割り調査開始。

3月 11 日：2 区の堅穴建物部分の埋戻し作業開始。

3月 18 日：2 区・3 区の埋戻し作業終了。発掘調査完了。

### 第3節 地理的環境

溝之口遺跡は、東西0.6km、南北約1kmの範囲にわたる市内有数の集落遺跡である。今回の調査地は、遺跡範囲の北端に位置しており、加古川バイパス（国道2号線）溝之口北交差点から北東に延びる市道平野神野線の延長部分にあたる（第2図）。

美乃利遺跡は、溝之口遺跡の北東側に接する位置にあり、東西0.4km、南北0.9kmの範囲が遺跡として登録されている。今回調査地は、溝之口遺跡の調査地から北東側に110mほど離れた場所にあたり、遺跡範囲の南端部に位置している。両遺跡は、JR加古川駅の北東約1.1kmの場所にあり、現在の加古川河口付近からは北東に約6kmの位置にある。

地理的には、市名の由来ともなっている一級河川加古川の下流域に位置し、加古川左岸の沖積平野上に立地している。加古川は、兵庫県丹波市青垣町を源として南流し、加古川市内の日岡山と升田山という2つの岩山の間を通過する。その後播磨灘へ流れ込むが、現在のように流路が固定される以前は、この岩山の間を通過した先は幾筋もの流路に分かれて流れていた（第4図）。

その結果、下流域には大規模な沖積平原（氾濫原）が形成されることとなった。この沖積平野の東側は、六甲山塊によって形成された隆起扇状地となっており、神戸市垂水区神出町に所在する離岡山付近を頂点とする広大な「いなみの台地」が形成されている。

溝之口遺跡・美乃利遺跡は、上記沖積平野のうち、旧河道によって形成された自然堤防を中心に関構が広く展開している。両遺跡からは、同時代の遺構や遺物も多く確認されていることから、氾濫原上に広範囲に展開する「遺跡群」として捉えることが可能である。

調査地周辺の現地表面の標高は、両遺跡とも標高7m前後でほぼ平坦である。調査地周辺は、発掘調査に着手する前までは長らく田地や宅地として活用されてきた土地である。



第4図 調査地周辺の旧地形(『加古川市史』第4巻付図1 兵庫県加古川市 1996年より作成)

## 第4節 歴史的環境

加古川下流域は、河川や海上交通のほか山陽道に代表される陸上交通の要衝でもあり、多くの遺跡が密集している場所である。加古川市内には、旧石器時代から中世にかけてその時に特徴的な遺跡が残されている。以下に、溝之口遺跡・美乃利遺跡の立地する加古川下流域の沖積平野を中心に、時代ごとに変化する遺跡の様相を概観し、当該地における歴史的環境について述べる。

**旧石器時代・縄文時代** 旧石器時代・縄文時代の遺跡は、それ以後の時代に比べて調査例や発見例が少ない。また、「石器」や「縄文土器」など遺物のみが確認されている場合がほとんどである。

旧石器時代の遺跡としては、今回調査地の北東に位置し、加古川狭窄部の一角を形成する日岡山（標高約 60 m）の丘陵斜面に日岡山遺跡（第5図4、以下括弧内の番号は第5図に対応）がある。

また、東側のいなみの台地上を流れる喜瀬川沿岸には山之上遺跡（1）や播磨町に所在する大中遺跡（播6）がある。いずれも表面採集の遺物が中心であるが、製品だけでなく剥片や碎片（チップ）なども多く採集されていることから、地中にブロックやユニットを形成するような文化層が残されている可能性も考えられる。

縄文時代の遺跡としては、溝之口遺跡の南東段丘上の縁辺に坂元遺跡（634）がある。晩期の埋甕土坑が複数調査されており、微高地に埋甕を用いた墓域が展開していたと考えられている（渡辺 2009）。他に、前出の大中遺跡や加古川右岸側の沖積地にある砂部遺跡（9）、その北側の段丘上にある岸遺跡（西神吉町岸）などにおいて晩期の土器出土例があるが、現在のところ遺構は確認されていない。なお、市域全体では、八幡町上西条にある宮山遺跡において後期の竪穴建物跡や集石遺構が検出されたという報告例があるが、詳細は不明である（松下 1984）。

**弥生時代** 弥生時代になると遺跡の数は大幅に増加する。

前期の遺跡としては、美乃利遺跡（218）において溝や土坑とともに、広範囲に広がる水田跡が検出されている。また、別府川を挟んだ東側段丘上に立地する坂元遺跡でも土器の出土が認められる。さらに、東側の喜瀬川右岸の大中遺跡では土坑が検出されている。しかし、前期では加古川右岸側の沖積地においてより重要な遺跡が展開している。砂部遺跡と東神吉遺跡（8）は、現在の加古川右岸沖積地上に隣りあって所在する集落遺跡である。両者を同一の集落と考える見方もあり、前期における拠点的な集落と考えられている。砂部遺跡では、他地域においても発見例の少ない土器焼成土坑が複数検出されており注目される。

中期の遺跡としては、溝之口遺跡（10）と美乃利遺跡、坂元遺跡がこの地域の代表例として挙げられる。前期から続く集落が中期において飛躍的に成長し、この時期における拠点集落といえる規模に拡大する。特に溝之口遺跡は、開発に伴う調査も多く実施されたことから、竪穴建物が密集する居住域、方形周溝墓を主体とする墓域、水田が営まれた生産域という集落景観が徐々に明らかにされつつある。また、溝之口遺跡（旧東溝遺跡）出土の豊富な土器群は、東播磨の中期弥生土器の基準資料として紹介されることも多い。

東側のいなみの台地上では遺跡は少ないが、中期の後半になって喜瀬川寄りの平岡町高畑において長畑遺跡（555）が成立し、喜瀬川右岸では大中遺跡で竪穴建物跡が検出されている。これらの遺跡は、溝之口遺跡からの分村集落とも考えられている。加古川の右岸側では、沖積地内に前期から継続する

砂部遺跡があり、丘陵上には中期のみ短期的に存続した集落と考えられる平山遺跡（11）などがある。

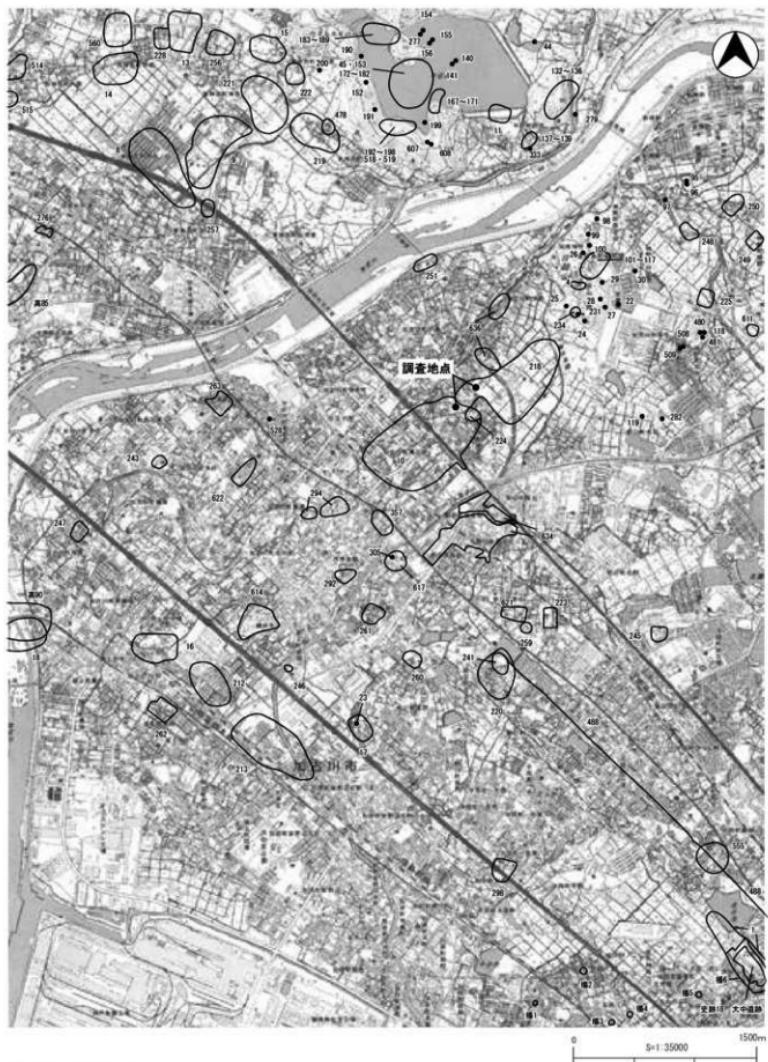
後期の遺跡としては、溝之口遺跡が集落として継続しているとともに、隣接する坂元遺跡や美乃利遺跡において、より多くの遺構・遺物が確認されるようになる。また、中期後半に成立した長畠遺跡も継続して集落が営まれる。一方、後期の前半に遺構の存在が途絶える大中遺跡は、後期後半になって再び集落として成立し、終末期には拠点集落といえるほどの規模に成長していく。ほかに、終末期の遺跡として著名なものに西条52号墓（西条山手二丁目）がある。開発によりすでに消滅しているが、工事直前に行われた緊急発掘によって、円丘部と突出部から構成された前方後円形の墳丘墓であることがわかっている。石櫛に囲まれた埋葬施設からは、内行花文鏡などが出土している。一方、加古川右岸側では、引き続き砂部遺跡があり、段丘上の岸遺跡でもまとまった土器の出土が認められるが、いずれも遺構は乏しい。

**古墳時代** 古墳時代は、集落遺跡の発見例や調査事例が少なく詳細な検討は進んでいない。対して、加古川流域一帯に築かれた豊富な古墳群の様相について多くの研究や報告がなされている。

前期の古墳としては、美乃利遺跡の北東側に位置する日岡山古墳群が著名である。これまで本格的な調査は行われていないものの、宮内庁が所管する、ひれ墓古墳（26）（「日岡陵古墳」ともいう）をはじめ合計8基の大型古墳が確認されている。そのうち、ひれ墓古墳、勅使塚古墳、西大塚古墳、南大塚古墳、北大塚古墳の5基は前方後円墳で、残る西車塚古墳、東車塚古墳（すでに消滅）、狐塚古墳の3基は円墳もしくは前方後円墳と考えられている。ひれ墓古墳は、景行天皇皇后にあたる「福日大郎姫命」の陵墓に指定されている（陵墓名は「日岡陵」）。古墳群中から採集された遺物としては、南大塚古墳や勅使塚古墳から三角縁神獸鏡、東車塚古墳から三角縁神獸鏡・方格T字鏡・獸形鏡及び石劍2点、北大塚古墳から埴輪片や短甲片などがある。海岸部には、溝之口遺跡の南東段丘上の縁辺部に聖陵山古墳（23）が単独で所在しており、特異な位置を占めていることで注目される。前方後円墳もしくは前方後方墳と伝えられるが、これまで発掘調査が行われたことはなく前方部はすでに失われている。天文年間（1532～1555年）に出土したという銅鏡が伝えられている。集落遺跡としては、溝之口遺跡内の南部において堅穴建物跡などが検出されており、日岡山古墳群の母体となる集落の可能性が指摘されている。また、喜瀬川沿岸の大中遺跡は引き続き充実した大規模集落として存続していたものと考えられ、同時期の古墳群との関係が注目される。

中期になると、日岡山でみられたような首長墓が東側の西条地区の丘陵地において築かれるようになる。行者塚古墳、人塚古墳、尼塚古墳という3基の大型古墳が西条古墳群として国史跡に指定され保存整備されている。また、中期後半には加古川右岸で平荘湖古墳群が新たに築かれ。平荘湖古墳群は、池尻2号墳（44）やカанс塚古墳（45）に代表される堅穴式石室ないし堅穴系横口式石室を埋葬施設とする段階から、升田山15号墳や池尻16号墳に代表される横穴式石室を埋葬施設とする段階まで合計68基の古墳が確認されており、後期まで連続する市内最大規模の古墳群である。昭和41（1966）年に造られた人工湖である平荘湖のダム建設に伴う緊急発掘において、馬具や金製耳飾などの渡来系遺物が多く副葬されていることが明らかにされた。現在は、古墳の多くが湖底へと没し墳丘を確認することはできない。中期の集落遺跡としては、引き続き溝之口遺跡が存続し、その南側の沖積地に立地する北在家遺跡（292）でも堅穴建物跡が検出されている。溝之口遺跡では、堅穴建物跡から複数の韓式系土器が出土している。加古川右岸側では、砂部遺跡で掘立柱建物跡や溝、土坑が検出され、韓式系土器が複数出土している。

後期の古墳は、市内各所に円墳や方墳が数多く残されている。主要なものは、中期後半から続く平



第5図 周辺の遺跡

(『兵庫県遺跡地図 第3分冊 遺跡分布地図』兵庫県教育委員会 2011年より作成)

遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代
1	山之上遺跡	旧石器	139	平山 3号墳	古墳	243	石津城跡	室町
4	日岡山遺跡	旧石器	140	池尻 3号墳	古墳	245	横倉城跡	室町
7	岸遺跡	讃文～弥生	141	池尻 4号墳	古墳	246	安田構居跡	室町
8	東根吉遺跡	弥生～古墳	152	升田山 15号墳	古墳	247	稻屋構居跡	室町
9	砂部遺跡	讃文～奈良	153	池尻 16号墳	古墳	248	石守構居跡	室町
10	清之口遺跡	弥生～平安	154	池尻 17号墳	古墳	249	手末構居跡	室町
11	平之口遺跡	弥生中期	155	池尻 19号墳	古墳	250	高田構居跡	室町
13	中御台地遺跡	弥生～室町	156	池尻 20号墳	古墳	251	中津構居跡	室町
14	中西低地遺跡	弥生～古墳	167	池尻 32号墳	古墳	256	神吉城跡	室町
15	吉の遺跡	弥生後期	168	池尻 33号墳	古墳	257	砂部構居跡	室町
16	今井遺跡	弥生後期	169	池尻 34号墳	古墳	258	一色構居跡	室町
17	長畠遺跡	弥生後期	170	池尻 35号墳	古墳	259	野口城跡	室町
18	舎之口遺跡	弥生後期	171	池尻 36号墳	古墳	260	長砂構居跡	室町
22	東原古墳	古墳	172	池尻 37号墳	古墳	261	細田構居跡	室町
23	碧波山古墳	古墳	173	池尻 38号墳	古墳	262	尾上構居跡	室町
24	鶴保古墳	古墳	174	池尻 39号墳	古墳	263	加古川城跡	室町
25	物見塚古墳	古墳	175	池尻 40号墳	古墳	276	平津構居跡	室町
26	大沢墓古墳	古墳	176	池尻 41号墳	古墳	277	池尻 1号墳	古墳
27	西原塚古墳	古墳	177	池尻 42号墳	古墳	279	地藏寺 6号墳	古墳
28	南大塚古墳	古墳	178	池尻 43号墳	古墳	282	水足 2号墳	古墳
29	西大塚古墳	古墳	179	池尻 44号墳	古墳	292	北在家遺跡	弥生～古墳
30	北大塚古墳	古墳	180	池尻 45号墳	古墳	294	栗津遺跡	弥生～古墳
44	池尻 2号墳	古墳	181	池尻 46号墳	古墳	305	具平塚古墳	古墳
45	カシヌ塚古墳	古墳	182	池尻 47号墳	古墳	333	平山 4号墳	古墳
95	二塚 1号墳	古墳	183	池尻 48号墳	古墳	357	平野遺跡	弥生
96	二塚 2号墳	古墳	184	池尻 49号墳	古墳	478	佐伯寺跡	平安
97	若神社古墳	古墳	185	池尻 50号墳	古墳	480	石守 2号墳	古墳
98	日岡山 1号墳	古墳	186	池尻 51号墳	古墳	481	石守 3号墳	古墳
99	日岡山 2号墳	古墳	187	池尻 52号墳	古墳	488	古代山陽道	奈良
100	日岡山 3号墳	古墳	188	池尻 53号墳	古墳	508	石守古墳群 4号墳	古墳
101	日岡山 4号墳	古墳	189	池尻 54号墳	古墳	509	石守古墳群 5号墳	古墳
102	日岡山 5号墳	古墳	190	升田山 1号墳	古墳	514	岸城跡	室町
103	日岡山 6号墳	古墳	191	升田山 2号墳	古墳	515	岸南遺跡	弥生
104	日岡山 7号墳	古墳	192	升田山 3号墳	古墳	518	升田山 11号墳	古墳
105	日岡山 8号墳	古墳	193	升田山 4号墳	古墳	519	升田山 12号墳	古墳
106	日岡山 9号墳	古墳	194	升田山 5号墳	古墳	528	松岡青蘿墓	江戸
107	日岡山 10号墳	古墳	195	升田山 6号墳	古墳	555	長畠遺跡	弥生
108	日岡山 11号墳	古墳	196	升田山 7号墳	古墳	560	西村遺跡	弥生～奈良
109	日岡山 12号墳	古墳	197	升田山 8号墳	古墳	607	升田山 13号墳	古墳
110	日岡山 13号墳	古墳	198	升田山 9号墳	古墳	608	升田山 14号墳	古墳
111	日岡山 14号墳	古墳	199	升田山 10号墳	古墳	611	天神前遺跡	奈良～平安
112	日岡山 15号墳	古墳	200	天下原古墳	古墳	614	鶴林寺	平安～中世
113	日岡山 16号墳	古墳	212	尾上遺跡	弥生～古墳	617	具平塚遺跡	弥生
114	日岡山 17号墳	古墳	213	赤の宮遺跡	弥生～古墳	621	教信寺	平安～中世
115	日岡山 18号墳	古墳	218	美乃利遺跡	弥生～鎌倉	622	栗津大年遺跡	中世
116	日岡山 19号墳	古墳	219	升田遺跡	奈良	634	坂元遺跡	讃文～中世
117	日岡山 20号墳	古墳	220	古大内遺跡	奈良	636	大野遺跡	平安～中世
118	石守 1号墳	古墳	221	神吉南遺跡	弥生～奈良	637	米田遺跡	弥生～中世
119	水足 1号墳	古墳	222	天下原遺跡	弥生～奈良	640	朝日町遺跡	弥生～古墳
132	地藏寺 1号墳	古墳	223	野口庵寺	奈良	播1	本荘散布地	中世
133	地藏寺 2号墳	古墳	224	瀧之口麻寺	奈良	播2	古田1号散布地	中世
134	地藏寺 3号墳	古墳	225	石守庵寺	奈良	播3	古田2号散布地	中世
135	地藏寺 4号墳	古墳	226	中西庵寺	奈良	播4	古田3号散布地	中世
136	地藏寺 5号墳	古墳	231	日岡山遺跡	弥生	播5	大中散布地	弥生～中世
137	平山 1号墳	古墳	234	日岡遺跡	弥生～古墳	播6	大中遺跡	旧石器～古墳・中世
138	平山 2号墳	古墳	241	古大内城跡	室町			

表1 周辺の遺跡

※遺跡番号の「高」は高砂市、「播」は播磨町の遺跡

莊湖古墳群のほか、日岡山の南東斜面にも再び古墳群が築かれ、弥生時代の集落が所在した坂元遺跡においても小規模な古墳群が検出されている。また、溝之口遺跡の南側の段丘縁辺上に所在する具平塚古墳（305）は、江戸時代中期に記された『播磨鑑』において、平安時代中期の人物である村上天皇の皇子、具平親王の陵墓として紹介されているが、現地における観察所見から、横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の円墳と推定される。集落遺跡としては、溝之口遺跡で引き続き堅穴建物跡の調査事例がある。また、東隣の坂元遺跡では、堅穴建物跡のほか、集落と古墳群の間において火を用いた祭祀土坑が調査されている。さらに、古墳群のすぐ南側では、石見型埴輪をはじめ、古墳群に用いるための各種の埴輪を焼成した窯跡なども検出されており、集落北側の高台に古墳が築かれ、その隣接地において祭祀や埴輪製作が行われた様子をよく伝えている。他には、前期以降集落の痕跡が確認されなくなった大中遺跡において、再度堅穴建物跡が検出されるようになる。

**奈良時代・平安時代** 奈良時代は、律令制の導入により新たな行政単位が設けられ、今回調査地周辺は「播磨国賀古郡」の範囲に含まれる。また、溝之口遺跡の南側には官道として整備された古代山陽道（488）が通っていたとされる。古代山陽道沿いを南東に進むと、古大内遺跡（220）が位置しており、「賀古駅家」に比定されている。山陽道に接続する駅家の入口付近が発掘調査されている。古大内遺跡の北東側には、古代寺院である野口庵寺（223）がある。発掘調査の結果、瓦積基壇で構築された塔・講堂・小堂宇が確認されている。北側の曇川沿岸には石守庵寺（225）があり、法隆寺式の伽藍配置を基準とし、この地域で産出される竜山石（流紋岩質凝灰岩）製の心礎を持つ塔跡や瓦積基壇で構築された金堂跡などが調査されている。加古川右岸側では、沖積地を望む段丘上に中西庵寺（228）がある。発掘調査は行われていないが、採集された瓦から平安時代後期まで存続したことがわかっている。市内には、ほかにも西条庵寺（山手二丁目）や山角庵寺（平莊町山角）などの古代寺院が知られている。加えて、溝之口遺跡では、遺跡範囲の北側を中心に官衙遺跡を推測させる遺構・遺物が確認されている。具体的な遺構としては、柵や溝に囲まれ「コ」字形に配置された建物跡や、倉庫群と考えられる多数の掘立柱建物跡、井戸などがあり、それらの遺構から「大穀」と記された墨書き土器や銅製・石製の鉢貝具などが出土したことから「賀古郡衙」の候補地となっている。美乃利遺跡からは、「郡」と記された墨書き土器なども出土している。さらに、溝之口遺跡にほど近い坂元遺跡、大野遺跡（636）からも同時期の遺構・遺物が多数確認されており、今後の調査の進展によって、郡衙や駅家と、それを取り巻く集落の様相が明らかにされることが期待される。また、溝之口遺跡の範囲内北端は、古代瓦が表面採取されたことを理由に「溝之口庵寺（224）」として遺跡登録されているが詳細は不明であり、郡衙との関係が注目される。加古川右岸側では、沖積地に砂部遺跡、神吉南遺跡（221）、天下原遺跡（222）、升田遺跡（219）などがあり、段丘上に中西台地遺跡、西村遺跡などがある。いずれも比較的小規模な集落と考えられ、中西庵寺を囲むような位置関係にある。

平安時代は、先述した古代寺院の多くの9世紀までにいったん廃絶する傾向にあり、『日本三代実録』において、播磨諸郡の官舎・諸定額寺の堂塔が悉く倒壊したことが載る、貞觀10（868）年の播磨国大地震との関連が指摘されている。後期までには、新たな寺院として鶴林寺（614）、佐伯寺跡（478）、教信寺（621）などが成立したと考えられる。鶴林寺は、聖徳太子の建立という縁起を持つが、本尊の薬師如来像や法華堂（太子堂）・常行堂の年代観から、この時期に伽藍が整えられたとする説が有力となっている。集落跡としては、引き続き溝之口遺跡、美乃利遺跡、坂元遺跡において多くの遺構・遺物が調査されており、加古川右岸側では中西台地遺跡で集落が継続していたものと考えられている。

### 鎌倉時代・室町時代 市内全域で調査事例が少なく明確な遺跡は少ない。

美乃利遺跡において鎌倉時代の掘立柱建物跡や屋敷墓が検出され、坂元遺跡では掘立柱建物跡や水田跡などが検出されている。美乃利遺跡に接する大野遺跡では、同じく鎌倉時代の掘立柱建物跡や墓が検出されている。また、同じ沖積地上に立地する栗津大年遺跡（622）では、室町時代まで続く掘立柱建物跡や木棺墓などが検出されている。いざれの遺跡も集落跡と考えられる。加古川右岸側では、中西台地遺跡において方形居館に付属する堀が調査されている。ほかに、具体的な調査事例は乏しいものの、室町時代に築かれたとされる城や構居が数多く存在したことが文献資料の分析などからわかっている。今回調査地周辺では、戦国期の羽柴秀吉による播磨平定に深く関わる加古川城跡（263）、野口城跡（259）、神吉城跡（256）をはじめ、加古川左岸側に石弾城跡（243）、横倉城跡（245）、中津構居跡（251）、稻屋構居跡（247）、尾上構居跡（262）、長砂構居跡（260）、一色構居跡（258）、手末構居跡（249）などがあり、右岸側には岸城跡（514）、砂部構居跡（257）、平津構居跡（276）などが遺跡登録されている。なお、加古川城跡については、鎌倉時代を通じて播磨国の守護所が置かれていたものと考えられ、城として活用される以前の様相にも注意を払う必要がある。

**江戸時代以降** 今回調査地周辺は、江戸時代をとおして姫路藩領であった。溝之口遺跡に南接する加古川町寺家町周辺は、京都から下関を通り長崎に至る西国街道（中国路）の宿場町として栄え、加古川舟運の高瀬舟が往来し、内陸部との物流の拠点であった。江戸時代の遺跡は、中期に俳人として活躍した松岡青蘿の墓所が「松岡青蘿墓（528）」として登録されている。また、平成16（2004）年に実施された坂元遺跡の発掘調査では、江戸時代の道路跡が検出されており、西国街道の一部と考えられている。

明治時代になると、加古川には橋が架けられ、明治21（1888）年に山陽鉄道（現JR山陽本線）が開通し、明治31（1898）年には日本毛織の工場が操業を開始するなど近代化が進む一方、宿場町としての機能は衰えていった。大正2（1913）年には播州鉄道（現JR加古川線）が開通したことでの高瀬舟も姿を消した。現在の加古川市は、播磨灘沿岸の工業地帯や神戸・大阪方面のベッドタウンとして栄えている。

## 第Ⅱ章 溝之口遺跡の調査成果

### 第1節 既往の調査

溝之口遺跡は昭和42（1967）年6月、国道2号線加古川バイパス建設の工事中に地元の中学生が多量の遺物を採集したことによって発見された。これをうけて兵庫県教育委員会が弥生時代の遺跡の存在を確認したが、すでにバイパス工事はほぼ完成していた。県教委と加古川市教育委員会は、建設省鉄道工事事務所と協議をおこない、未完成部分の側道建設を中断して翌年5月19日～7月19日まで発掘調査を実施した（第6図A地点、以下地点名は第6図及び表2に対応）。

この調査では弥生時代中期の木棺墓2基、土坑2基、後期の堅穴建物跡2棟、平安時代の溝6条が検出され、畿内第III様式段階の弥生土器が大量に出土したことで注目を浴びた。同時におこなわれた分布調査によって土器の散布する範囲は東西550m、南北1,800mと判明し、東溝之口地区の地名から「東溝遺跡」と遺跡名がつけられた。

昭和43（1968）年度の確認調査結果をうけて、昭和44（1969）年1月10日～3月1日、同年7月15日～10月9日に全面調査が行われた（B地点）。調査の結果、弥生時代中期前半の土坑1基、中期中頃の堅穴建物跡1棟、土坑1基、中期末の堅穴建物跡2棟、後期の堅穴建物跡4棟、古墳時代中期の堅穴建物跡1棟、平安時代の掘立柱建物跡2棟が検出され、弥生時代～平安時代にかけての複合遺跡であることが明らかになった。

その後、周辺一帯の宅地開発とともに緊急調査が行われ、遺跡範囲が変更されたため、遺跡の名称は現在の「溝之口遺跡」へと改められた。緊急調査は昭和58（1983）年～昭和63（1988）年にかけて断続的に行われ多くの遺構が検出された。

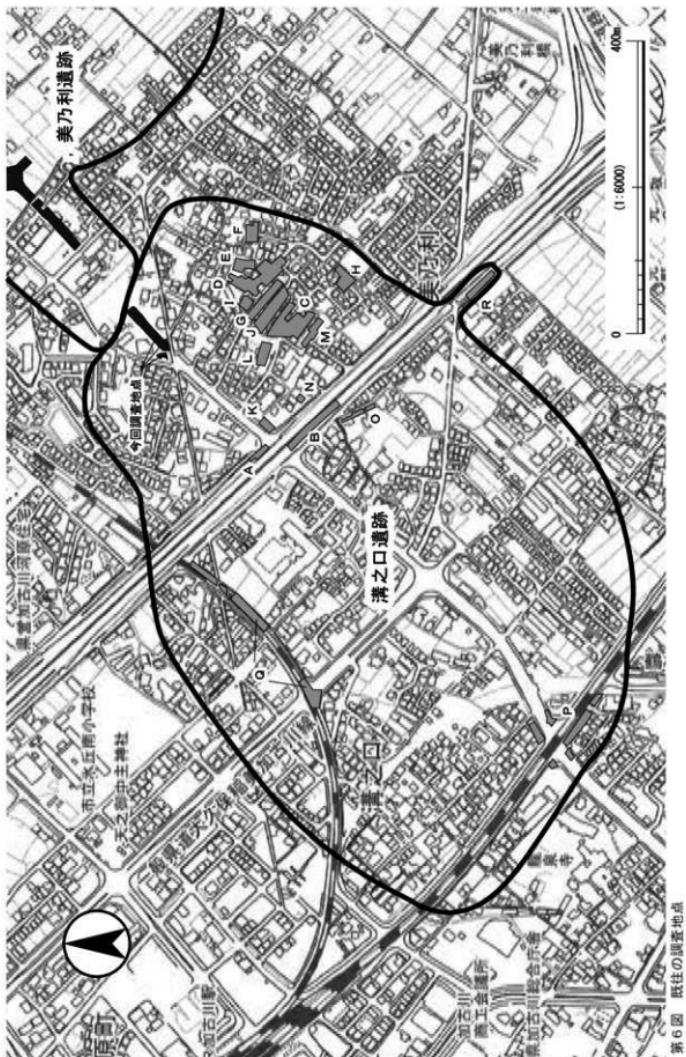
昭和58年度は、バイパス北側の大規模な宅地開発によって2回にわけて調査が行われた。

昭和58年6月24日～8月10日に実施した昭和58年度第1次調査では弥生時代の溝1条、土坑1基、方形周溝墓4基、古墳時代の堅穴建物跡1棟、奈良時代の掘立柱建物跡4棟が検出された（C地点）。

同年12月5日～翌年3月31日に実施した第2次調査は3地区にわけておこなわれ、第1調査区では弥生時代の堅穴建物跡2棟、古墳時代の堅穴建物跡4棟、掘立柱建物跡2棟、奈良時代の掘立柱建物跡18棟を検出し、これまで最大規模の古代集落跡がみつかった（D地点）。第2調査区は、第1調査区の北東に隣接し、奈良時代の掘立柱建物跡4棟、溝2条、井戸1基を検出した（E地点）。第3調査区は、第2調査区の東側に位置し、遺跡内のほぼ東端である。弥生時代の堅穴建物跡1棟、古墳時代の堅穴建物跡1棟、奈良時代の掘立柱建物跡6棟、溝2条、井戸1基を検出し、この井戸の中から「大穀」「長」「田村南」と書かれた墨書き土器や木製の弓、簀串などが出土した（F地点）。

昭和61（1986）年度の調査地はD地点の南側に隣接し、弥生時代の土坑1基、溝2条、古墳時代の堅穴建物3棟、溝4条、奈良時代の掘立柱建物2棟が検出され、D地点の遺構群が南側へ続くことがわかった（G地点）。

昭和62（1987）年度の調査は3回にわけて実施され、昭和58年度からの宅地開発に伴う調査地の間をうめるように調査が行われた。



## 第II章 溝之口遺跡の調査成果

地点名	弥生時代	古墳時代	古代	中世	掲載 報告書名	年次別 調査区名
A地点	堅穴建物跡2・ 木棺墓2・土坑2	—	溝6	—	『播磨・東漢弥生遺跡Ⅰ』 加古川市教育委員会 1968	—
B地点	堅穴建物跡7・ 土坑1	堅穴建物跡1	掘立柱建物跡2	—	『播磨・東漢弥生遺跡Ⅱ』 加古川市教育委員会 1969	—
C地点	方形周溝墓4・ 土坑1・溝1	堅穴建物跡1	掘立柱建物跡4	—	『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 加古川市教育委員会 1992	昭和58年度 1次
D地点	堅穴建物跡2	堅穴建物跡4・ 掘立柱建物跡2	掘立柱建物跡18	—	#	昭和58年度 2次1区
E地点	—	—	掘立柱建物跡4・ 溝4・井戸1	—	#	昭和58年度 2次2区
F地点	堅穴建物跡1	堅穴建物跡1	掘立柱建物跡6・ 溝2・井戸1	—	#	昭和58年度 2次3区
G地点	土坑1・溝2	堅穴建物跡1・ 溝4	掘立柱建物跡2	—	#	昭和61年度
H地点	土坑1	堅穴建物跡1	掘立柱建物跡1・ 溝1	—	#	昭和62年度 1次夏
I地点	方形周溝墓3	—	掘立柱建物跡1・ 溝2	—	#	昭和62年度 1次西
J地点	方形周溝墓1・ 円形周溝墓1・ 焼成土坑2	堅穴建物跡2・ 溝1	掘立柱建物跡2・ 溝6・櫛列2	—	#	昭和62年度 2次
K地点	堅穴建物跡2	—	—	—	#	昭和62年度 3次
L地点	溝3	溝1	溝4・水田跡	—	#	昭和63年度
M地点	方形周溝墓5・ 土坑3	—	掘立柱建物跡4・ 溝2	—	『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 加古川市教育委員会 2006	—
N地点	溝2	—	—	—	『加古川市埋蔵文化財調査集報Ⅱ』 加古川市教育委員会 2003	—
O地点	溝4・水田跡	溝2	溝1	—	『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 加古川市教育委員会 2017	—
P地点	堅穴建物跡2・ 掘立柱建物跡1・ 土坑1・溝9	—	土坑1・溝9	—	『兵庫県文化財調査報告 第309番 溝之口遺跡』 兵庫県教育委員会 2006	—
Q地点	—	—	—	掘立柱建物跡 11・土坑9・溝18	#	—
R地点	—	—	溝5・水田跡	—	『兵庫県文化財調査報告 第427番 溝之口遺跡Ⅱ』 兵庫県教育委員会 2012	—

表2 既往の調査地点

\*遺構種別に続く数字は検出数を表す

第1次調査は、東西に調査区をわけて行われた。東調査区はC地点の南東に位置し、弥生時代の土坑1基、古墳時代の堅穴建物跡1棟、奈良時代の掘立柱建物跡1棟、溝1条を検出した（H地点）。

西調査区はD地点の西に隣接し、弥生時代の方形周溝墓3基、奈良時代の掘立柱建物跡1棟、溝2条を検出した（I地点）。

昭和62年6月～7月に実施した第2次調査は、C地点とG地点の間で行われた。弥生時代の方形周溝墓1基、円形周溝墓1基、焼成土坑2基、古墳時代の堅穴建物跡2棟、溝1条、奈良時代の掘立柱建物跡2棟、櫛列2列、溝6条を検出した（J地点）。

第3次調査は、最初に調査されたA地点の東側に位置する。弥生時代の堅穴建物2棟が検出され、A地点とほぼ同時期の建物跡である（K地点）。

昭和63年度に実施した調査は、C地点の北西に隣接する。弥生時代の溝3条、古墳時代の溝1条、奈良時代の溝4条、水田跡と考えられる遺構を検出した（L地点）。

平成に入り、大規模な発掘調査は減少したが、平成4（1992）年度と平成11（1999）年度に個人住宅の建設工事などに伴う発掘調査が行われた。

平成4年6月29日～10月29日に実施した調査は、C地点の南西に隣接する。弥生時代の方形周溝墓5基、土坑3基、平安時代の掘立柱建物跡4棟、溝2条を検出した（M地点）。

平成11年7月2日～8月6日に実施した調査は、B地点付近のバイパスを挟んで北東に位置する。弥生時代の溝2条を検出した（N地点）。

直近では平成28（2016）年度に、加古川バイパスを挟んだ南側で、民間の宅地造成工事に伴う発掘調査が行われた。平成28（2016）年1月13日～2月8日に実施し、B地点の南東に位置する。弥生時代から平安時代にかけての溝7条、水田跡を検出した（O地点）。

前述の昭和43年度～平成28年度までに実施した溝之口遺跡東部の調査は加古川市教育委員会が主体となって行い、特に弥生時代中期の集落の様相が明らかになってきた。すなわち、既往の調査地の東西端にそれぞれ居住域が存在し、その間に、西側に水田、水路などの低地部生産域、東側に方形周溝墓などの墓域がつくられたことが遺構の分布からよみとることができる。

溝之口遺跡南部と西部の調査は、東播都市計画都市高速鉄道J.R山陽本線等連続立体交差事業によって平成9（1997）年～平成15（2003）年にかけて兵庫県教育委員会が実施した。

南部の調査は山陽本線の高架工事に伴い、平成9年度に確認調査を実施した結果、古墳時代の溝をはじめとした遺構・遺物を検出した。そのため、平成10（1998）年12月28日～翌年3月25日に本調査を実施した。調査の結果、弥生時代の堅穴建物跡2棟、溝3条、古墳時代の堅穴建物跡2棟、掘立柱建物跡1棟、土坑1基、溝9条、平安時代の土坑1基、溝9条を検出し、古墳時代の堅穴建物跡からは、加古川下流域左岸としては初めて、韓式系土器や初期須恵器が出土した（P地点）。

西部の調査は加古川線の高架工事に伴い、平成9年度～平成10年度に確認調査を実施した結果、平安時代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。そのため、平成13（2001）年10月9日～12月6日、平成15年5月27日～7月4日、同年12月8日～12月10日の3回にわけて本調査を実施した。調査の結果、中世の掘立柱建物跡11棟、土坑9基、溝18条を検出し、この地に中世の集落が存在したことが明らかになった（Q地点）。

ほかに、南東部の調査として、東播磨南北道路改築事業に伴い、平成18（2006）年9月25日～翌年2月5日にかけて県教委が実施した調査がある。調査の結果、古代の水田や溝を検出した（R地点）。

以上、既刊の報告書の調査について記述したが、それ以外におこなわれた確認調査でも多数の遺構・遺物が検出され、溝之口遺跡の範囲は少しづつ広がるとともに、遺跡の全体像が徐々に明らかになってきている。

## 第2節 基本層序

今回調査地点は、大きく3段階（第I～Ⅲ層）の基本堆積により成り立っている（第8図）。

第I層は、調査前まで宅地として利用されていた際の表層や擾乱層及びその直下に堆積する旧耕作土や床土層である。現地表面は標高約7mで平坦であり、本層は地表下約1mまで堆積している。

第II層は、弥生時代から平安時代の土器等を含む遺物包含層である。部分的に3層から4層に細分される場所があるものの、全体としては2層に分かれる（II-4・5層）。包含層から出土する遺物は様々な時期のものが混在しており、時期差等は検討できなかった。本層上面の標高は約6mである。

第Ⅲ層は、調査区北東側で確認された旧自然流路を含むシルト質の自然堆積層（いわゆる「地山」）である。本層上面が今回調査における主要な遺構確認面である。本層上面の標高は約5.5mであり、旧自然流路より東側は5.3mと若干低くなる。この自然流路内からは遺物の出土は認められず、当該地に遺跡が成立する以前に埋没したものと考えられる。

今回調査区より東側の範囲は、事前の試掘調査において低湿地における堆積層が確認されたのみで、次章で報告する美乃利遺跡の調査区に至るまで遺構は確認されていない。

## 第3節 検出遺構

### 1. 概要

今回の調査は、加古川市の道路改良工事に伴う事前調査として実施し、溝之口遺跡の範囲については平成26（2014）年度に70m<sup>2</sup>、翌年度に800m<sup>2</sup>の合計870m<sup>2</sup>について発掘調査を実施した。

調査の結果、弥生時代から平安時代までの遺構を合計42基検出した（第7図）。内訳は、井戸1基、土坑5基、溝状遺構19条、ピット17基である。

本報告書では、上記の遺構のうち、比較的遺存状態が良好で遺物が一定量出土している、井戸1基及び溝状遺構14条を選定し、以下にその詳細を述べる。

### 2. 弥生時代

#### ■井戸1（第9図、写真7・28～32）

**位 置：**調査区西端のI-2グリッドに位置する。遺構確認面の高さは標高5.48mで、現地表面から約1.5m下に位置する。

**形 態：**平面形は円形で、断面形は箱形をしている。底面はほぼ平坦で、中央部分に円形の窪みがある。壁面は垂直に近く立ち上がる。

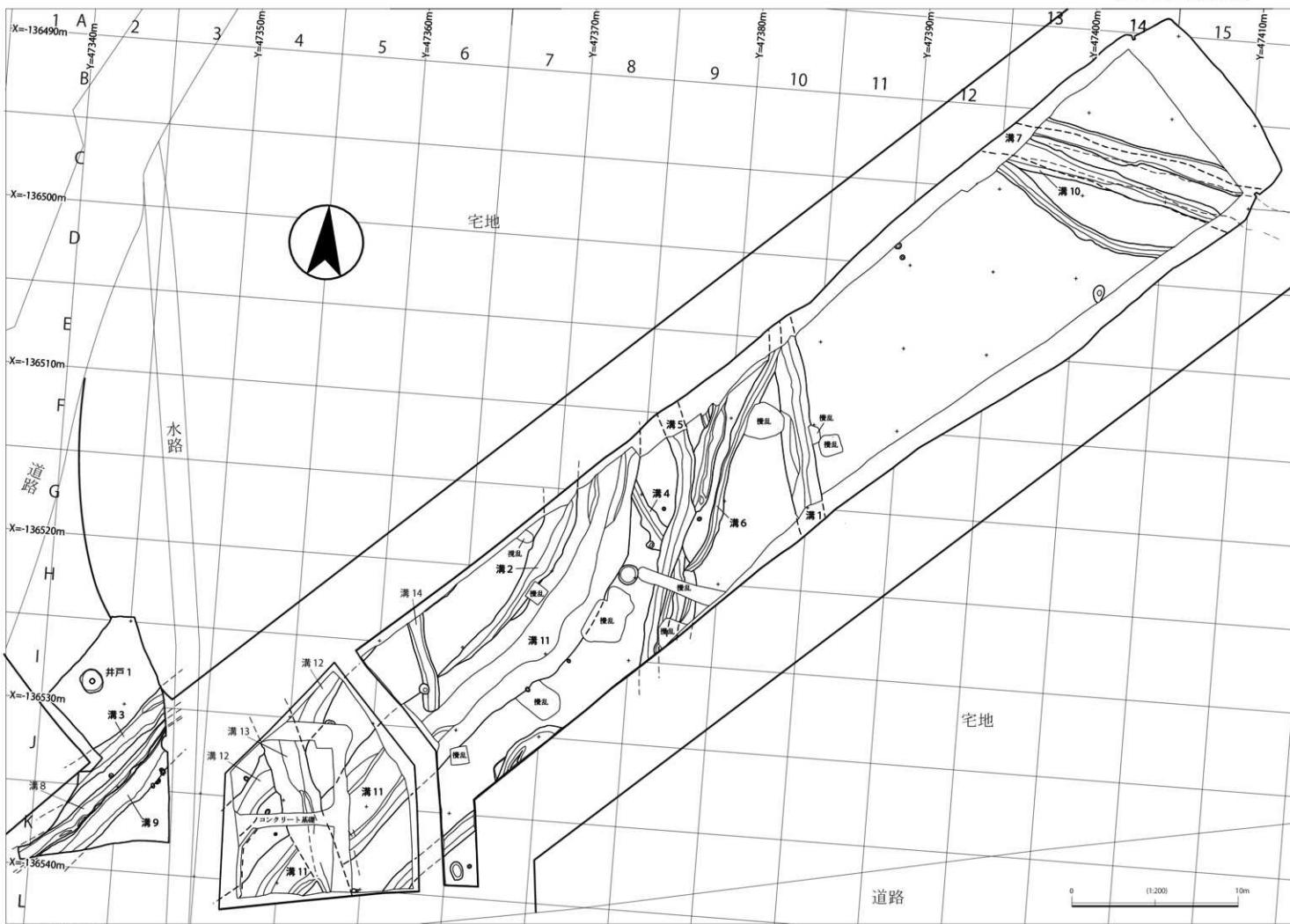
**規 模：**直径約1.4m、深さ0.6mを測る。底面中央の窪み部分は直径0.28mで、底面から0.11mほど深くなる。

**土 層：**6層に区分される。灰褐色シルトを主体とし、レンズ状に堆積している。上層から、口縁部を欠損した弥生土器の壺が伏せた状態で出土した。

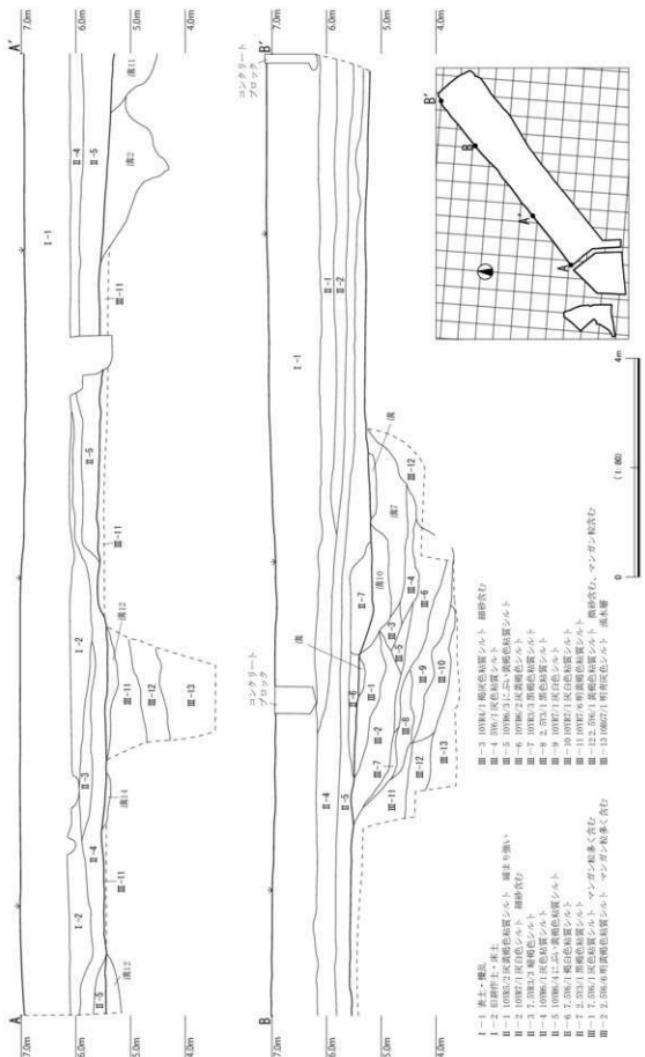
**出土遺物：**上層から出土した壺のほか、その周辺から甕や壺の破片が出土している。

今回の報告では、口縁部が欠損した壺を含めた弥生土器6点を抽出し次節において詳述する。

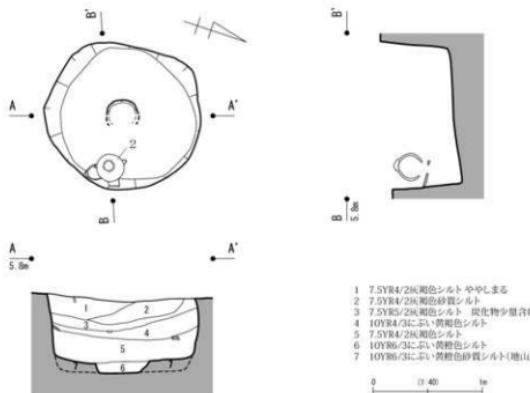
**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は弥生時代中期初頭頃と考えられる。



第7図 退積配置図



第8図 基本断面



第9図 井戸 1

#### ■溝1 (第10図、写真33~37)

**位 置:** 調査区中央付近のD~G 10、F 11 グリッドに位置する溝状遺構である。溝6に切られ、上端の一部を擾乱に切られている。北側と南側は、それぞれ調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高 5.46 mで、現地表面から約 1.5 m下に位置する。主軸方向は N-13°-W を示す。

**形 態:** 平面形は溝状で、断面形はU字状をしている。底面は湾曲し、壁面は緩やかに外側へ向けて立ち上がる。壁面の一部にテラス状の平坦面が認められる。

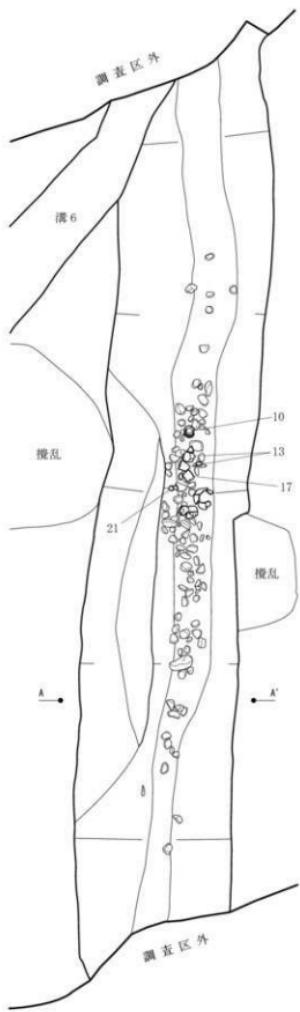
**規 模:** 検出された範囲での長さは 10.18 mを測る。幅は 1.80 mで、深さは 0.68 mを測る。

**土 層:** 3層に区分される。褐灰色シルトを主体とし、第2層と第3層からは、検出範囲の中央付近で遺物がまとまって出土した。また、底面からは拳大の礫が敷き詰められたような状況で出土した。

**出土遺物:** 遺構の中央付近で弥生土器が集中して出土した。甕や壺の破片資料が中心で、完形に復元できたものはない。底面からは自然礫（川原石）が多数出土し、人為的に敷き詰めたものと考えられる。埋土中からは石鏃が出土したもの、底面の礫には石器と判断できるものは含まれていなかった。

今回の報告では、上記の遺物のうち弥生土器 17点、石器 1点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期:** 出土した遺物から、遺構の埋没時期は弥生時代中期初頭頃と考えられる。



第10図 溝1

## ■溝2 (第11・12図、写真4・5・38~45)

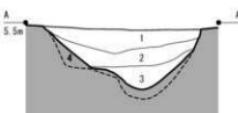
**位 置：**調査区中央西寄りのI 6、G～I 7、G 8グリッドに位置する溝状遺構である。遺構の南側から西側にかけて溝11に切られ、東側から北側にかけては調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高 5.44 mで、現地表面から約 1.5 m下に位置している。北東方向、南西方向へ緩やかに湾曲する溝で、およそその軸方向はN-34°-Eを示す。

**形 構：**平面形は溝状をしているが、大部分が調査区外へ及んでいるうえ、調査区内では溝11に切られしており全体形は不明である。断面形はV字状を呈し、底面は幅の狭い平坦面となっている。壁面は急斜に立ち上がり外側へ向け開いていく。溝の埋土中からは供獻土器と考えられる完形の土器が多数出土し、胸部下半に穿孔を施されたものが複数認められることなどから周溝墓の一部と推測される。周溝墓とすれば、溝の展開方向から主体部は調査区外に所在するものと考えられる。

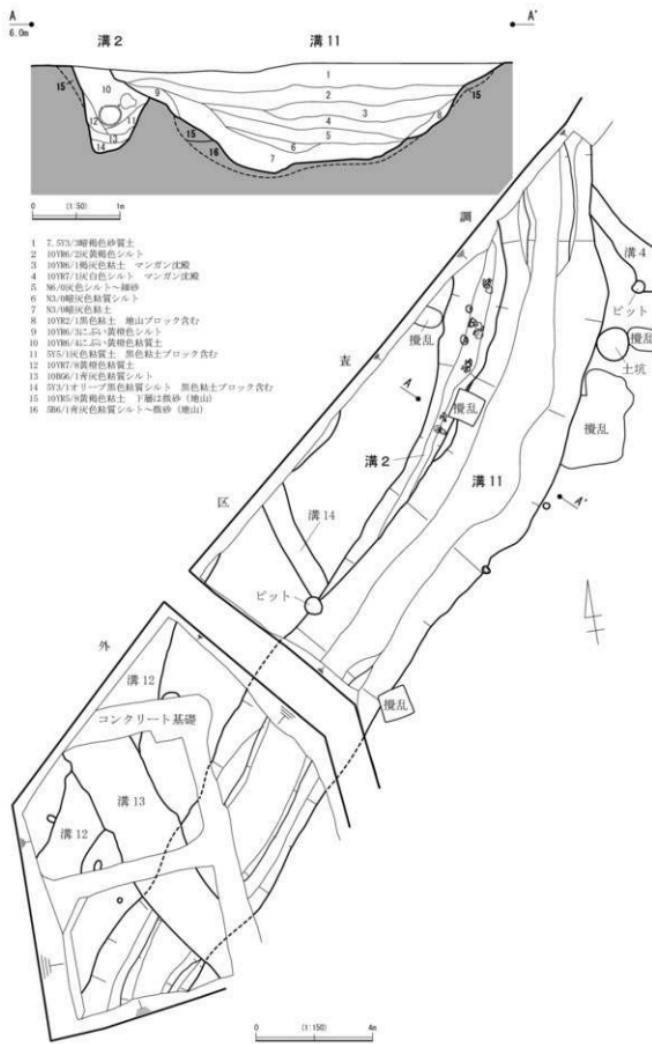
**規 模：**検出された範囲での長さは 9.86 m、幅は 1.85 mを測る。深さは 0.96 mである。

**土 層：**5層に区分される。上・中層(第10～12層)と下層(第13・14層)で様相が異なり、前者は黄橙色シルトを主体とする粘質土層、後者は灰色シルト中に粘土ブロックが多く含まれる層である。中層となる第11・12層直上から葬送祭祀に関連すると考えられる供獻土器が複数個体出土した(第12図)。下層は、遺構構築時に掘削された土砂が再堆積し、湧水等の影響下で変質したような様相を示す。

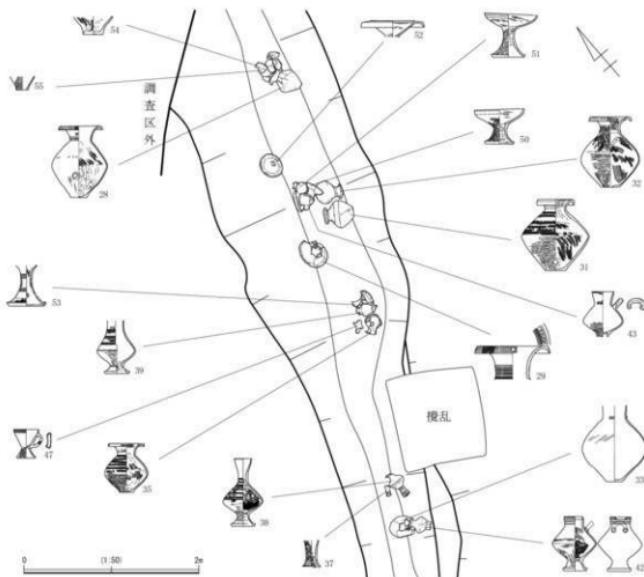
**出土遺物：**周溝墓に供獻されたと考えられる弥生土器が多数出土した。胸部下半や底部に穿孔を施さ



- 1 10Y3/3褐色灰化粘質土 塚山ブロック含む
- 2 10Y3/1褐色灰化シルト 塚山ブロック含む
- 3 10Y3/4明褐色灰化粘質シルト 灰含む
- 4 10Y5/6黄褐色灰化粘質土 (塚山)



第11図 溝2・11



第12図 溝2 遺物出土状況

れたものがあり、完形で出土したものや、土圧によって割れているものも完形に復元できるものがほとんどであった。出土時の平面配置を見ると、3～7個体で一群をなすような土器集中範囲が4グループほど連なっているような状況である。これらの土器には、西側の壁面に張り付くような状況で出土したものが多い（写真4・41）。供献土器以外では、上層を中心に土器破片が一定量出土した。

今回の報告では、供献土器を中心にして弥生土器34点と、混入品と考えられる土器師1点を抽出し、次節において詳述する。

**造構時期：**出土した遺物から、造構の埋没時期は弥生時代中期後半頃と考えられる。

### ■溝3（第13図、写真46～50）

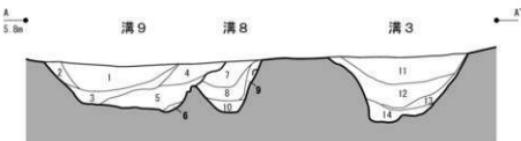
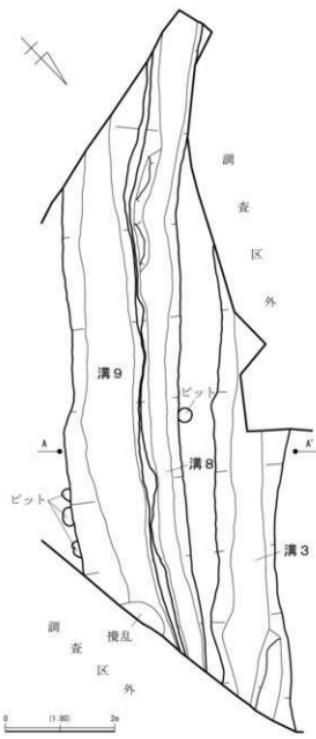
**位置：**調査区西端のJ・K2、I・J3グリッドに位置する溝状造構である。造構の両端は、それぞれ調査区外へ及んでいる。造構確認面の高さは標高5.50mで、現地表面から約1.5m下に位置する。主軸方向はN-52°Eを示す。

**形態：**平面形は溝状で、断面形は逆台形状をしている。底面はほぼ平坦で、壁面は外側へ緩やかに立ち上がる。北東端の調査区境付近にテラス状の平坦面を持つ。

**規模：**検出された範囲での最大長は8.03mを測る。幅は1.38mで、深さは0.60mを測る。

**土層：**4層に区分される。黒褐色シルトを主体とし、レンズ状に堆積している。上層を中心に弥生土器の破片が多く出土した。

**出土遺物：**上層から出土した遺物には大ぶりの破片や、接合して完形に近く復元できるものが多く、



- 1 10YR2/2黒褐色シルト
- 2 10YR2/1黒色シルト
- 3 10YR4/2灰黄褐色色シルト
- 4 10YR4/2灰黄褐色色シルト
- 5 10YR4/2灰黄褐色色シルト
- 6 10YR4/3c-5c 黄褐色シルト
- 7 10YR3/4褐褐色色シルト

- 8 10YR2/3黒褐色シルト やや結る
- 9 10YR4/3にひび 黄褐色色シルト
- 10 10YR3/2黒褐色シルト
- 11 10YR3/2黒褐色シルト
- 12 10YR3/2 黑褐色シルト やや細粒
- 13 10YR4/3にひび 黄褐色色シルト
- 14 10YR3/2黒褐色シルト にひび 黄褐色色シルトを含む

第13図 溝3・8・9

溝の埋没時に廃棄場所として使われたものと考えられる。

今回の報告では、これらの遺物のうち弥生土器 34 点、石器 2 点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は弥生時代後期前半頃と考えられる。

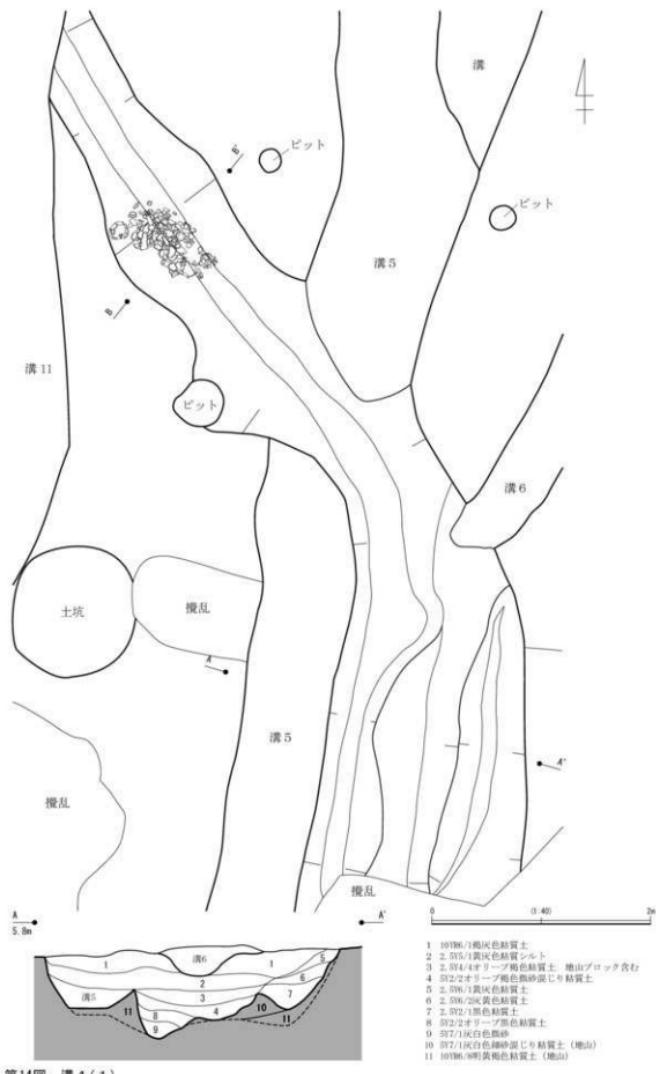
#### ■溝4（第14・15図、写真51～55）

**位置：**調査区中央付近 F・G 8、F～H 9 グリッドに位置する溝状遺構である。溝 5・6・11 に切られ、南側の調査区境は擾乱に壊されている。北側と南側は、それぞれ調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高 5.58 m で、現地表面から約 1.4 m 下に位置する。軸方向は、北側と南側で大きく異なり、北側では N-37°W、南側では N-8°E を示す。

**形態：**平面形は湾曲する溝状で、断面形は北側で V 字状、南側で不整形な凹字状をしている。底面は湾曲し、壁面は急斜に立ち上がる。

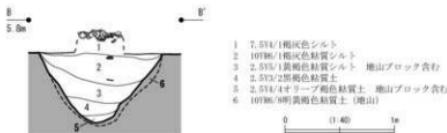
**規模：**検出された範囲での長さは 9.39 m を測る。幅は北側と南側で大きく異なり、北側は 1.12 m、南側は 1.98 m を測る。深さは 0.8 m 前後である。

**土層：**北側では 5 層に分かれ、南側は溝 5 と重複する部分で最大 9 層に区分される。上層は褐灰色シルトを主体とし、溝 5 の埋没時まで開口していたようである。下層はオリーブ褐



第14図 溝4(1)

## 第II章 溝の口遺跡の調査成果



第15図 溝4(2)

色シルトを主体とし、溝5の使用時にはすでに埋没していたものと考えられる。北側の調査区境付近では上層の検出面上から弥生土器がまとまって出土した。

**出土遺物：**北側の遺物集中部からは、弥生土器の甕・壺・高杯・器台などの破片が密集して出土し、埋没時の最終段階において廃棄行為が行われたものと考えられる。

今回の報告では、遺物集中部から出土した弥生土器を中心にして13点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は弥生時代後期前半頃と考えられる。

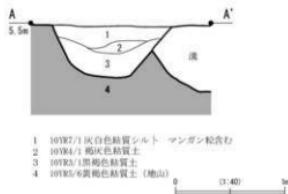
### ■溝5（第16図）

**位置：**調査区中央付近のF～I 9グリッドに位置する溝状遺構である。溝4を切り、上端の一部は擾乱に切られている。北側と南側は、それぞれ調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高5.47mで、現地表面から約1.5m下に位置する。軸方向は、北側と南側で若干異なり、北側ではN-11°-W、南側ではN-8°-Eを示す。

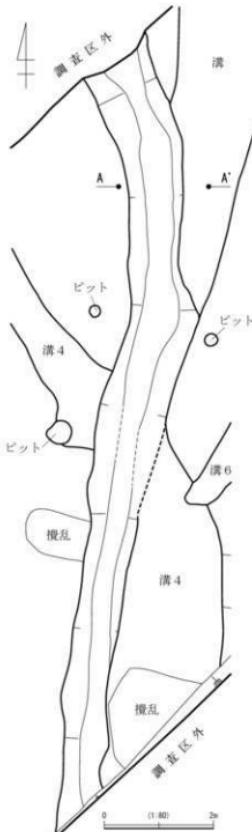
**形態：**平面形は溝状で、断面形は逆台形状をしている。底面はやや渦曲し、壁面は緩やかに外側へ向けて立ち上がる。

**規模：**検出された範囲での長さは14.00mを測る。幅は1.08mで、深さは0.46mを測る。

**土層：**3層に区分される。灰白色や黒褐色のシルトを主体とし、上層にはマンガン粒が多く混入



第16図 溝5



している。

**出土遺物：**弥生土器の壺・甕・高杯・蓋などが出土した。出土状況に大きな特徴は見られない。

今回の報告では、出土した遺物のうち弥生土器4点を抽出し、次節において詳述する。

**造構時期：**出土した遺物から、造構の埋没時期は弥生時代後期前半頃と考えられる。

#### ■溝6（第17図、写真56・57）

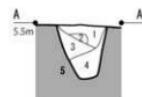
**位置：**調査区中央付近のF・G9、E・F10グリッドに位置する溝状造構である。溝1・4を切る。北側と南側の一部は擾乱に切られている。造構の両端は、それぞれ調査区外へ及んでいる。造構確認面の高さは標高5.48mで、現地表面から約1.5m下に位置する。軸方向はおおむねN-17°Eを示す。

**形態：**平面形は緩やかに蛇行する溝状で、断面形はU字状をしている。底面は湾曲し、壁面は急斜に立ち上がる。

**規模：**検出された範囲での長さは17.64mを測る。幅は0.44mで、深さは0.49mを測る。

**土層：**4層に区分される。黒褐色シルトを主体とし、上層から遺物が比較的多く出土した。

**出土遺物：**弥生土器の甕や高杯などが出土した。出土状況に大きな特徴は見られない。

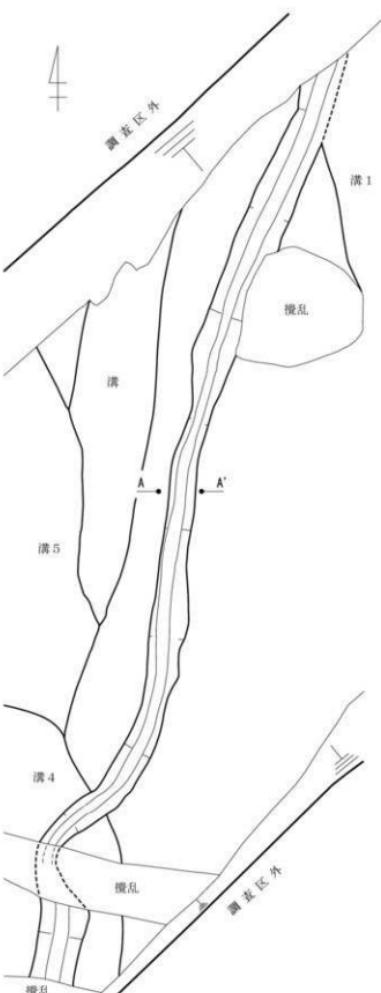


- 1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
- 2 10YR6.5黑褐色粘質シルト
- 3 10Y5.5/4 黑褐色粘質シルト
- 4 2.574/4オリーブ色粘質土 しまり強い
- 5 10Y5.6 黄褐色粘質土 (地山)

0 (1.40) 1m

0 (1.40) 2m

第17図 溝6



い。

今回の報告では、出土した遺物のうち弥生土器7点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は弥生時代後期前半頃と考えられる。

#### ■溝7（第18図、写真58・59）

**位 置：**調査区東側のB 13～15、C 15グリッドに位置する溝状遺構である。溝10に切られている。西側と東側は、それぞれ調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高5.18mで、現地表面から約1.8m下に位置する。主軸方向はN=79°-Wを示す。

**形 態：**平面形は溝状で、断面形は浅い皿状をしている。底面及び壁面は緩やかに湾曲している。

**規 模：**検出された範囲での長さは12.66mを測る。幅は2.60mで、深さは0.29mを測る。

**土 層：**5層に区分される。黒褐色シルトを主体とし、粘土ブロックが混入している。

**出土遺物：**弥生土器の壺・甕や鉢などが出土した。出土状況に大きな特徴は見られない。

今回の報告では、出土した遺物のうち弥生土器13点を抽出し、次節において詳述する。

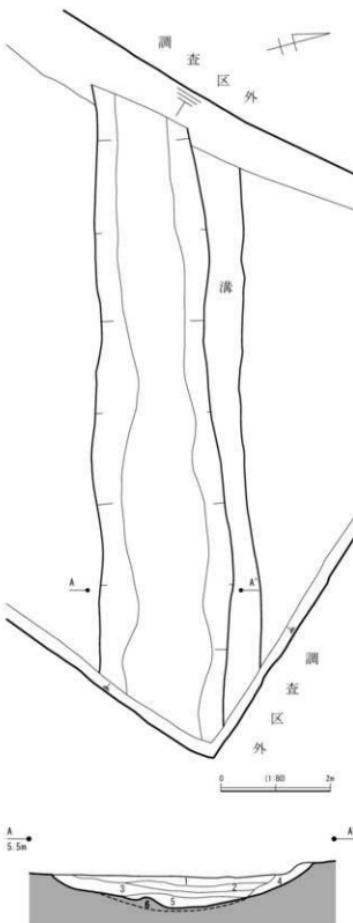
**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は弥生時代後期前半頃と考えられる。

#### ■溝8（第13図、写真60・61）

**位 置：**調査区西端のJ 2・3、K 1・2グリッドに位置する溝状遺構である。北東側は溝9に切られ、遺構の両端はそれぞれ調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高5.43mで、現地表面から約1.6m下に位置する。軸方向は、西側と東側で若干異なり、西側ではN=60°-E、東側ではN=46°-Eを示す。

**形 態：**平面形は溝状で、断面形はV字状をしている。底面の幅は狭く平坦で、壁面は急斜に立ち上がる。南西の壁際にテラス状の平坦面が2箇所ある。

**規 模：**検出された範囲での長さは11.84m



- 1 10B6/1黄褐色粘質シルト マンガン粒含む
- 2 10B6/2灰褐色粘質シルト
- 3 10B6/3灰褐色粘質シルト
- 4 10B6/3に近い黄褐色粘質シルト
- 5 5T7/1K白色粘質シルト
- 6 10B5/5黄褐色粘質シルト(地山)

第18図 溝7

を測る。幅は場所により違いがあり、最大で 0.88 m、最小で 0.37 m を測る。深さは 0.47 m を測る。

**土 層：**4 層に区分される。暗褐色・黒褐色のシルトを主体とし、レンズ状に堆積している。

**出土遺物：**弥生土器が少量出土した。北隣に接する溝 3 に比べ出土量は少なく、出土状況に大きな特徴はみられない。

今回の報告では、出土遺物のうち弥生土器 4 点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は弥生時代終末期頃と考えられる。

#### ■溝 9（第 13 図、写真 60・61）

**位置：**調査区西端の J 3、K 2・3 グリッドに位置する溝状遺構である。溝 8 を切り、東側の調査区境で近現代の井戸に切られている。南西側と東側は、それぞれ調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高 5.43 m で、現地表面から約 1.6 m 下に位置する。主軸方向は N-48°-E を示す。

**形態：**平面形は溝状で、断面形は逆台形状をしている。底面の幅は広く平坦で、壁面は緩やかに外側へ向けて立ち上がる。

**規模：**検出された範囲での長さは 10.83 m を測る。幅は 1.35 m で、深さは 0.44 m を測る。

**土層：**6 層に区分される。黒褐色や灰黄褐色のシルトを主体とし、埋没時には溝 8 と重複する部分が先行して崩れ、その後レンズ状の自然堆積となった様子が観察できる。

**出土遺物：**弥生土器が少量出土した。出土状況に大きな特徴はみられない。

今回の報告では、出土遺物のうち弥生土器 3 点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は弥生時代終末期頃と考えられる。

#### 3. 古墳時代

##### ■溝 10（第 19 図、写真 62・63）

**位置：**調査区東側の B 13～15、C 14・15 グリッドに位置する溝状遺構である。溝 7 を切る。西側と東側は、それぞれ調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高 5.48 m で、現地表面から約 1.5 m 下に位置する。主軸方向は N-75°-W を示す。

**形態：**平面形は溝状で、断面形は浅い U 字状をしている。底面及び壁面は緩やかに湾曲している。

**規模：**検出された範囲での長さは 12.66 m を測る。幅は西側ほど太くなっている、東側で 0.92 m、西側で 1.97 m を測る。深さは 0.34 m である。

**土層：**灰色シルトを主体とする單一層である。

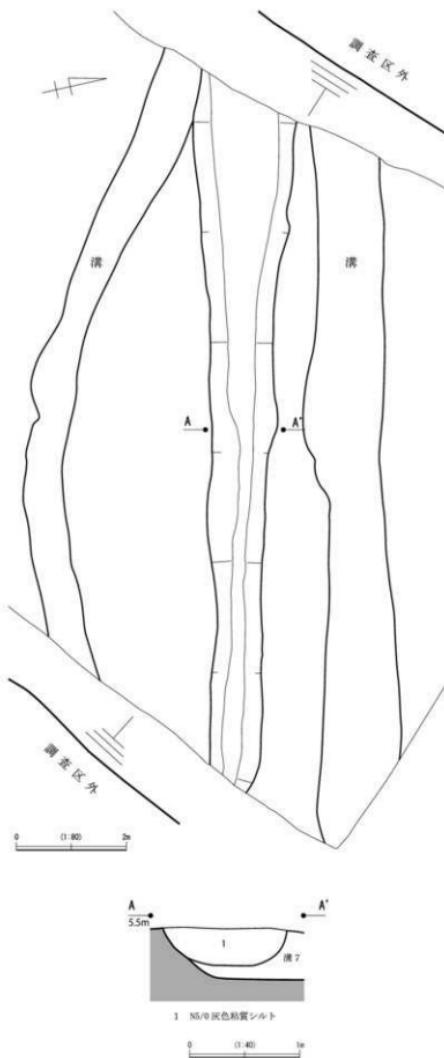
**出土遺物：**底部の一部が欠損した須恵器の長頸壺のほか、土師器や須恵器の小破片が少量出土した。出土状況に大きな特徴はみられない。

今回の報告では、出土した遺物のうち須恵器の長頸壺 1 点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は古墳時代後期頃と考えられる。

##### ■溝 11（第 11 図、写真 64・65）

**位置：**調査区西寄りにおいてグリッド F ラインから L ラインにかけて位置する大型の溝状遺構である。溝 13・14 に切られ、溝 2・4 を切る。また、複数箇所でコンクリート基礎などの擾乱に切られている。北東側と南西側は、それぞれ調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高 5.54 m で、現地表面から約 1.5 m 下に位置する。軸方向は 17 グリッド付近を境に変化しており、これより北東側では N-11°-E、南西側では N-41°-E を示す。



第19図 溝10

**形態:** 平面形は湾曲する溝状で、断面形は外側に開いたU字状をしている。底面はわずかに湾曲し、壁面は緩やかに立ち上がる。場所により壁面下部にテラス状の平坦面を持つ。平面形状が湾曲し、壁面はなだらかで掘削の痕跡が認められることから自然流路によって形成された溝と考えられる。

**規模:** 検出された範囲での長さは33.65mを測る。幅は4.20m、深さは1.20mである。

**土層:** 7層に区分される。上層は灰黄褐色シルト、下層は暗灰色粘質シルトを主体としている。

**出土遺物:** 埋土から縄文土器や弥生土器、土師器・須恵器の各種破片及び石器が出土した。

今回の報告では、出土した遺物のうち縄文土器1点、弥生土器14点、土師器・須恵器5点、土製品2点、石器3点を抽出し、次節において詳述する。

**造構時期:** 出土した遺物から、遺構の埋没時期は古墳時代後期頃と考えられる。

## 4. 古代

## ■溝12（第20図）

**位置：**調査区西側のI 5、J 4・5、K 4グリッドに位置する溝状構造である。また、H 6グリッドの調査区界においてもわずかに溝の落ち込み部分を確認した（第7図）。溝13に切られ、部分的にコンクリート基礎の擾乱に壊されている。北東側と南西側は、それぞれ調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高5.41mで、現地表面から約1.6m下に位置する。主軸方向はN-31°-Eを示す。

**形態：**平面形は溝状で、断面形は幅広の凹字状をしている。底面は部分的に凹凸があり、壁面はやや急斜に立ち上がる。

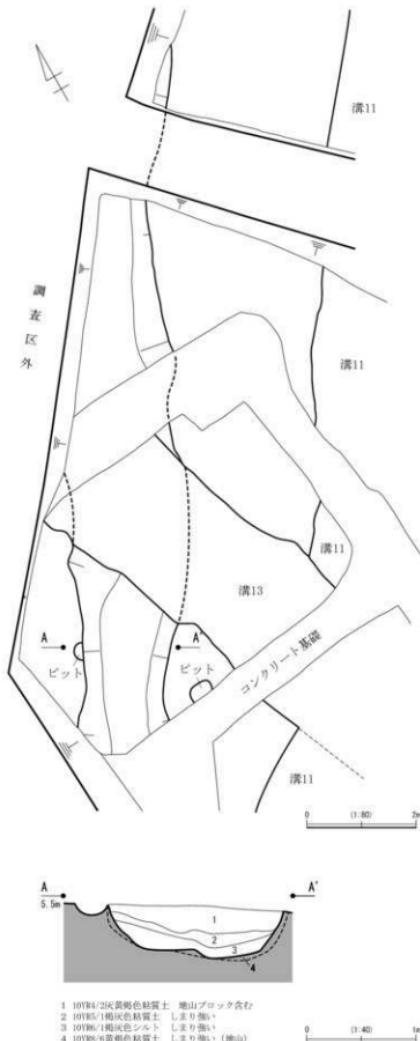
**規模：**検出された範囲での長さは12.42mを測り、H 6グリッドで確認された延長部分を含めると18.42mである。幅は1.70m、深さは0.48mである。

**土層：**3層に区分される。上層は灰黄褐色シルト、下層は褐色シルトを主体としている。

**出土遺物：**土師器や須恵器のほか、混入品と考えられる弥生土器片や石器などが出土した。出土状況に大きな特徴は見られない。

今回の報告では、出土した遺物のうち弥生土器1点、土師器・須恵器2点、石器1点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は平安時代前期頃と考えられる。



第20図 溝12

## ■溝13(第21図、写真66~68)

**位置:** 調査区西側のJ4・5、K4・5、L5グリッドに位置する溝状遺構である。溝11・12を切る。部分的にコンクリート基礎の擾乱に壊されている。北側と南側は、それぞれ調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高5.43mで、現地表面から約1.6m下に位置する。主軸方向はN=25°Wを示す。

**形態:** 平面形は溝状で、断面形はやや不整形なV字形をしている。底面は部分的に凹があり、壁面は急斜に立ち上がる。

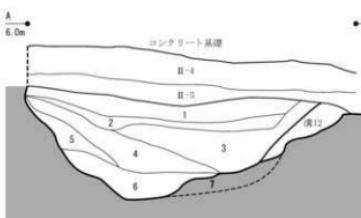
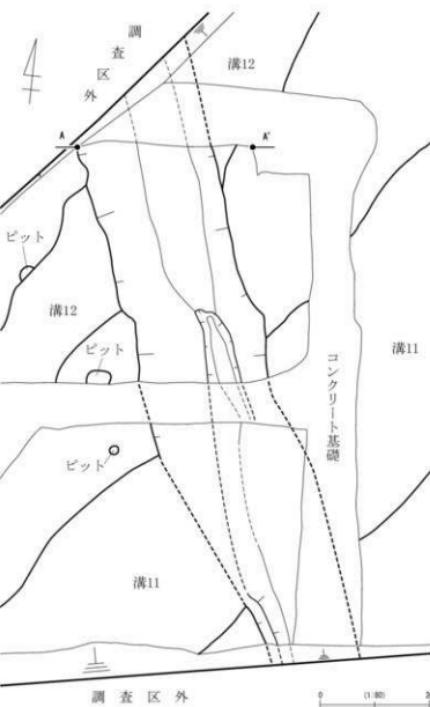
**規模:** 検出された範囲での長さは9.55mを測る。幅は2.38m、深さは0.93mである。

**土層:** 6層に区分される。上層は灰褐色シルト、下層は灰黄色系の粘質シルトを主体としている。上層から「福器」と墨書きされた須恵器杯が出土した。

**出土遺物:** 土師器・須恵器や瓦などのほか、混入品と考えられる弥生土器片などが出土した。出土状況に大きな特徴は見られない。

今回の報告では、出土した遺物のうち弥生土器3点、土師器・須恵器25点、磁器・陶器2点、瓦3点、土製品1点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期:** 出土した遺物から、遺構の埋没時期は平安時代前期頃と考えられる。



第21図 溝13

**■溝14（第22図）**

**位置：**調査区西寄りのH・I 6 グリッドに位置する溝状遺構である。溝2・11を切る。北側は調査区外へ及んでおり、南側はJ 6 グリッドの半ばに至ったところで後世の削平等により不明瞭になる。遺構確認面の高さは標高 5.55 m で、現地表面から約 1.5 m 下に位置する。主軸方向は N-17°-W を示す。

**形態：**平面形は溝状で、断面形は浅い皿状をしている。底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。

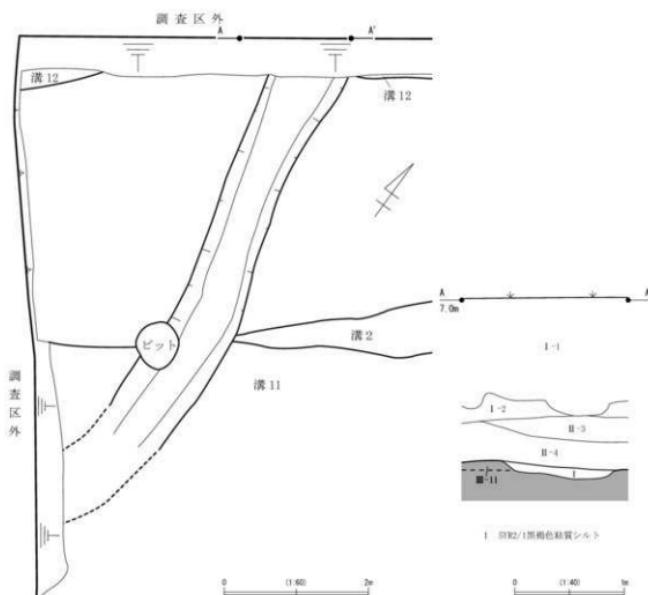
**規模：**検出された範囲での長さは 5.61 m を測る。幅は 0.95 m、深さは 0.18 m である。

**土層：**黒褐色シルトを主体とする單一層である。

**出土遺物：**土師器・須恵器・瓦などが出土した。出土状況に大きな特徴は見られない。

今回の報告では、出土した遺物のうち土師器・須恵器 10 点、瓦 1 点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は平安時代前期頃と考えられる。



第22図 溝14

## 第4節 出土遺物

### 1. 概要

溝之口遺跡の調査では、遺物収納コンテナ 57 箱分の遺物が出土した。弥生土器や土師器・須恵器が多いが、縄文土器や瓦、石器類なども若干出土した。

本報告書では、出土遺物のうち比較的の遺存状態が良好で実測・記録可能な遺物 221 点を抽出し、以下にその詳細を述べる。

### 2. 溝之口遺跡の出土遺物

#### ■井戸 1 出土遺物（第 23 図：1～6）

弥生時代中期の壺・甕が出土している。

1～3 は壺である。1 は壺肩部の小破片でヘラ描沈線の間に 2 段に細い竹管状の工具で刺突文が施される。2 は最大径が上方にあり肩の張る体部で、輪積み痕・ユビオサエ痕が顕著な厚手のつくりである。3 の底部は内側から充填した粘土板の痕跡が顕著である。

4・5 は甕である。4 はし字状に外側に粘土紐を貼付けた端部に刻み目、肩部に 6 条のヘラ描沈線を施す。5 は如意形の口縁を持つ。6 は立ち上がりの急な底部で、甕のものと思われる。

いずれも II 様式、中期初頭に属する。

#### ■溝 1 出土遺物（第 23・24 図：7～23、S 1）

弥生時代中期の壺・甕・蓋、石鐵が出土している。

7～12 は広口壺である。7 は肥厚した口縁端部にヘラ描沈線、上下に綾杉状に刻み目を施し、頸部に 7 条のヘラ描沈線をめぐらせる。8 はほぼ直立する口縁端部を水平方向に肥厚し、外面直下に 12 条のヘラ描沈線をめぐらせる。9 は口縁端部直下内外に突帶を貼付け、棒状工具を押捺して刻む。頸部に 11 条のヘラ描沈線をめぐらせる。10 は口縁端面に沈線、上下に刻み、頸部に半截竹管による直線文・流水文を交互に、その下方に波状文を施す。11 では頸部外面に 3 帯の櫛描き直線文を連続して施す。12 は壺肩部と思われ、ヘラ描沈線による下書きの上に粘土紐を貼付け、突帶としている。

13～16 は甕である。いずれも如意形口縁を持ち、13 では体部に櫛状工具（4 条単位）により波状文 1・直線文 2 を 3 回繰り返し施す。14 では半截竹管により 3 帯、計 6 条の沈線、15 では 7 条のヘラ描沈線を施す。17・18・19 はおそらく甕の底部であろう。20 は底部中央に焼成前穿孔を持つ底部、21 は小さな脚台を持つ底部である。

22・23 は蓋で、上面は壅む。

いずれも II - 1・2 様式（中期初頭）に属するものである。

S 1 は凸基無茎式の打製石鐵である。先端部が欠損する以外は概ね完形に近い。両面とも中央部に剝離面を大きく残したうえで、押圧剝離によって刃部のみ調整される。そのため断面は六角形を成す。石材は、肉眼観察の所見から金山産サヌカイトと推測される。

#### ■溝 2 出土遺物（第 24～27 図：24～58）

弥生時代中期の壺・甕・高杯・鉢、古墳時代の擬韓式系平底鉢が出土している。

24 は広口長頸壺である。中期初頭（II 様式）に属する。頸部～肩部に櫛描き直線文が 3 帯残る。

以下はIII～IV様式に属する。

25・26は頸部に断面三角形突帯を持ち、いずれも加飾が多用される壺である。この中では古い様相を示し、III様式前半に属する。25では突帯に直交する2本1組の棒状浮文を6方に、口縁内面にも2本の突帯と直交する2本1組の棒状浮文を貼付け、外縁に半截竹管による刺突列点文、その上に円形浮文を等間隔に貼付ける。また垂下した端面にはヘラ描の綾杉文を施し、円形浮文を等間隔に貼付ける。26では口縁部内面に外側から円形浮文・竹管文を並べ、肥厚垂下した端面には櫛描き波状文、その上に円形浮文を等間隔に貼付ける。頸部の3本の突帯の上方には竹管文を刺突する。いずれもこの地域のこの時期に特徴的な装飾壺である。

以下27～51はIV様式に属する。

27～36は広口壺である。27～29の頸部には一見回線文のようにも見える低い突帯が強くナデつけられている。27は大きく垂下した口縁端面に2条の回線文、6個1組（ $2 \times 3$ ）の円形浮文を推定7方向、その間に上半垂直・下端斜めのヘラ状工具による刻みを施す。28は垂下した口縁端面に4条の回線文、縦に3本1組の棒状浮文を4方に付加、その間に円形浮文の剥離痕跡が僅かに認められる。体部上位には刺突文がめぐる。体部下半に焼成後穿孔がある。内面最大径部（屈曲部）にユビオサエ痕が顕著に確認できる。29は大きく垂下した口縁部端面に多条の回線文、直交する6～12本単位の棒状浮文と円形浮文を交互に貼付ける。口縁内面には半截竹管による斜格子文、その内側に4条の回線文をめぐらせる。

30・31は頸部に通常のB種回線文がめぐる。いずれも口縁端部の垂下が顕著である。30では29と同様に端面に多条の回線文、直交する6本単位の棒状浮文と円形浮文を交互に貼付ける、口縁内面には円形浮文と3個1組の小円孔で加飾される。31の端面には波状文状の痕跡が認められる。体部上半には櫛描直線文3帯の間に波状文3帯、連続円形浮文2帯が施され、下半底部近くに焼成後穿孔がある。内面体部上半の円形浮文に対応するユビオサエ痕が顕著にみられる。

32・33は頸部に指彌頭痕文突帯がめぐる。32は垂下した口縁端面に3条の回線文、縦に3個並ぶ円形浮文、体部上半に櫛状工具による刺突文（2重）を2帯施す。口縁内面に2個1組の小円孔を4方に穿つ。内面には頸部下端の突帯に対応してユビオサエ・ナデが顕著である。底部中央に焼成後穿孔を穿つ。33は体部上半にヘラ状工具により斜行文を施す。

34～36は頸部に突帯を持たない。34は上下に肥厚した口縁端面に2条の回線文、その上にヘラ状工具によるほぼ垂直方向の刻みを施し、6個1組（ $2 \times 3$ ）の円形浮文を4方に貼付ける。口縁内面と肩部に櫛描き波状文が施される。35は肥厚・垂下した口縁端面に櫛描き波状文を施しその上に円形浮文（6～7個1組、4方向）を貼付ける。肩部に櫛描直線文・波状文を交互に3組、下端の1組の上にそれぞれ4個1組の円形浮文を付加する。36は垂下した口縁端面に櫛状工具による斜めの刺突文、3個1組の円形浮文（残存1組・推定4方）を貼付ける。体部上半に櫛状工具による刺突文を2帯、下段に3個1組の円形浮文（残存5組・推定6方）を付加する。口縁端部と体部下半にスヌが付着している。

37～40は細頸壺である。37は破片の上端に2条の回線文が残り、一部下降が見られる。口縁部に近い部分で、抉りがあったものかと推定される。以下に櫛描き波状文・直線文を交互に2組、下端に断面三角形突帯を2条貼付ける。肩部に波状文、その上に円形浮文が貼付けられる。38は口縁下に7条の回線文、頸部へ体部上半に櫛描直線文・波状文を交互に施す。37・38は近接しての出土である。39は外面頸部へ体部上半に櫛描き波状文・直線文を交互に4組施す。脚接合部に3条のヘラ描沈線、脚部に長方形の透かしを4方向に穿つ。体底部は円盤充填（38・39は剥落）。40は同様の技

法であるが、体部が算盤玉状には張らず、丸みの強い体部の重心が下方にある。

41～43は水差しで、いずれも把手を持つ。41は口縁外面に7条の回線文を施し倒卵形の体部、底部に焼成前穿孔がある。ヌスの付着が認められる。42・43はほぼ直立する口縁部に回線文を施し、1箇所に抉りを入れ把手を付ける。算盤型の体部に脚台を付け、体底部は円盤充填による。42では肩部に櫛状工具による刺突列点文を施す。

44・45は無頭壺である。44は内湾する口縁部で、5条の回線文・2個1組の小円孔（鈎孔）が認められる。45は脚接合部で回線文・2個1組の小円孔（鈎孔）が穿たれる。体底部の円盤充填は剥落している。

46は甕である。く字口縁で端部を若干引き上げる中型品である。

47・48は台付鉢である。47は口縁外面に3条の回線文を施し、47・48は共に縦方向に把手を付ける（断面に挿入）。鉢底部は円盤充填による（剥落）。

49～53は高杯である。49～51は楕形の大型品で口縁端部を水平方向に肥厚し、外面に回線文をめぐらせる。52は水平口縁を持つ木器形の高杯で、内面に断面矩形の突帯を貼付ける。53は脚部で上端部と中位に8～9条のヘラ描沈線、その間に長方形、下に紡錘形透かしを穿つ。脚据部はミガキの後、細く鋭利な工具（金属器か）による鋸齒文・格子文を直線で画して施す。杯底部はいずれも円盤充填。

54～56は底部である。54は壺のものか。56は底部中央に焼成後穿孔がある。

57は厚手の底部中央に焼成前穿孔があり、後期の有孔鉢である。

58は外反口縁を持つ小型品で、外面に粗い板ナデがみられる粗製品である。擬輪式系平底鉢（古墳時代、6世紀初頭）である。他の遺物と時期的に大きな隔たりがあるため混入品と考えられる。

### ■溝3出土遺物（第27～30図：59～92、S2・3）

弥生時代の壺・甕・高杯・鉢・器台、石鐵が出土している。

59・60は中期初頭（II様式）に属する。59は広口壺で口縁端部を上方に引き上げて肥厚し、上下に刻み目を施す。頭部に沈線がめぐる。60は外反口縁をもつ大型の鉢である。器壁は荒れているが、横方向にミガキ状の凹凸が残る。

61～92はIV様式末～V様式の幅を持つ時期に属する土器である。

61～68は壺である。61～63は広口壺で、61・62は肥厚した口縁端面に擬回線をめぐらせ、IV様式末の要素が強い。64～66は長頸壺、67・68は壺の体部と思われ、V様式前半に属する。

69～76は甕である。69・71は中期の様相が濃く、く字状口縁で端部を肥厚するもので、71は大型で口縁端面と内面に竹管文を連続して押捺する。70・72～74はV様式初期のもので口縁端面に肥厚が見られる。75・76はV様式後半にあたる。

77～84は高杯である。77・78は楕状の杯部を持ち、78の口縁には1条の擬回線がめぐり、内外面共に丁寧なミガキで精製品である。79～82は屈曲して立ち上がる有稜口縁を持つ杯部で、79は立ち上がりが小さく口縁端部を肥厚する。80の口縁内外面には浅い擬回線が見られ、79と共にV様式前半の特徴を持ち他のものより古い様相を示す。82の杯底部には粘土充填の痕跡が残る。83・84はそれぞれ4方に円孔を穿つ脚部である。

85・86は外反口縁鉢、87は不安定な尖底に焼成前穿孔を持つ有孔鉢である。

88～90は筒状の体部を持つ器台である。88は垂下した口縁端面に4条の擬回線、その上に竹管文押捺円形浮文を全周等間隔に貼付ける。筒部に円形透かしを5方向3段に穿ち、脚端部を欠く。89

は口縁部を肥厚し、筒部に円形透かしを上段3方、下段4方に穿つ。90の脚部には6方向に円孔を穿つ。

91は脚台、92の底部はやや上げ底になっている。

S2・3は石鐵である。肉眼観察の所見から、いずれも金山産サヌカイト製と推測される。

S2は回基式の打製石鐵である。基部端の一部が欠損する。全体的に極めて薄く銳利に作られており、基部の抉りは浅い。刃部上半では剥離方向を変化させることによる傾斜の急変化がみられ、五角形鐵であると考えられる。

S3は平基式の打製石鐵である。全体的に薄く銳利に作られている。基部は片面から細かく丁寧に剥離されているが、裏面は基部に大きな剥離面が残され、刃部の加工も左右非対称であることから未製品の可能性がある。

#### ■溝4出土遺物（第30図：93～105）

弥生時代後期（V様式）前葉に属する壺・甕・高杯・鉢・器台が出土している。一括性は高い。

93は長頸壺で、頸部下端に刺突列点文がみられるが、全周するかは不明である。

94・95は甕である。99はく字状口縁で端部を肥厚し擬回線をめぐらせる。95は厚手の小型品である。

96～102は高杯である。96・97は楕形、98・99是有稜高杯である。100～102はいずれも杯部中央にヘソ状粘土充填の痕跡が見られる。脚部透かしは、97が4方、100・102が3方に穿たれる。

103は小型の鉢である。口縁はわずかに外反し端面を有する。

104・105は器台である。104は口縁が大きく開くが、端部の肥厚・加飾はみられない。いずれも円形透かしを3方に2段穿つ。

#### ■溝5出土遺物（第30図：106～109）

弥生時代の壺・甕・高杯・蓋が出土している。

106は中期の短頸壺で、頸部に指頭圧痕文突帯がめぐる。

107はく字状口縁の甕、108は屈曲する杯部を持つ有稜高杯である。109は小さな頂部のくぼむ蓋で、後期前葉の様相を示す。

#### ■溝6出土遺物（第31図：110～116）

弥生時代の甕・鉢・高杯が出土している。

110は把手付きの鉢で中期初頭（II様式）のものである。111は外反口縁の中型の小型甕である。

以下は主に後期（V様式）前半のものである。

113・114は甕で、何れも重心は上方にある。114は大型品。

115・116は高杯である。115是有稜高杯、116の脚部はしばり成形後ナデ調整され4方に円孔を穿つ。

112は底部である。ユビオサエ痕が顕著で、底面に線刻様の痕跡がある。

#### ■溝7出土遺物（第31図：117～129）

弥生時代後期の壺・甕・高杯・鉢・蓋が出土している。ほぼ後期（V様式）前半に収まるものである。

117は広口壺である。肥厚した口縁端面に2条の擬回線をめぐらせる。

118・119は小型の直口壺である。同一個体の可能性がある。底面に線刻状に圧痕が残る。

120～123は甕である。いずれもく字状口縁を持つが、風化が顕著である。

124は高环脚部で、円形透かしを4方に穿つ（残存3個）。

125は鉢である。ユビオサエにより低い脚台を付加する。

126～128は底部である。128は底部中央に径2mm程度の小さな焼成前穿孔を穿つ。

129はユビオサエによる小さなつまみを持つ蓋である。

#### ■溝8出土遺物（第31図：130～133）

弥生時代の壺・甕が出土している。

130は中期初頭（II様式初現期）の甕である。口縁端部に刻み目、肩部に4条のヘラ描沈線を施す。

131～133は終末期（庄内期）に属する。131は広口壺で、上下に肥厚した口縁端面に櫛描き波状文、その上に竹管文押捺円形浮文2個1組を6方に貼付ける。132・133はタタキ甕の底部である。

#### ■溝9出土遺物（第32図：134～136）

弥生時代の壺・甕・鉢が出土している。

134は広口壺である。ほぼ直立する口縁の端部に刻み目を施す。135は甕で、口縁端部に刻み目、肩部に4条のヘラ描沈線を施す。中期初頭（II様式初現期）に属する。

136は不安定な尖底の中央に焼成前穿孔を施す有孔鉢である。終末期（庄内期）に属する。

#### ■溝10出土遺物（第32図：137）

須恵器壺が出土している。

137はやや重心の高い体部に外傾する長い口部をつくる壺である。口縁部はやや内湾気味につくり、口縁端部は内傾面をつくっている。体部肩部に2条の沈線を施して画する。体部下半に粘土層の付着痕跡が波うちながら巡っており、湿台痕跡と考えられる。

#### ■溝11出土遺物（第32・33図：138～159、54～6）

縄文時代晩期の鉢、弥生時代の壺・甕・高环・鉢・蓋、古墳時代の須恵器蓋・瓶・提瓶・杯・鍋把手・土製支脚・管状土錐と、打製石鏃・楔形石器・磨製石斧が出土している。

溝11最下層出土の遺物である縄文土器138は、重心をやや上におく胴部に外反する刻み目を施す屈曲口縁の浅鉢である。口縁部下に粘土紐をナデ付けて、刻み目を刻んで突帯状に仕上げ突帯から頭部までは横方向のミガキ、胴部はヘラケゼリで仕上げ、縄原式もしくは滋賀里IV式とみられる。

139～152は弥生土器である。

139・140は甕底部で、139には外面ミガキが残るがスス付着があり、中期の甕のものと思われる。

以下は終末期（庄内期）に属する。

141は口縁が短く開く広口壺である。142は二重口縁壺で、口縁外面に櫛描き波状文を施し、その上に重ねて竹管文押捺円形浮文を貼付ける。143・144は小ぶりの壺底部と思われる。

145～147は甕である。145は大型のタタキ甕で、不安定な底部の146と同一個体かと思われる。

147はドーナツ状の上底のタタキ甕底部で被熱が顕著である。

148・149は不安定な底部中央に焼成前穿孔があり、有孔鉢と考えられる。

150・151は高环である。150の環部の屈曲は甘いが、口縁端部をわずかに肥厚する。151は低脚で円孔は2個残存し、4方に穿たれたものと思われる。

152は蓋である。小さなボタン状のつまみが付き、壺に用いられた可能性がある。

153～156は須恵器である。153は杯H蓋で、天井部と口縁部とを分ける突出部をわずかに残し、

凹線を巡らせる。天井部は平坦で粗いヘラケズリで仕上げる。口縁部端は丸くおさめる。154は幅で、やや内湾し外上方に伸びる筒状の形態を探る。側面下よりに焼成前に穿たれた孔がある。接地部は内傾する端面をつくる。155は提瓶である。やや長めの口頸部で少し内傾する漏斗状をしている。体部は前面が丸くふくれ、背面は平らである。前面は回転を利用したカギ目、背面はヘラケズリで調整する。156は杯Bで、底体部の焼直下にやや外に踏ん張る貼付け高台をつくり、外反する口縁部を強くナデて断面三角形につくる。

157は土師器鍋もしくは盤の把手である。

土製品158は、棒状の両端を少し上方につまみだして、片方の小口を強くナデて産ませ、もう一方の小口はユビオサエとナデで平坦につくる。土製支脚と考えられる。土製品159は、一方が少しせばまる管状の土製品で、大型の土鍤とみられる。

S 4は凹基式の打製石鏃である。全体的に摩滅しているため刃部の鋭利さに欠ける。長幅比が3:1と細長いえに基部に抉りが形成されており特殊な形態である。先端部がとくに摩滅が著しいことから石鍤の可能性も考えられる。石材は肉眼観察からサヌカイト（二上山産）と推測される。

S 5は楔形石器である。相対する上下両側刃および左右両側刃で剝離が対応する両極打法によって形成されている。一部白刃潰れる。石材は肉眼観察からサヌカイト（金山産）と推測される。

S 6は磨製の石斧である。両面とも研磨痕の方向が、上半と下半で異なっていることから両刃石斧と考えられる。上部を欠損し、刃部と思われる位置に打撃による潰れが顕著であるため、使用中欠損の後に廃棄されたものと考えられる。石材は肉眼観察から花崗岩と推測される。

#### ■溝12出土遺物（第33図：160～162、S 7）

弥生時代中期の高坏、平安時代の須恵器杯・土師器椀と、砾石が出土している。

160の高坏の脚端部は上方へ引き上げられしっかりとつくりである。細く鋭利な工具（金属製か）による鋸齒文様・直線・最下段に三角形のくり抜き（未貫通）を施す。

土師器椀161は、板状高台から外上方に伸びる体部をもち、底部の切り離しはヘラ切りのあとナデて仕上げる。

須恵器杯162は、板状高台から外上方に伸びる体部をもち、回転糸切で切り離す。

S 7はシルト岩（泥岩）製の砾石である。中央付近には横方向に幅2cm程度の抉りがみられる。軟質の石材であるため擦痕は不明瞭である。

#### ■溝13出土遺物（第33・34図：163～196）

弥生時代の壺・甕、平安時代の須恵器皿・椀・杯蓋・壺・鉢・高坏、土師器椀・杯・皿・甕・高坏・イイダコ壺、瓦が出土している。

163は弥生時代中期の大型短頸壺で頭部に指頭圧痕文突帯を持つ。口縁端部にヘラ描き綾杉文、突帯は指先で上下2段に押しつけて貼付けている。

164・165は外反口縁の弥生時代後期後半の甕である。

166・167・169～180・182は須恵器である。166・167は、高台を持つ皿で、胎土・焼成とも灰釉陶器に類似するが、施釉はない。166はやや踏ん張る高い貼付け高台から稜のある体部をもつ。底部外面に「福口」の2字の墨書が施される。167は外側に接地する削り出し高台をもつ、内面全体に墨の付着があり、硯に転用している。169は体底部境からやや踏ん張る低い高台をもつ杯Bである。170は杯B II蓋である。天井部につまみを設けず、「福器」の墨書を施す。173はほぼ直立する高い高台に丸い体底部をもつ椀。174・175・177・178は板状高台に内湾して立ち上がる口縁体部をもつ椀である。いずれも高台の側面を丁寧にヘラケズリして仕上げる。そのうち174は底部をヘラ切りして

切り離し、不定方向のナデで調整する。175は口縁と体部境に沈線を施す。177・178は、糸切によって切り離す。176は灰白色の色調から174・175・177・178と同様な板状高台の椀の口縁部とみられる。172は杯Aの底部で、底部外面に「福器」の墨書が施される。鉢179は、「く」字に外反する口縁部をもつ。口縁端部はやや外側に拡張し、端面に1条の沈線をめぐらせる。高台は体底部境直下に低くつくる。体部内面は不定方向の布によるナデで仕上げる。171は蓋で、平底の体部に外に踏ん張る高い高台をつくる。182は高杯の脚部、180は鉢の底部である。

168は緑釉陶器の皿である。丸い口縁体部に内側に接地する貼付け高台をつくる。口縁体部内外面に淡緑色の釉薬を施し、体底部内面に重ね焼き痕跡をみる。

181は青磁底部片である。

183～192は土師器である。椀183は、厚手のやや内湾気味に立ち上がる小型品である。椀底部185は、丸い体底部に直立した低い高台を設け、高台端部は外に拡張する。椀底部186は外に踏ん張る高台をつくる。皿187は、ヘラ切りした板状高台に偏平な体部を中ほどで窪ませ、ほぼ水平な口縁部をつくる。190は、中型の皿で、口縁部は2段にナデで外上方に外反させ、体部と口縁部境に稜をつくる。体底部はユビオサエで成形する。高杯191の杯部の形態は不明で、11面取りした比較的短い脚部から形成される。甕188・189は、直立する体部に外上方に立ち上がる口縁部をつくる。口縁端は、内傾させて上につまみ上げて面をつくる。イイダコ壺192は釣鐘形で釣手部を欠いている。

管状土錐193は、細い紡錘形で完形品である。

平瓦194は、凸面は縄目タタキ、凹面には布目を残す。端部はヘラ切りによる調整を行う。平瓦196は、凸面は格子タタキ、凹面には布目を残し、糸切痕跡がみられる。端部はヘラ切りによる調整を行う。瓦195は熨斗瓦である。凸面を縄目タタキの後ナデすり消し、凹面は布目圧痕で糸切により切り離す。

#### ■溝14出土遺物（第35図：197～207）

須恵器杯・皿・杯蓋、土師器椀・甕・イイダコ壺、瓦が出土している。

197～203は須恵器である。197・198は杯Bで、197は、やや内湾して立ち上がる口縁体部直下にやや内傾する貼付け高台をつくる。底部の切り離しはヘラオコシの後、ヘラケズリで調整する。198は、やや内湾して外に開く口縁体部直下に垂直の貼付け高台を付ける。底部の切り離しはヘラオコシの後、ナデで調整する。199は杯Aである。直線的に外上方に立ち上がる平底につくる。200は皿Aである。直線的に外上方に開く口縁体部に、やや浮かし底の底部をつくる。201・202は杯B蓋で、天井部と口縁部との境は段をつくり、口縁端部はほぼ垂直に下方へ屈曲する。201の天井部はやや丸みを帯び、202の天井部は平坦につくる。杯203は、直線的に外上方に開く口縁体部をつくり、口縁部直下に沈線を施し、体部下部をユビオサエで調整する。

204～206は土師器である。204・206は甕で、204は丸い胴体部に如意状の口縁部を立ち上げる。口縁端部は内側上方につまみ上げて面をつくる。206は長胴の体部に「く」字に外上方にのびる口縁をつくり、端面をナデで凹線を巡らせる。205はイイダコ壺である。ユビオサエによる整形をおこなうが、釣手部を欠損する。

207は平瓦片である。凸面は斜格子叩き、凹面は布目圧痕を残す。

#### ■その他の出土遺物（第35図：208～214）

遺物包含層や今回ピックアップしていない遺構から出土した遺物のうち、特徴的なものを報告する。弥生土器の壺・鉢・須恵器杯・椀、土錐、瓦が出土している。

208は広口壺である。太く短い頸部から外反して聞く口縁をもつ。209は山陰系の二重口縁壺で、立ち上がり部を欠くが、やや肩の張る内湾する体部から短く外反する擬口縁が続き、直線的に立ち上がる口縁をつくると推定される。210は底部中央に焼成前穿孔のある有孔鉢である。口縁端部は内側に段を持つ。いずれも弥生時代終末期（庄内期）に属する。

須恵器杯211は、体底部境直下にやや外に踏ん張り、内側に接地面をもつ貼付け高台をつくる。杯Bである。須恵器椀212は板状の高台にやや内湾気味に立ち上がる口縁体部をつくる。糸切で切り離し底部はややくぼむ。

213は紡錘形をした断面円形の土製品で中央縦方向に円孔をつくる。有機質の軸に粘土を貼付けてつくる土錐である。

214は、凹面布目压痕、凸面繩目叩きで端面をへらで削る平瓦である。

（註1）家根洋多1994「縄文晩期前葉－中葉の広域編年」『平成4年度科学研究費補助研究成果報告』

（註2）田辺昭三編1966『湖西線関係遺跡調査報告』

### 3. 小結

#### （1）弥生時代の土器

弥生時代の土器は中期初頭～終末期までの年代幅を持っており、以下に時期ごとの概観を示す。

#### 弥生中期初頭（II様式前半）

井戸1・溝1・溝2・溝3・溝6・溝8・溝9から出土している。中でも、井戸1・溝1からはこの時期の一括性のある壺・甕・蓋が出土している。胎土には2～3mmの小礫が混入し、焼きはやや甘い。

壺や甕の口縁端部には刻み目、口頭部・肩部外面には、へら状工具による多条の沈線、半截竹管による直線・流水・波状文、櫛状工具による直線・波状文、竹管文、貼付け突帯などの加飾がみられる。

#### 弥生中期中頃（III様式）

溝2から出土の25・26は回線文出現以前の東播磨に通有の加飾の多い装飾壺である。

#### 弥生中期後半（IV様式）

出土弥生土器の内ではこの時期に相当するものが最も多く、主に溝2からまとまって出土している。おそらく供献土器の一群ではあるが、壺の頸部への貼付け突帯とB種四線文が混在しており、回線文出現期から盛行期に至る型式上の時期幅がある。27～29の頸部には西播磨でIV～2期に示される一見四線文のようにも見える形骸化した低い突帯が強くナデつけられており、その中間形態にもあたる。

國化できたものでは圧倒的に壺が多く、器種も広口壺・細頸壺・水差し・無頸壺と多様で、焼成後穿孔も見られる。いずれも磨擦に通有の加飾が多用されており、櫛描き直線文・波状文・円形浮文・棒状浮文・列点文等で飾られる。高坏がこれに続く。遺物はこれらの時期幅によって特に偏ることなく散在し、それぞれが近接して出土しており（第12図：出土状況図参照）、遺物の出土状況からの供献時期の差は確認し難い。

溝5・13から出土の頸部に指頭圧痕文突帯を有する太頸短頸壺は前（III）様式から続くものである。

#### 弥生後期前半（V様式前半）

溝3・溝4・溝7からまとめて広口壺・長頸壺・甕・鉢・高坏・器台などが出土している。溝3出土の79・80の高坏は瀬戸内系の要素を示す。

#### 弥生終末期（庄内期）

溝8・溝11から出土の広口壺・二重口縁壺・有孔鉢・高坏などが特徴的である。

## (2) 古墳時代・古代の土器

古墳時代の出土遺物は、溝 10・溝 11 で出土している。

溝 10 では長頸壺が 1 点、溝 11 からは杯蓋・提瓶・瓶が出土している。溝 10 の長頸壺は、神野大林窯跡群（加古川市神野町）の 2 号窯もしくは同遺跡の流路 2 のうちに類似品をみることができる。また溝 11 の杯蓋・提瓶も神野大林 2 号窯もしくは流路 2 に類例がみられ、陶邑 TK43 号窯（大阪府堺市）の時期に比定できる。いずれも出土溝の最終埋没年代 6 世紀後半を示す資料と考えられる。

古代の出土遺物は、溝 13・14 でまとまって出土している。

溝 13 出土の須恵器のうち 166・170・172 で「福器」もしくは「福口」の墨書が認められる。この「福器」の墨書き土器は、昭和 63 年度加古川市教育委員会による調査（第 6 図 L 地点）でも出土しており、今回出土品と同様な器種、器形に墨書きされている。今回の出土品のうち 166・167 には施釉がないものの灰釉陶器の器形を探り、さらに縁袖陶器 168 がみられる。これら溝 13 出土の「福器・福口」の墨書きされた土器を含む 166～174、鉢 D 179 の一群の須恵器は、平安京右京三条三坊五町（京都府京都市）SD19 出土品に類似し、加古川地域の須恵器生産地においては、志方窯跡群中谷 1 号窯（加古川市志方町）出土の須恵器群に近いものとみられる。したがって溝 13 は、9 世紀前半を中心とする時期に掘削され、土師器皿 187・190、椀 183、高杯脚 191 もこれに伴うとみられる。

一方、溝 13 出土遺物のうち須恵器碗 173・174・175・177・178 は神出產（兵庫県神戸市）の須恵器群とみられ、鶴谷 3 号窯第 2 次操業窯出土の須恵器に類似し、10 世紀中葉を前後する時期には溝は埋没していたと考えられる。

溝 14 出土の須恵器は、志方窯跡群中谷 1 号窯出土の杯 A、杯 B、杯蓋、中谷 2 号窯の杯 B を含み、溝 13 の古相の土器群と同時期と考えられ、溝 13 と溝 14 が相前後して掘削されたものとみられる。

また、出土瓦は少なく瓦当は伴わないが、溝 13 出土の平瓦 196、溝 14 出土の平瓦 207 は加古川市神野町石守の石守廃寺出土瓦の斜格子タタキに類似するタタキが用いられている。この斜格子タタキを用いた瓦は、本遺跡に近い坂元遺跡でも散見し、加古川左岸中下流域における瓦を介した地域的な結びつき的一面をみることができる。

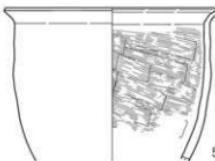
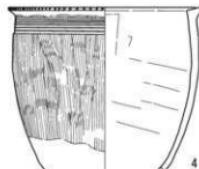
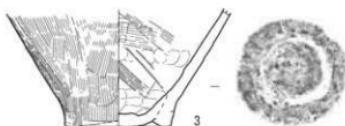
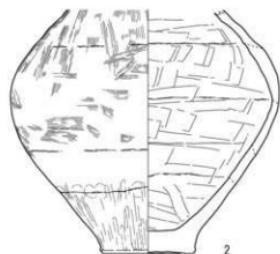
## (3) 石器

溝 1・溝 3・溝 11・溝 12 から石器が出土している。各遺構の性格や帰属時期と直接結びつくものとは考えられず、埋没時の混入品と考えられる。今回図化したものは下表の 7 点である。

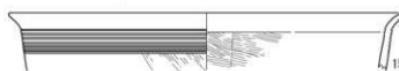
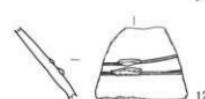
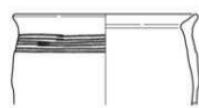
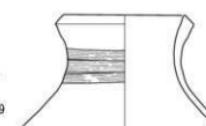
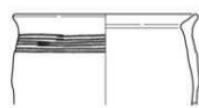
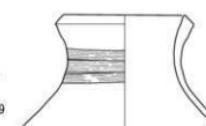
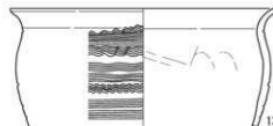
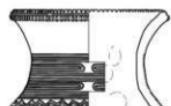
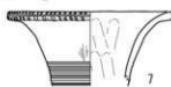
報告番号	出土遺構	種別	器種	法量				石材	備考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
S 1	溝 1	石器	打製石鏹	>2.4	1.5	0.4	1.7	サヌカイト	凸基無茎式
S 2	溝 3	石器	打製石鏹	2.35	1.3	0.2	0.6	サヌカイト	凹基式 五角形鏹
S 3	溝 3	石器	打製石鏹	2.3	1.35	0.4	0.7	サヌカイト	平基式 未製品*
S 4	溝 11	石器	打製石鏹	3.05	1.0	0.5	1.6	サヌカイト	凹基式
S 5	溝 11	石器	楔形石器	5.4	4.2	2.2	48.0	サヌカイト	
S 6	溝 11	石器	両刃石斧	>7.8	4.85	2.25	180.1	花崗岩	
S 7	溝 12	石器	砥石	10.85	4.95	4.3	293.5	シルト岩 (泥岩)	

表 3 石器観察表

井戸 1



溝 1-①



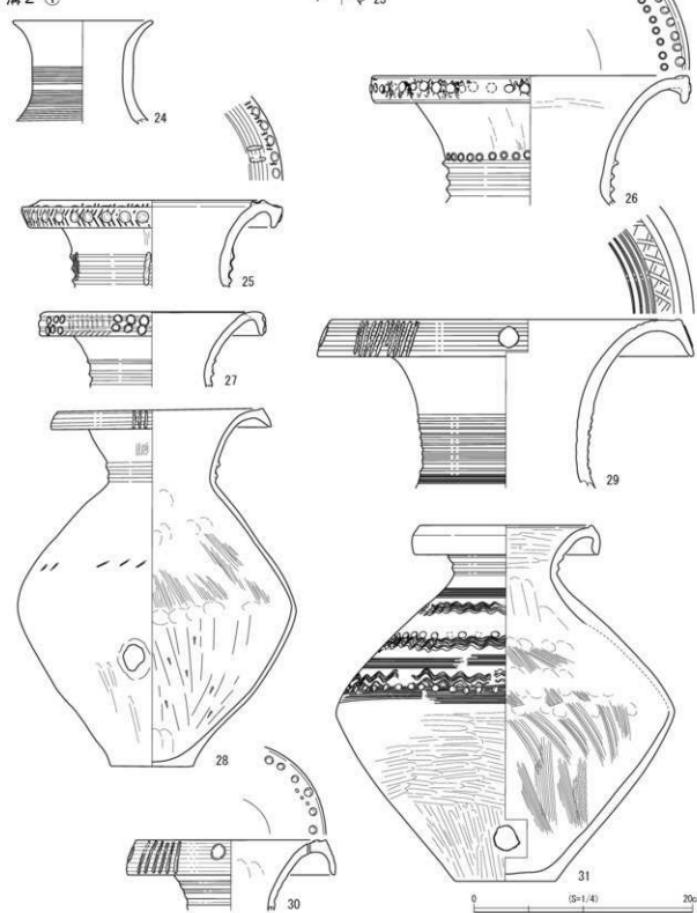
0 (5-1/4) 20cm

第23図 井戸 1・溝 1-①出土遺物

溝1-②

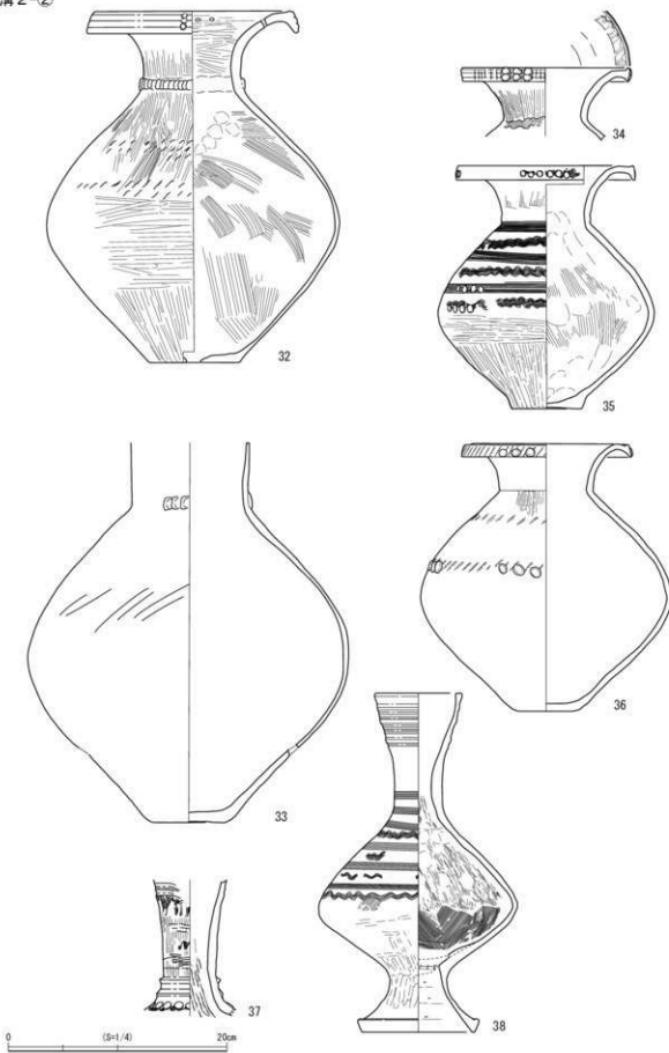


溝2-①



第24図 溝1-②・2-①出土遺物

溝2-②



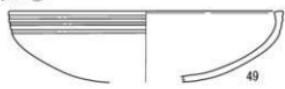
第25図 溝2-②出土遺物

溝2-③



第26図 溝2-③出土遺物

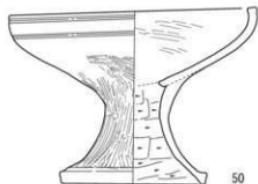
溝2-④



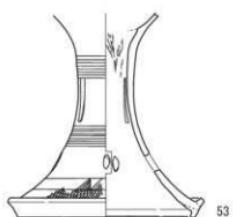
49



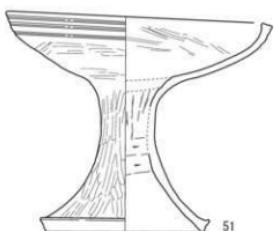
52



50



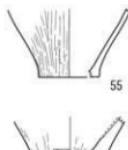
53



51



54



55



56

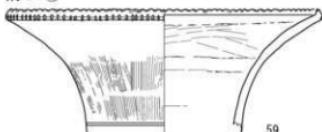


57



58

溝3-①



59

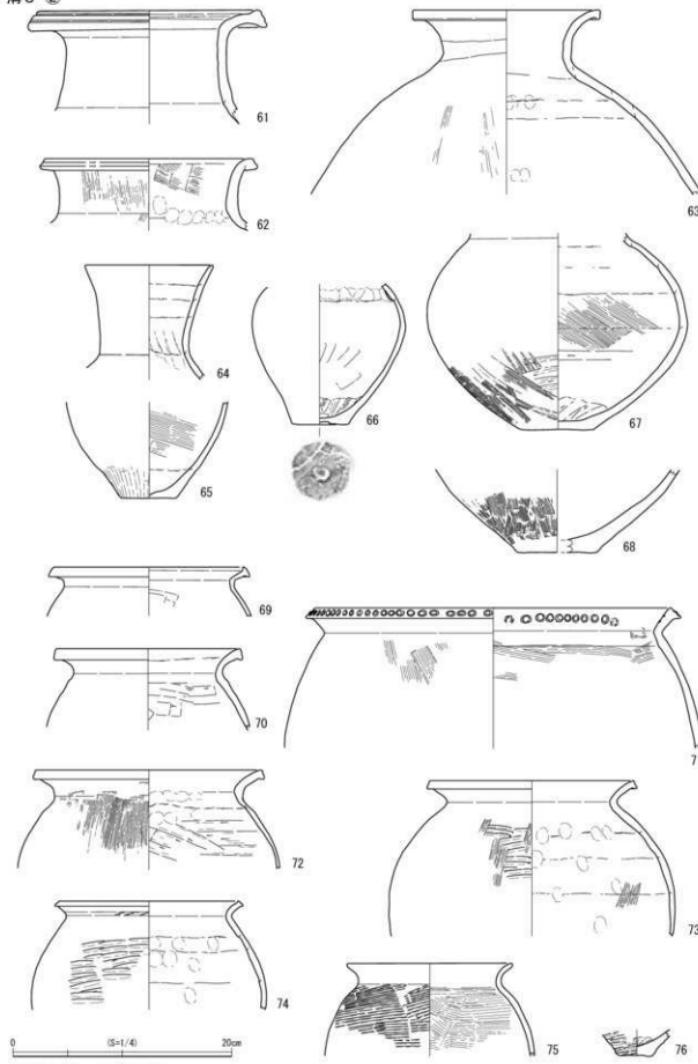


60

第27図 溝2-④・3-①出土遺物

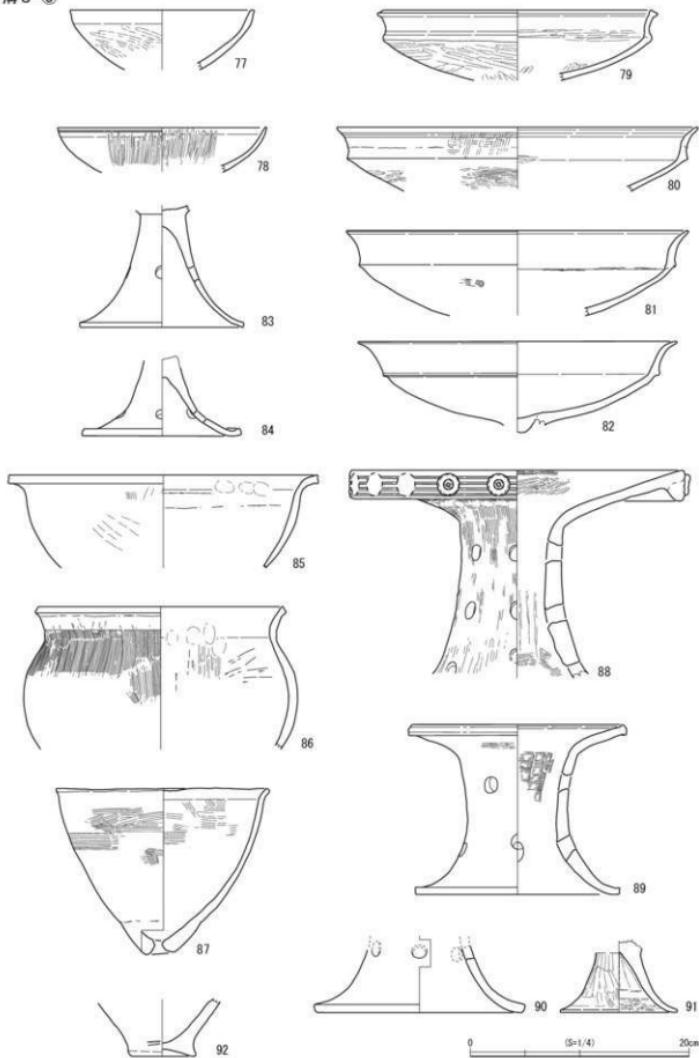
0 (S=1/4) 20cm

溝3-②



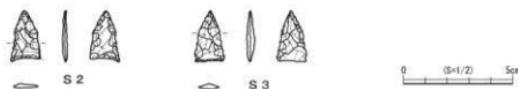
第28図 溝3-②出土遺物

溝3-③

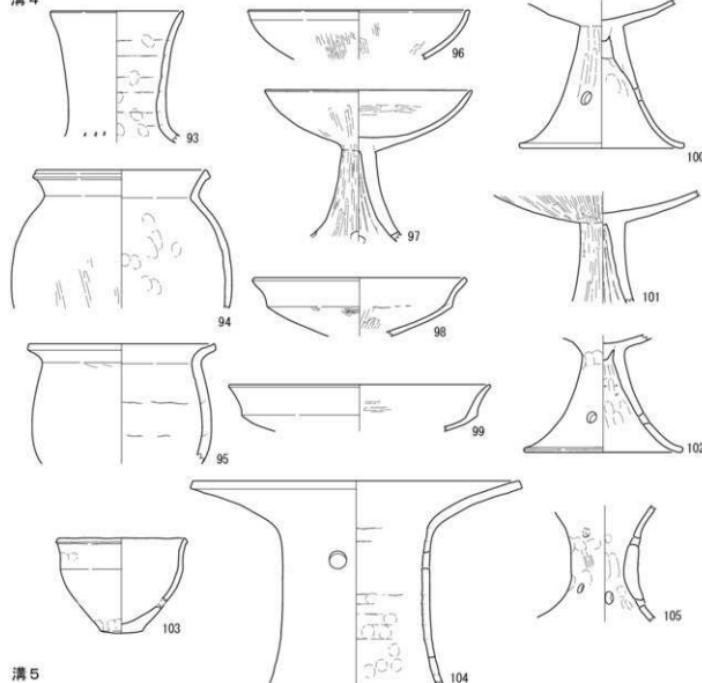


第29図 溝3-③出土遺物

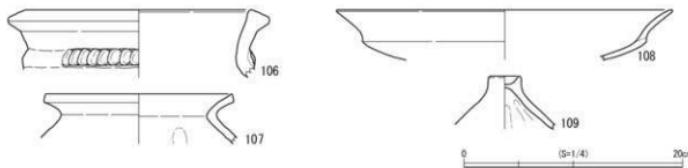
溝3-④



溝4

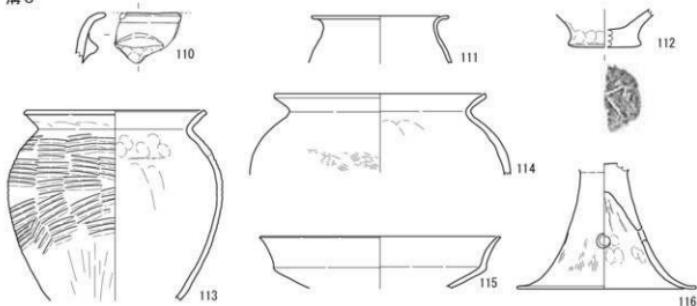


溝5

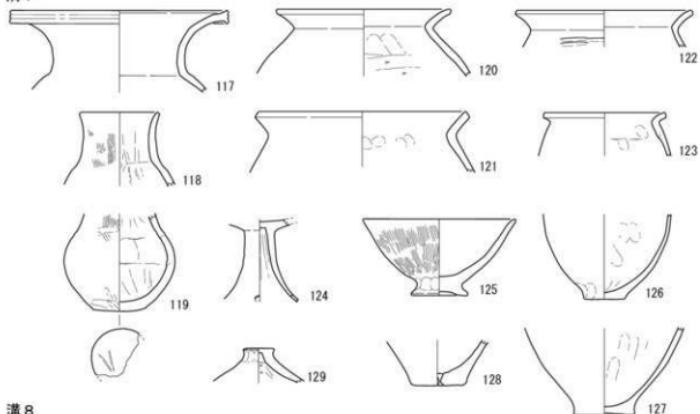


第30図 溝3-④・4・5出土遺物

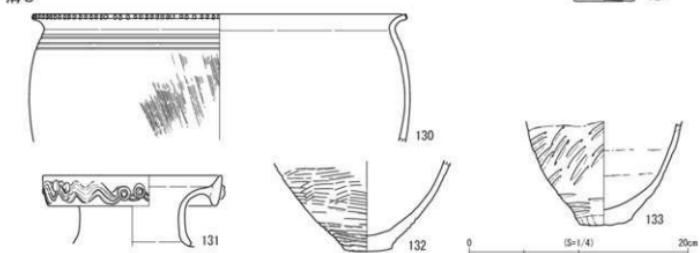
## 溝6



## 溝7

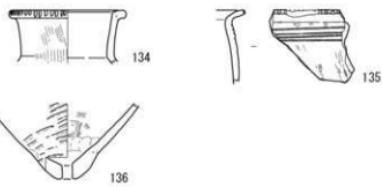


## 溝8

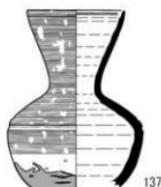


第31図 溝6・7・8出土遺物

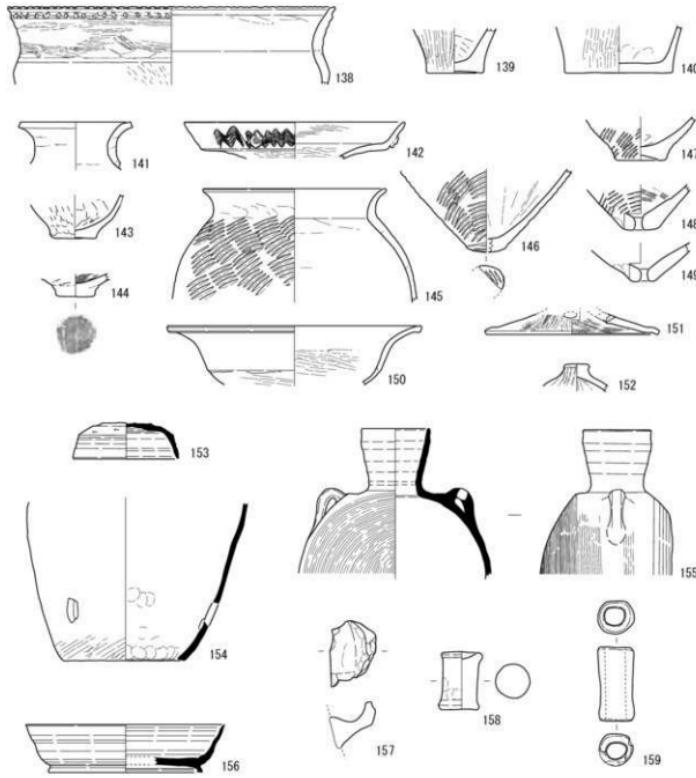
溝9



溝10



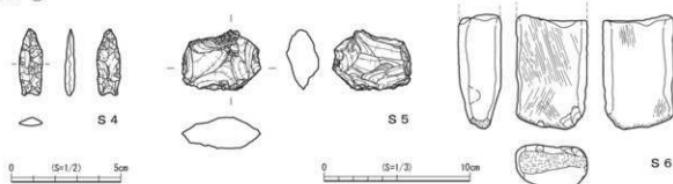
溝11-①



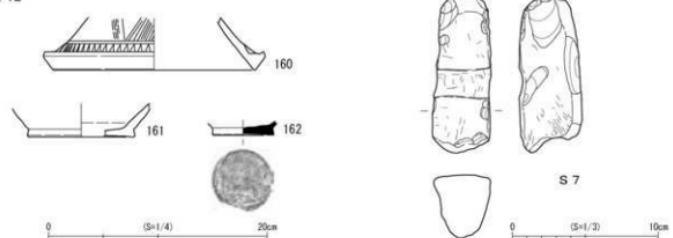
0 (5-1/4) 20cm

第32図 溝9・10・11-①出土遺物

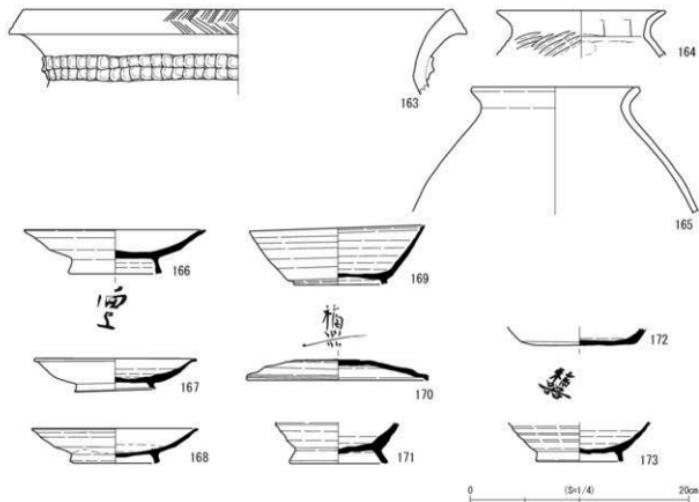
## 溝 11-②



## 溝 12

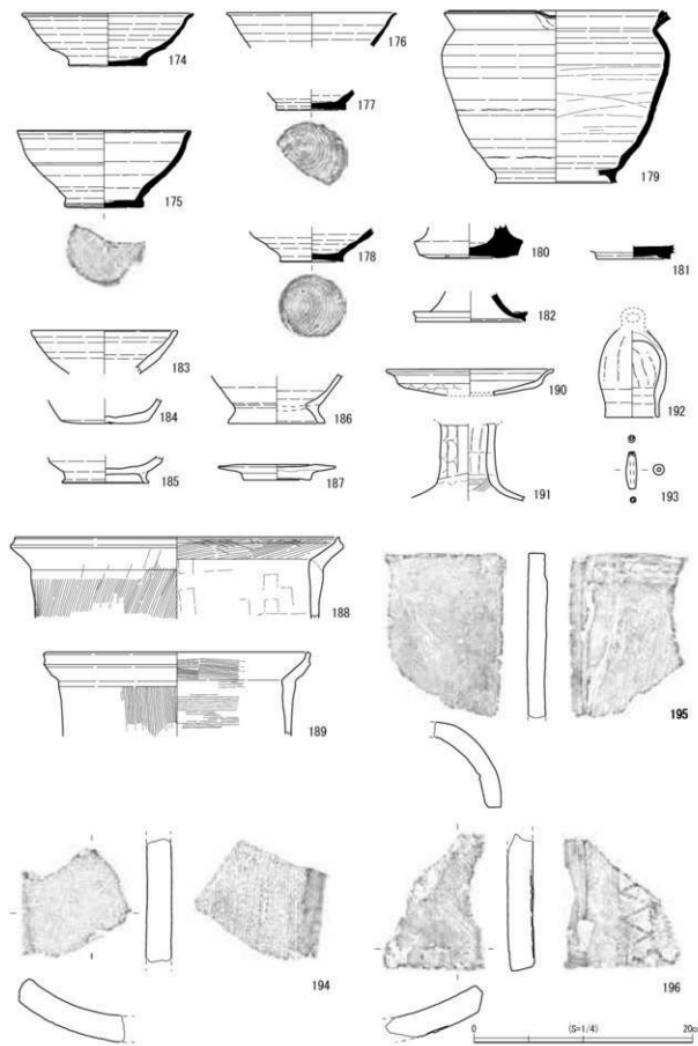


## 溝 13-①

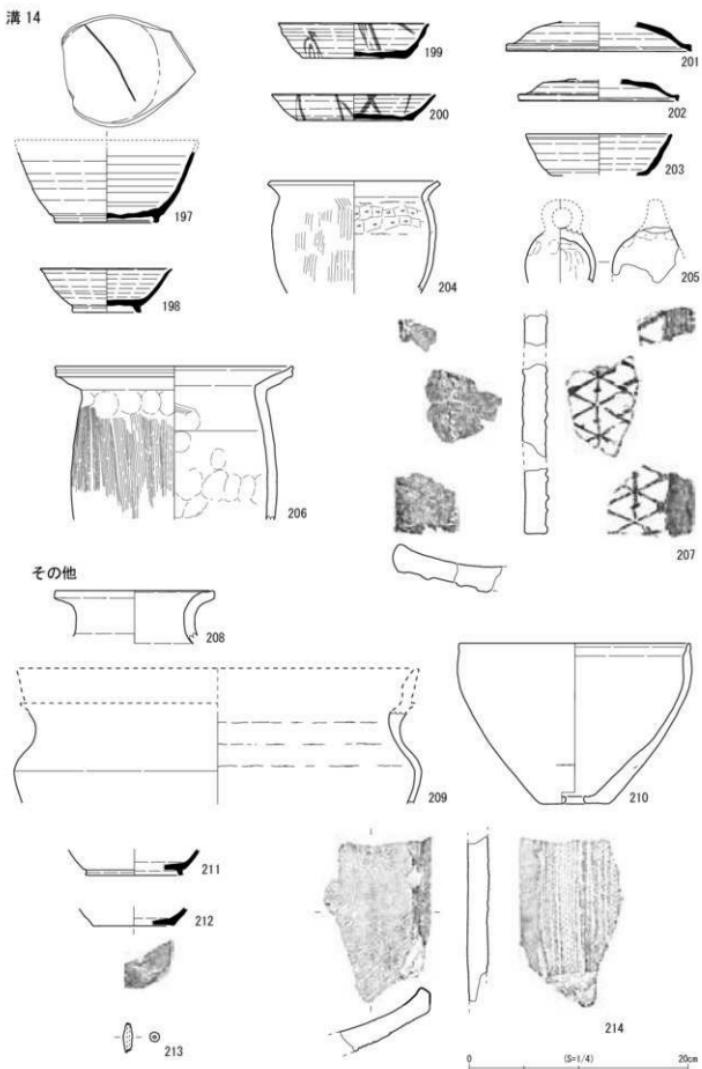


第33図 溝11-②・12・13-①出土遺物

溝13-②



第34図 溝13-②出土遺物



第35図 溝14・その他出土遺物

第Ⅱ章 溝之口遺跡の調査成果

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)				所見
				口径	器高	底径	腹径	
1	井戸1	弥生土器	壺		5.0			外縁ハケ付、肩部小片付、へづ引き状況、輪郭文、スヌ付着 内面コリナラナダ
2	井戸1	弥生土器	壺	>22.4	8.0		24.8	外縁底部上部ハケ付ナダ、下部へづ引き、コリナラナダ、輪郭ハケ、黒斑 内面ハマ付、内面コリオサユハケメ
3	井戸1	弥生土器	壺	>10.8	9.8			口縁コリナダ、底部に崩れ目、外縁底部ハケ付、肩部にへづ引き状況、黒斑 内面ボロナダ
4	井戸1	弥生土器	壺	*17.6	>15.1			口縁コリナダ、底部に崩れ目、外縁底部ハケ付、肩部にへづ引き状況、黒斑 内面ボロナダ
5	井戸1	弥生土器	壺	*19.4	>14.1			口縁コリナダ、外縁底部調査不明、内面ハケメ
6	井戸1	弥生土器	壺	>5.6	8.0			外縁ハマ付、内面ボロナダ
7	溝1	弥生土器	壺	*14.8	>6.9			口縁外縁コリナダ、水平方向に肥厚、外縁にへづ引き状況 内面ナダ
8	溝1	弥生土器	壺	*11.6	>7.0			口縁コリナダ、石塼端部に貼付突起、棒状工具押捺による折目、頭部にへづ引き状況 内面風化のため不明
9	溝1	弥生土器	壺	*15.2	>1.65			外縁ナダ、石塼端部に貼付突起、棒状工具押捺による折目、頭部にへづ引き状況 内面ナダ
10	溝1	弥生土器	壺	13.6	>9.7			外縁ナダ、口縁端部に沈鉢、崩れ目、頭部に半截竹管或輪文、清水文、波状文 内面ナダ
11	溝1	弥生土器	壺	11.0	>11.0			口縁コリナダ、頭部外縁に崩れき痕輪文 内面風化のため不明
12	溝1	弥生土器	壺		>6.8			外縁ナダ、蓋部に貼付突起、内面ナダ
13	溝1	弥生土器	壺	*14.4	>11.0			口縁コリナダ、外縁底部に崩れき波状文、底盤文の拂り面、黒斑 内面ナダ
14	溝1	弥生土器	壺	*16.5	>8.4			口縁コリナダ、外縁に竹管唇に上る沈鉢、スヌ付着化粧付 内面風化のため不明
15	溝1	弥生土器	壺	*36.0	>5.3			外縁コリナダ、へづ引き状況、薄くスヌ付着、内面ハケメ
16	溝1	弥生土器	壺	*21.6	>8.0			口縁コリナダ、内面以下不明、内面ナダ
17	溝1	弥生土器	腰底部		>10.6	8.6		外縁ハマ、黒斑 内面ナダ、底面不定方向のへづけ目、やや上げ底状
18	溝1	弥生土器	腰底部		>6.9	7.7		外縁ハマ、黒斑 内面ナダ、底面ハナナダ付にやや上げ底
19	溝1	弥生土器	腰底部		>5.45	5.2		外縁ハマ、下端部にコリオサユ 内面工具のあり、底面コリオサユ
20	溝1	弥生土器	鉢		>7.0	6.1		外縁ナダ付、底部中央に形成前穿孔、 内面ナダ付、スヌ付着化粧付
21	溝1	弥生土器	脚台		>6.1	6.4		外縁ナダ付、脚行根付コリオサユ、脚部端コリナダ 内面ナダ、底面コリオサユ
22	溝1	弥生土器	壺		>8.1			外縁ハマ、下端部コリオサユ、上面コリオサユ、ナダ 内面コリナダ
23	溝1	弥生土器	壺		>3.4			外縁ナダ、上端コリオサユ、内面ナダ
24	溝2	弥生土器	長頭壺	12.4	>9.45			内面表面、調査不明、頭部に崩れき痕輪文
25	溝2	弥生土器	広口壺	*20.2	>8.1			口縁コリナダ、外縁に崩れき跡、底部下へづ引き腰文、刃形浮文貼付、頭部 ハケ付、下端三面切削孔(左・右・本孔)付、棒状突出、内面底部に断面三角形突起2本、 輪状浮文・内蔵、竹管唇付、円形浮文、底部調査不明
26	溝2	弥生土器	広口壺	*28.5	>11.9			口縁一部コリナダ、下に脚行根付、底部断面3角形突起3本、本孔 内面底部に円形浮文・竹管唇、頭部ナダ
27	溝2	弥生土器	広口壺	*19.0	>6.9			内外表面に崩れ、調査不明、口縁端面輪文・円形浮文・ハラ剥付、頭部下に断面3角 形突起3本
28	溝2	弥生土器	広口壺	18.7	32.7	7.6	25.8	口縁へづけコリナダ、底部に圓錐文・棒状浮文・円形浮文、剝離?、外縁底部ハマ付、下端 三面切削、底部調査、底部調査不明、剝離下方に刃形文、下半孔付、焼成後穿孔 内面底部にコリナダ、底部ハマ付、底部コリオサユ、底部ハマ付
29	溝2	弥生土器	広口壺	31.6	>14.0			口縁一部コリナダ、底部に圓錐文・棒状浮文・円形浮文、外縁底部に本の低い突起、 頂下に崩れき跡、輪文
30	溝2	弥生土器	広口壺	*17.2	>6.5			内外表面に崩れ、調査不明、口縁端面輪文・円形浮文・ハラ剥付、頭部4枚の凹面文、 内面底部に進道して円形浮文・小円孔
31	溝2	弥生土器	広口壺	15.6	32.6	9.1	30.8	口縁一部コリナダ、底部に圓錐文・棒状浮文・円形浮文、下部孔付、底部ハマ付、頭部上半ハマ付メタード後根付 5面輪文・波状文・円形浮文、外縁底部ハマ付、下端に脚行工具痕文突起 内面底部ハマ付、底部コリオサユ、底部ハマ付コリナダ、底部ハマ付コリオサユ・ハラ剥離、底部ハマ付
32	溝2	弥生土器	広口壺	17.8	32.1	8.8	26.8	口縁一部コリナダ、底部に圓錐文・円形浮文、外縁底部ハマ付、下端に脚行工具痕文突起、 底部上半ハマ付、底部ハマ付、底部ハマ付コリオサユ・ハラ剥離、底部ハマ付
33	溝2	弥生土器	広口壺		>34.8	6.4	29.2	外縁側面、調査不明、頭部下端に脚行工具痕文突起、底部下方に長い脚行、黒斑 内面ナダ
34	溝2	弥生土器	広口壺	*15.0	>6.6			内外表面にコリナダ、上に肥厚した口縁端面に圓錐文・タマ割れ、円形浮文、頭部ハマ 頭部ハマ付、底部ハマ付 内面ハラ剥離、底部ハマ付

表4 遺物観察表(1)

報告 番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)				所見
				口径	器高	底径	腹径	
				※16.0	22.2	6.4	*19.8	
35	溝2	弥生土器	広口壺	13.4	24.4	5.0	23.0	口縁ヨコナメ、端面に鶴巣き波状文・円刻文 外面部ハケス、下端に強いヨコナメ 内面部ヨコナメ・ビナゲテ 体部下段ハケス 幾何文
36	溝2	弥生土器	広口壺					内面部に横縞模様に軽く文・圓刻文・円周浮文 体部下段ハケス 幾何文
37	溝2	弥生土器	細頸壺		>12.5			内面部ヨコナメ 体部ハケス 下端ヨコナメ
38	溝2	弥生土器	細頸壺	7.8	30.5	10.2	18.2	口縁ヨコナメ、端面水平に肥厚 幾何文 体部ハケ後脚引き波状文・波状文 下垂ハケス 他の側面ヨコナメ 黒錆
39	溝2	弥生土器	細頸壺		>24.2	10.5	17.7	外面部に体部上半横縞模様波状文・武蔵文 下垂ハケス 黒錆 合面部にハケ引き波状文
40	溝2	弥生土器	細頸壺		>25.7			内面部ヨコナメ 体部下段ヨコナメ 黒錆 内面部は盤足状(斜削) 黑色石織物付着
41	溝2	弥生土器	水差し	10.1	30.0	6.0	19.1	口縁ヨコナメ、波状文 体部ハケ 端面に把手 底部ヨコオサエ スズ付村
42	溝2	弥生土器	水差し	9.4	24.6	10.1	20.3	口縁ヨコナメ、端面把手手前で傾きながら立ち、底面から外側に斜り込み 手前把手の傾き元 体部ヨコナメ 波状文 下垂ハケス 黒錆
43	溝2	弥生土器	水差し	10.0	>20.7		18.2	内面部ヨコナメ 体部上半横縞模様波状文 下垂ハケス 黒錆 体部下段ハケス 指紋文
44	溝2	弥生土器	無頸壺		*17.0	>7.2		口縁ヨコナメ 内面部に圓文・小円孔 以下ハケス 内面部調整不明
45	溝2	弥生土器	無頸壺		>4.1			外底部ヨコナメ 端面に圓文・小孔
46	溝2	弥生土器	甕	※17.0	>9.0			内面部ヨコナメ 端面を傾き部分は斜削・欠損
47	溝2	弥生土器	把手付鉢	11.2	13.1	8.5		口縁ヨコナメ 外面部傾斜 下端に圓文 『左牛』 肩方向に把手(断面に挿入) 内面部調整不明 手前把手付村(印目)、以下ハケス 黒錆(盤足) 剥落
48	溝2	弥生土器	把手付鉢		>15.0	12.8		外底部ヨコナメ 手前把手(断面に挿入) 内面部調整不明 手前把手付村(印目)、以下ハケス 黒錆(盤足) 剥落
49	溝2	弥生土器	高坪		*24.8	>6.5		口縁ヨコナメ 外面部傾斜 下端に2条の圓文 『左牛』 肩方向に把手(断面に挿入) 内面部調整不明
50	溝2	弥生土器	高坪	22.4	16.3	12.9		口縁ヨコナメ 外面部傾斜 下端に2条の圓文 『左牛』 肩方向に把手(断面に挿入) 内面部調整不明 手前把手(断面に挿入) 剥落
51	溝2	弥生土器	高坪	24.6	20.2	12.3		口縁ヨコナメ 外面部傾斜 下端に2条の圓文 『左牛』 肩方向に把手(断面に挿入) 内面部調整不明 手前把手(断面に挿入) 剥落
52	溝2	弥生土器	高坪	20.3	>7.8			口縁ヨコナメ 外面部傾斜 下端に2条の圓文 『左牛』 肩方向に把手(断面に挿入) 内面部調整不明 手前把手(断面に挿入) 剥落
53	溝2	弥生土器	高坪		>18.7	16.3		内面部ヨコナメ 不規則な凹凸 へん曲文・直線文・方角文・S字彎曲文・斜彎曲文・格子文 墓地(?)上に放置(?)印目、以下ハケス 黒錆(盤足) 剥落
54	溝2	弥生土器	底部		>8.5	9.0		内面部ヨコナメ 破損工具付村(印目) 内面部ヨコオサエナメ
55	溝2	弥生土器	底部		>6.3	5.6		内面部ヨコナメ 底部中央に成形隙穿孔
56	溝2	弥生土器	底部		>5.0	5.8		内面部ヨコオサエナメ 底部中央に成形隙穿孔
57	溝2	弥生土器	鉢		>7.9	4.8		内面部ヨコナメ 底部中央に成形隙穿孔 内面部ヨコオサエナメ 工具痕
58	溝2	土師器	鉢	※10.6	10.6			口縁ヨコナメ 外面部板ナメ 内面部ヨコオサエナメ 模範式名平鉢
59	溝3	弥生土器	広口壺	※28.0	>11.6			口縁ヨコナメ、端面下に刺み目 外面部ハケス ヘラ脚引き波状文 内面部ナメ
60	溝3	弥生土器	鉢	※43.6	>23.3			口縁ヨコナメ、端面に2条の圓文 内面部調整不明
61	溝3	弥生土器	広口壺	20.0	>10.5			口縁ヨコナメ、端面に2条の圓文 内面部共に磨減 調整不明
62	溝3	弥生土器	甕	※19.1	>6.5			口縁ヨコナメ 外面部ヨコナメ 内面部ヨコナメ
63	溝3	弥生土器	広口壺	17.0	>16.9			口縁ヨコナメ、端面に輪縞模様 外面部ハケス後ミガキ 内面部ヨコナメ
64	溝3	弥生土器	長頸壺	11.7	>10.5			内面部ヨコナメ 内面部横縞模様 端面下端にS字彎曲文 内面部調整不明
65	溝3	弥生土器	甕		>8.8	5.0		外底部ヨコナメ 底部ハリタマ 磨減ヨコナメ
66	溝3	弥生土器	甕		>12.9	5.2	14.0	内面部ヨコナメ ナメドリ
67	溝3	弥生土器	甕		>18.0	6.5	23.9	内面部ヨコナメ ナメドリ
68	溝3	弥生土器	甕	※32.4	>20.5	*7.2		内面部ヨコナメ 内面部調整不明 斜状化物付着
69	溝3	弥生土器	甕	※17.2	>5.6			口縁ヨコナメ 外面部調整不明 内面部ヨコナメ
70	溝3	弥生土器	甕	※16.8	>7.5			内面部ヨコナメ 内面部ヨコナメ
71	溝3	弥生土器	甕	※32.6	>12.9		*38.2	口縁ヨコナメ、端面と内面に竹管跡跡文 外面部ハケス
72	溝3	弥生土器	甕	※20.6	>9.1			口縁ヨコナメ、外面部ハケス付村 内面部ヨコナメ

表5 遺物觀察表(2)

## 第Ⅱ章 溝之口遺跡の調査成果

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)				所見	
				口径	器高	底径	腹径		
73	溝3	弥生土器	甕	*18.6	>14.3		*26.2	口縁コナゲ 外面全体タキ後ハケメ 内面全体輪縫み直・コビオサエ直	
74	溝3	弥生土器	甕	*16.4	>10.0		*11.5	口縁コナゲ 外面全体タキ後ハケメ 内面全体輪縫み直・コビオサエ直	
75	溝3	弥生土器	甕	*15.0	>9.5			口縁コナゲ 外面全体タキ後ハケメ 内面全体輪縫み直・コビオサエ直	
76	溝3	弥生土器	甕		>2.4	3.0		外腹タキを 内面斜状に工具痕	
77	溝3	弥生土器	高坪	*16.8	>5.45			口縁コナゲ 外面ハケメ 内面ハゲメ	
78	溝3	弥生土器	高坪	*19.0	>4.1			口縁コナゲ 開斎文 外面全体タキ後ハケメ 内面ハゲメ	
79	溝3	弥生土器	高坪	*24.4	>6.5			口縁コナゲ 各面全体タキ後ハケメ 内面ハゲメ	
80	溝3	弥生土器	高坪	*33.0	>5.85			口縁コナゲ 各面全体タキ後ハケメ 内面ハゲメ	
81	溝3	弥生土器	高坪	*31.2	>7.8			外腹ハケメ ハケ 内面口縁部正面に輪縫み痕	
82	溝3	弥生土器	高坪	29.2	>8.35			内外面共に磨滅 調整不明 黒斑	
83	溝3	弥生土器	高坪		>11.2	*14.8		内外面共に磨滅 調整不明 内折透かし	
84	溝3	弥生土器	高坪		>7.3	*13.6		内外面共に磨滅 調整不明 内折透かし	
85	溝3	弥生土器	鉢	*28.2	>8.5			口縁コナゲ 外面ハケタキ後ハケメ 内面全体タキ後ハケメ	
86	溝3	弥生土器	鉢	*22.2	>13.1		*25.0	口縁コナゲ 外面全体タキ後ハケメ 内面全体タキ後ハケメ	
87	溝3	弥生土器	鉢	19.3	15.3	2.7		口縁コナゲ 外面全体タキ後ハケメ 斜面中央に施用穿孔、輪縫み直 黒斑 内面全体タキ後ハケメ 下ハゲメ	
88	溝3	弥生土器	器台	30.4	>19.1			口縁コナゲ 前面に施用穿孔付タキ後ハケメ 内面受部ハケメ 下面口縁部コビオサエ直 内面受部ハケメ ハケ 内面透かし丸く斜め	
89	溝3	弥生土器	器台	*19.2	15.6	18.6		口縁コナゲ 外面ハケメ ハケ 内面透かし 上段3分、下段4分 輪縫コナゲ 黑斑 内面全体ハケメ	
90	溝3	弥生土器	器台		>5.7	18.8		内外面共に磨滅 調整不明 内折透かし 黑斑	
91	溝3	弥生土器	脚台		>6.7	10.7		外腹ハケメハケメ 黑斑 内面ハケメハケメ 輪縫ハケメコナゲ	
92	溝3	弥生土器	底部		>5.2	6.0		外腹タキ？ 内面調整不良 黑斑・コビオサエ	
93	溝4	弥生土器	長頸甕	12.0	>12.1			外腹磨滅 調整不明 洞開下端に軋突痕点文 内面コビオサエ直 輪縫ハケメ黒斑者	
94	溝4	弥生土器	甕	*15.4	>12.7		*20.2	口縁コナゲ 外面全体タキ後ハケメ 黑斑 内面コビオサエ	
95	溝4	弥生土器	甕	*16.8	>11.0		*16.4	口縁コナゲ 外面ハケメ 輪縫み直	
96	溝4	弥生土器	高坪	*20.2	>4.5			口縁コナゲ 外面ハケメハケメ 内面ゼゼ	
97	溝4	弥生土器	高坪	*18.8	>13.9			口縁コナゲ 外面ハケタキ後ハケメ 内面透かし 黑斑 内面全体ハケメ ハケ 脚部ハゲ目	
98	溝4	弥生土器	高坪	*19.1	>5.4			口縁コナゲ 外面全体ハケメ 内面ハゲメ	
99	溝4	弥生土器	高坪	*23.8	>4.3			外腹磨滅 調整不明 黑斑 内面ハゲメ	
100	溝4	弥生土器	高坪		>13.7	14.4		外腹ハケメ ハケ 磨滅にコビオサエ直 内面透かし斜状上充填 内面全体ハケメ ハケ 脚部ハゲ目	
101	溝4	弥生土器	高坪		>10.3			外腹脚部ハケメ 不規則透かし	
102	溝4	弥生土器	高坪		>10.8	*14.2		外腹脚部上付付地にコビオサエ直 内面透かし推定3方向 ハク状粘土充填 内面全体ハケメ ハケ 地上部10cm、ハク付コビオサエ	
103	溝4	弥生土器	鉢	*11.4	(8.7)	3.8		口縁コナゲ 黑斑にコビオサエ直	
104	溝4	弥生土器	器台	*29.6	>18.7			外腹ナゲ 外面透かし2段埋存 内面ナゲコビオサエ直 輪縫み直	
105	溝4	弥生土器	器台		>10.7			外腹ナゲ 外面透かし2段 内面コビオサエナゲ	
106	溝5	弥生土器	短頭甕	*20.6	>6.2			口縁コナゲ 頭部に指印压痕又突起	
107	溝5	弥生土器	甕	*17.0	>4.6			内外面共に磨滅 調整不明	
108	溝5	弥生土器	高坪	*30.8	>4.6			内外面共に磨滅 調整不明	
109	溝5	弥生土器	直		>4.9			舟底頭部ナゲ 内面コビオサエ	
110	溝6	弥生土器	鉢		>4.6			口縁コナゲ 外面口縁部下に把手 内面ナゲ	
111	溝6	弥生土器	甕	*12.4	>4.4			内外面共に磨滅 調整不明 口縁内面底部に輪縫にスミ付着	
112	溝6	弥生土器	底部		>3.5	*6.8		内底底部コビオサエ 烧物による赤変跡 素面に磨滅	
113	溝6	弥生土器	甕	*16.2	>17.5		*19.6	口縁コナゲ 外面全体タキ後ハケメ 下半部に板付着 スス付着 黑斑のみ 内面ナゲ 可能にコビオサエ透着	
114	溝6	弥生土器	甕	*19.2	>7.4			外腹全体ハケメ 調整 他は磨滅のため不明 抵抗による赤変跡 素面に磨滅	
115	溝6	弥生土器	高坪	*21.9	>4.8			内外面共に磨滅 調整不明	
116	溝6	弥生土器	高坪		>11.5	*16.2		外腹ハケタキ？ 内面透かし4方 内面シザーリム コビオサエ	
117	溝7	弥生土器	広口甕	*19.8	>7.5			口縁コナゲ 端面には2つ輪縫	

表6 遺物観察表(3)

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)				所見
				口径	器高	底径	腹径	
118	溝7	弥生土器	直口壺	*7.0	>6.8			内面に頭部ハケメ 口部にナデ 黒斑 内面ナデ 口部にしづけ目
119	溝7	弥生土器	直口壺	>9.0	*4.8	*10.2		内面頭部ハケメ ボトムカズ 内面頭部に目口 以テビナデ 縫縫み痕
120	溝7	弥生土器	甕	*15.6	>6.2			内面黒化のため不明 内面肩部ビザゲ、以下ケズ
121	溝7	弥生土器	甕	*19.0	>5.6			内外表面に擦痕 調整不明 内面頭部にヨビサニ痕
122	溝7	弥生土器	甕	*15.8	>3.4			内外表面に擦痕 調整 不明 体部タタキ
123	溝7	弥生土器	甕	*11.0	>4.0			内面黒化のため不明 内面ヨビサニ、ヨビナデ 縫縫み痕
124	溝7	弥生土器	高环		>7.6			内面ヨリ 口部に凹形窓、既存3個 推定4方 内面肩部ビザゲ 肩部に目口
125	溝7	弥生土器	鉢	*13.9	7.0	5.0		外縁ハメ 底部ビオナエ 黑斑 内面ナデ 底部ナデ
126	溝7	弥生土器	鉢		>7.8	3.5		外縁底部ビオナエ 内面ヨビサニ、ヨビナデ
127	溝7	弥生土器	甕		*8.1	5.1		内面磨耗 調整不明 被焼による赤変・縫縫跡 黒斑 内面ヨリナデ?
128	溝7	弥生土器	甕		>4.2	4.2		内外表面に擦痕 調整不明 底辺中央に焼成程度の筋成背丸
129	溝7	弥生土器	蓋		>3.2			外縁上端部ヨビサニ、ナデ 内面ケズ
130	溝8	弥生土器	甕	*34.0	>11.5			口縁ヨリナデ、端部に施目 口外面体部ハケメ 口部にヘラ引き沈縫 内面ナデ?
131	溝8	弥生土器	広口壺	*16.2	>6.5			内面表面に摩耗 調整不明 ヨリ縫面に縫縫跡模状文・竹節文押捺印形浮文
132	溝8	弥生土器	甕		>8.3	4.3		外縁タキメ 縫縫み痕 黒斑 内面ケズ
133	溝8	弥生土器	甕		>9.6	4.7		外縁タキメ 縫縫み痕 底部 内面調整不不明 黑面ケズ
134	溝9	弥生土器	甕	*10.2	>4.9			口縁ヨリナデ、端部に施目 口外面体部ハケメ 口部にヘラ引き沈縫 内面ナデ? 無化焼付付着
135	溝9	弥生土器	甕		>6.7			内面タキメ 底部に焼成背丸 黑斑 内面ヨリナデ 底部土ビオナエナデ
136	溝9	弥生土器	有孔鉢		>6.9	1.5		口縁ヨリナデ、端部に施目 口外面体部ハケメ 口部にヘラ引き沈縫 内面タキメ 底部にヨビサニナデ
137	溝10	須恵器	長頸壺	*8.8	>16.4		*12.4	口縁部に施目、体部にヘラケズしている 内面にヨリ転ナデ
138	溝11	織文土器	浅鉢	*29.6	>7.1		*29.0	口縁部ヨリナデ イソジはヨリ下方に向ひ、胸高部はケズか。内面はナデ及びヨビサニ
139	溝11	弥生土器	甕底部		>4.1	5.2		内面ビキニ 斯マ社内 内面ヨビナデ 黑斑
140	溝11	弥生土器	甕底部		>4.3	9.8		内面ビキニ 黑斑 内面ヨビサニ直
141	溝11	弥生土器	広口壺	*10.0	>4.3			口縁ヨリナデ、外縁頭部ナデ 縫縫み痕 内面ナデ 縫縫み痕
142	溝11	弥生土器	二重口 線巻	*20.0	>3.4			口縁ヨリナデ 外縁頭部ヨリナデ 縫縫み痕 内面ナデ ヘラ引き沈縫 内面ヨリナデ 底部土ビオナエナデ
143	溝11	弥生土器	壺底部		>4.0	3.7		内面ヨリナデ 底部ビオナエ 黑斑 内面ヨリナデ 底部に木葉痕?
144	溝11	弥生土器	壺底部		>2.1	3.4		外縁工具のみあり 底部ビオナエ直 内面ハメ 底部に木葉痕
145	溝11	弥生土器	甕	*16.4	>10.5			口縁ヨリナデ 外縁頭部ビオナエ 体部背面にヨリ転文付着 内面ナデ
146	溝11	弥生土器	甕		>7.65	*3.2		外縁タキメ 底部にヨリ転文付着 内面底部ナデ 底部にタキメ
147	溝11	弥生土器	甕		>4.0	*4.3		内面タキメ スリ付着 袋縫にヨリ転文付着 本葉痕?
148	溝11	弥生土器	有孔鉢		>4.2	3.0		外縁タキメ 底部ビオナエ 中央に焼成背丸 内面ハメ
149	溝11	弥生土器	有孔鉢		>3.6	1.9		外縁底部ビオナエ 中央に焼成背丸 黑斑
150	溝11	弥生土器	高环	*23.0	>5.4			口縁ヨリナデ 手受け部内面ヨリナデ
151	溝11	弥生土器	高环	>2.9	*15.6			内面ハメヨリナデ 口部にヨリ転文付着 推定4方 内面ハメ
152	溝11	弥生土器	蓋		>2.5			内面ハメ 内面底部ハケメ
153	溝11	須恵器	杯壺	*9.6	3.3			口縫体部内外面ともヨリ転文ナデ 天井部分転ヘラケズ? ヘラ切により切離す
154	溝11	須恵器	瓶		>14.5	11.1		口縫底部はヨリ転文ナデ、内面はヨビサニで仕上げる
155	溝11	須恵器	提瓶	6.0	>13.7			体部前面に施目、口縫内外面にヨリ転文ナデ、体部背面はヘラケズで仕上げる
156	溝11	須恵器	杯	*18.2	4.4	*14.0		口縫体部と内外面均ヨリ転文ナデ、底面は内面不定方向のナデ、外面はナラに上心の調整
157	溝11	土師器	把手	長4.0	幅6.0	厚0.9		箆ナキヤ各施を以てる
158	溝11	土製品	不明	長5.3	幅3.15	厚3.1		箆ナキヤで口縫を以てる 箆面は箆ナキヤで成形する
159	溝11	土製品	土師	長6.8	幅2.9	厚2.2		全周にヨリ転文、断面形は四角形で、把手板を折り曲げて成形し、箆ナキヤ
160	溝12	弥生土器	高环		>4.8	*18.4		外縁脚端ヨリナデ 細縫文様・直縫文・三角形(末濃青) 黒斑あり 内面ナデ
161	溝12	土師器	杯		>3.1	*9.6		全体にヨリ転文ナデで仕上げる
162	溝12	須恵器	杯		>1.4	5.5		既成高台に舟切で切離す、体部・底部内面ヨリ転文ナデ
163	溝13	弥生土器	短頸壺	*39.6	>7.8			内面ヨリナデ 瓶縫にヘラカセ文 各面ナデ 瓶縫にヨリ転文交差形 内面ナデ

表7 遺物観察表(4)

## 第Ⅱ章 溝之口遺跡の調査成果

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)				所見
				口径	器高	底径	腹径	
164	溝13	弥生土器	甕	*15.4	>4.3			口縁ヨコナデ 外面体部タキ 内面ナデ 板ナデ
165	溝13	弥生土器	甕	*15.2	>11.7			内外面共に磨滅 調整不明
166	溝13	須恵器	台付皿	*16.6	(4.05)	*8.4		全体に口等に板ナデ 亂着
167	溝13	須恵器	皿	14.6	4.4	7.2		体部内外面ともに板ナデ、底部削り出し窓台
168	溝13	縁袖陶器	皿	*15.2	3.2	7.2		窓台端部はナデで内側に角張る 内外面ナデ
169	溝13	須恵器	杯	16.1	5.4	8.0		内外面共に板ナデ
170	溝13	須恵器	杯蓋	16.8	1.95			内面丁字型の板ナデ 外面天部はヘラケズリ 番者
171	溝13	須恵器	壺		>3.8	9.0		底部内外面仕上げナデ、外面未調査 体部・窓台回転ナデ
172	溝13	須恵器	杯	>1.7	10.6			底部を削りヘラケズリ 番者
173	溝13	須恵器	碗		>3.7	7.8		底部外表面はヘラ切削により未調整、全体に回転ナデ
174	溝13	須恵器	楕	*15.4	(4.85)	7.0		内外面共に板ナデ、底部はヘラ切削後ナデ調査
175	溝13	須恵器	楕	*15.8	(7.2)	7.2		内外面共に板ナデ
176	溝13	須恵器	楕	*15.6	>3.2			円輪ナデで仕上げる
177	溝13	須恵器	楕	>1.85	6.4			板状の板部を大切で切り離す
178	溝13	須恵器	楕	>3.2	5.8			円輪直切と板状窓台 全体に円輪ナデで仕上げる
179	溝13	須恵器	钵	*20.4	15.8	*11.2		内外面共に板ナデ、体部内面を不定方向の仕上げナデ
180	溝13	須恵器	鉢		>3.2	9.0		底体部の内外面共に板ナデ、底部外表面は縁部回転(ヘラケズリ) 中央はタテ方向のヘラケズリ
181	溝13	青磁	碗		>1.3	6.8		削り出し窓台の底脚部
182	溝13	須恵器	高杯	>2.8	*10.1			縁部斜片 口縁ナデで仕上げる
183	溝13	土師器	碗	*13.2	>4.0			厚手の土師器斜片 全体に回転ナデ
184	溝13	土師器	杯		>2.3	8.0		体部外表面、内面(12回転ナデ)、底部外表面は円輪(ヘラケズリ)
185	溝13	土師器	碗		>2.6	7.9		全体に削りナゲ、内外面の一部に縫合部
186	溝13	土師器	碗		4.5	8.9		施化摩擦面近く 調整不明
187	溝13	土師器	且	*6.8	1.4	*6.0		体部内外面回転ナデ、底部外表面ヘラケズリ
188	溝13	土師器	甕	*29.6	>7.4			体部外表面、内外面ナデ 口部底部回転ナデ、外面ヘラケズリ
189	溝13	土師器	甕	*23.8	>7.7			口縁外表面ヨコナデ、体部外表面タケナケ、口縁部内面横張
190	溝13	土師器	且	*15.0	>2.4			口縁部外表面ヨコナデ、体部外表面ヨコナケ、体部内面調整不明
191	溝13	土師器	高杯		>7.1			口縫合の高脚部
192	溝13	土師器	イイダコ型	*4.8	>8.0			体部内外面シボボギ直縫明瞭、指ナデによって全体を調整
193	溝13	土製品	土罐	長 3.4	幅 0.95			全体に指サヌカナデで仕上げる 番状
194	溝13	瓦	平瓦	長>11.3	幅>10.2	厚 2.2		凹面有目江筋、凸面溝目江筋、内面砂付着
195	溝13	瓦	契斗瓦	長>15.0	幅>9.5	厚 1.5		契斗瓦片 凹面有目江筋、凸面溝目江筋・切痕筋 石守寺平五丁稚-35回
196	溝13	瓦	平瓦	長>12.5	幅>6.6	厚 2.2		凹面有目江筋と内切筋、凸面溝目江筋 番面はヘラケズリ
197	溝14	須恵器	杯		>6.7	9.7		内外面共に板ナデで仕上げる
198	溝14	須恵器	杯	*12.0	4.0	6.1		内外面共に削りナデで仕上げる
199	溝14	須恵器	杯	*13.6	3.2	9.6		口縁部内面ヨコナデ、底部はヘラオジ直縫を残す
200	溝14	須恵器	且	15.0	2.4	10.6		口縫合部内面タケナケ、底部はヘラオジ直縫を残す
201	溝14	須恵器	杯蓋	*16.8	>2.7			口縫合部内面タケナケ、天井外表面(ヘラケズリ)
202	溝14	須恵器	杯蓋	*14.5	>2.0			口縫合部内面タケナケ、天井外表面(ヘラケズリ)
203	溝14	土師器	杯	*13.2	3.8	*8.6		口縫合部下に沈殿 リ縁部ヨコナデ、体部(2)ヨコナデ、底部はナデで仕上げる
204	溝14	土師器	甕	*15.2	>10.3			*15.0 製体部外表面タケナケ、黄緑内表面ヨコナデ、制体部上部(ヘラケズリ) 下部はナデ
205	溝14	土師器	イイダコ型		>5.1			6.4 ハサミの跡みを残す 全体をヨコナデで調整
206	溝14	土師器	甕	*21.6	>14.1			*18.5 外面削り下を ヨコナデ、制体部タケナケ 内面はヨコナデ、ナデで削り調整
207	溝14	瓦	平瓦	長>20.1	幅>9.9	厚 2.0		各辺3cm程度の斜格子の平行凹切筋は東方向の直縫に上り2分かれ中央突文をおく
208	その他	弥生土器	甕	14.4	>4.8			内外面共に摩滅 調整不明 内面に黒斑
209	その他	弥生土器	鉢		>8.5			口縁ヨコナデ 外面共に摩滅 調整不明
210	その他	弥生土器	鉢	*21.0	14.7	6.0		口縁ヨコナデ 内外面共に摩滅 調整不明 底部中央に施成前穿孔
211	その他	須恵器	杯		>2.4	*8.8		内外面共に内輪ナデ、縫合付高台
212	その他	須恵器	碗		>1.75	*7.2		内外面ともにナデ、底部回転未切
213	その他	土製品	土罐	長 2.7	幅 0.9			口縁ヨコナデ 内外面共に摩滅 調整不明 地成前穿孔
214	その他	瓦	平瓦	長>15.0	幅>8.5	厚 2.1		凹面有目江筋、凸面溝目江筋、端面ヘラケズリ

表8 遺物観察表(5)